霜島ケイ
KEI SHIMOJIMA

イラスト
ミギー

カラクリ荘の異人たち

～もしくは賽河原町奇談～



GA文庫

カラクリ荘の異人たち

～もしくは賽河原町奇談～

霜島ケイ

GA文庫


ダメだ、それに触っちゃ！



「こらあっ！　阿川太一！」

――いきなり元気のいい声が響いた。




彼女も今日は浴衣姿だ。
水色の朝顔の柄がよく似合って、
なかなか可愛い

カラクリ荘の異人たち
～あるいは賽河原町奇談～

霜島ケイ

GA文庫

カバー・口絵　本文イラスト

ミギー

目次

一章　空栗荘（からくりそう）０１４４号室……5
二章　付喪（つくも）……84
三章　夏の祭り……192

一章　空栗荘（からくりそう）0144号室

1

目の前を半魚人が歩いていた。

昔のSFだとか怪物映画に出てくるような、身体（からだ）は人間なのに緑の鱗（うろこ）が全身を覆っていたり顔にエラがついていたり、背中にヒレがあったりというようなヤツではない。見るからに魚である。背丈は大の人間の男ほど、鮒（ふな）みたいな魚なのに、まんま人の腕と足がにょっきりと生えている。まあ、手足だけで「半」は気がひけるというのなら、八魚二人くらいでどうだろうか。

そいつは尾鰭（おびれ）を引きずりながら二本の足で歩き、手には英国紳士のようなステッキを握り、頭にはシルクハットをかぶっていた。あんな縦に扁平（へんぺい）な頭の上で、帽子がよくずり落ちないものだと思う。

こちらに気がついたようだ。

手にしたステッキの先端をくるりと回し、もう一方の手でシルクハットを軽く持ち上げて礼

儀正しく会釈すると、お魚紳士は夕陽に長い影をひいてそのままよたよたと歩いていってしまった。

遠ざかる背鰭を見送って、阿川太一は呟いた。

「……なんか、思いっきり現実の世界じゃないっていうか」

現実ではない世界――すなわち異世界と呼ばれる場所は、実家から徒歩八分、電車で四十分、バスで十五分のところにあった。

ちゃんと地図にも地名が載っている。

その名を賽河原町という。

「ねえねえ、阿川君。阿川太一君だよね？　はい、では質問です。異世界へ行く方法があるとしたら、君はどうやって行きますか」

あれは高校の入学式から三日後のことだ。

休み時間。まだ名前も顔も一致しないクラスメートたち。ざわざわとバラけて馴染まない教室の空気に背を向け、ぼんやりと校庭を眺めていると、いきなり後ろから声をかけられた。

キミ、という呼ばれ方が耳新しかった。

振り返ると、目の前にぴしっと突きつけられた人差し指があった。そのむこうにショートヘアのくりっと目の大きな少女がいて、太一に笑いかけた。

「えっと、名前……誰だっけ？」
「あ、ひどいなあ。和泉栄奈だよう。入学式の時に隣にいたでしょ？」
出席番号の関係で隣にいたのは思い出したけれども、名前までは覚えていなかった。
「異世界って、何それ？」
訊き返すと和泉栄奈はちょっと目を瞠ってから、きゃらっと笑った。
「知らないの？　文字どおりのこの世界じゃない世界だよ。この世ならぬ場所。非現実。異なる時空間。別次元。言い方はいろいろあるけど、要するに私たちがいる現代の日本とは異なる世界のこと。ゲームとかファンタジー小説によくあるじゃない。実在しないはずの生き物がいたり、魔法が使えたり、帝国だったり王国だったり、動物や植物が人間の言葉をしゃべったり、空の月が二つも三つもあったりするの。それで主人公がある日突然、日常から切り離されて、そういう世界に放り込まれて右も左もわからないうちに冒険が始まりましたっていう設定」
眉をしかめて真剣な顔になったかと思えば、またぱっと笑顔に戻る。くるくるとよく表情が変わる子だ。おまけによくしゃべる。
「それはわかるけど、なんでそんなことを訊くのかってこと」
やっと口をはさむと、「あそっか」と言って、栄奈は首をすくめた。
「はーい、和泉栄奈、将来の夢は作家になることでーす。それで今、出版社の新人賞に応募するための小説を書きはじめたんだけど、ネタにつまっちゃって全然話がすすまないの。何か画

期的なアイデアがないかなと思って、新しいクラスのみんなに突撃インタビューしてるところでしたー。――というわけで、阿川君だったらどうやって異世界へ行く？　あ、穴に落ちるとかどっかのドアを開けるとか、魔法で召喚されたり事故で死にかけて目を開けたら別の世界だったってのはナシだよ。そういうのってもう全然新しくないから」

へえ、と思った。

自分と同じ年齢で将来なんてものを具体的に口にする人間がいるというのは、ちょっと新鮮だ。

「小説って、他人に聞いたアイデアで書いていいの？」

「うーん、その人に了承をとればいいんじゃないかなあ？　えっと、それじゃ、もし阿川君のアイデアのおかげで受賞して本が出たら、表紙の裏かあとがきに必ず『阿川太一君に捧げます』って書きます。誓います。……それでいい？」

采奈は宣誓するように片手をあげると、胸を張った。

なぜそんなに自信満々なのか、聞きようによっては「アブナイんじゃないかこいつ」なセリフだが、采奈が言うと不思議と嫌な感じはしなかった。天真爛漫に見える笑顔のせいかもしれない。

「車か電車で行けば？」

何も思いつかなかったので適当に言ったら、采奈は「ええーっ」という顔で唇をとがらせた。

「そんなの、つまんなーい。車で走ってたらいきなり霧が出てきて何も見えなくなって、気がついたら全然知らない場所にいましたって、そういうのってすごいありがち。あと電車で知らない駅に降りたらこの世じゃなかったとか、トンネルを抜けたら過去に行っちゃったとか。安易すぎ。そのへんの線路や道路を走っているだけで異世界に行けるんだったら、誰も苦労しないってば」

つまんない、の一言が小さな棘のようにちくりと胸を刺した。

「じゃあ訊くなよ」

「あ、……もしかして怒っちゃった？」

「べつに」

腹を立てたわけではない。ただ急に、それ以上会話をつづけることが億劫になった。

太一は窓に背中を押しつけた格好のまま、首だけ捻じってまた校庭に目をやった。入学式の時にはまだ薄紅色の花びらをこぼしていた桜が、ほんの二、三日で淡い緑色をまぶしたように若葉を伸ばしている。その風景に意地のように目を凝らした。

こういう態度がいけないんだろうな。頭ではわかっていた。愛想笑いでも浮かべて、「俺、そういうのよく知らなくてさ」とか何とか言えばいいんだ。それだけのことだ。

それだけのことが、できなかった。

――つまらないヤツ。

小学校でも中学でもそう言われた。阿川と一緒にいても楽しくない。あいつってノリが悪い。なんか暗い。同年代はそんな言葉で太一を表現したが、これが教師や親戚や近所の口さがないおばさん連中だともっとわかりやすい。いわく「無愛想で可愛げがない子」「無表情で何を考えているのかわからない」「感情表現に乏しい」等々。

仕方がない。自分でも、自分みたいな人間と一緒にいても楽しくも何ともないだろう、と太一は思う。

他人が「おもしろい」ということの何がおもしろいのかわからなくて、一緒に笑えない。周囲の人間の「悲しい」とか「嬉しい」とかの感情に同調できない。誰かと同じものを見ていても、同じことを感じない。それなのに相手につきあって話をあわせるのは、苦痛でしかなかった。

多分自分は、人間として大切なものが何か欠けているのだろうと思う。心とかいう部分のネジの一本か二本が、どこかへとんでしまっているのだ。

だから暗いとかノリが悪いとか無表情だと言われて敬遠される。おかげでこの年になるまで、友人と呼べる人間は一人もいない。

和泉栄奈とも、それきり言葉を交わすことはなかった。

そして今はもう、夏休みになっていた。

太一はたった今降り立ったばかりの停留所を見上げた。『賽河原中央』と書かれている。賽河原という地名を最初に聞いた時には、ずいぶん変な名だと思った。誰かが河原でせっせと石でも積んでいそうだ。

それで実際に来てみたら、名前が変どころではなかった。

バスを降りる寸前まで、そこには普通の、どこにでもあるような町の風景が広がっていた。郵便局があって古ぼけた小さな商店街があって、寺や神社があって小学校があって、何の変哲もない家々が道路の両脇に並んでいた。通り過ぎれば、もう記憶には残らない風景だ。

なのに目的の停留所に着いて扉が開き、足下の地面に一瞬目を落とし、バスが発進する音を背後に聞いて顔をあげると……視界ががらりと変わっていたのだ。

たった今までピカピカの青いガラスを嵌め込んだみたいだった空が、真っ赤に染まっていた。西の空にたなびく雲が金色に燃えている。

振り返れば、走り出したはずのバスはあとかたもなく消えていた。往来には人影もなく、音もない。町の佇まいはそのままだが、すべてのものが赤いゼリーのように重ったるい空気の中で、ひっそりと息をひそめて静止してしまったみたいだった。

太一は腕時計を見た。午後の一時を過ぎたばかりである。なのにこの光景はどう見ても夕暮れ時だ。黒い影が長く長く、足下から道路を横切るように伸びていた。

それでわけがわからず立ち尽くしていたら、くだんのステッキを手にした紳士風の魚が通り

かかったというわけだ。

プァー、プー。

突然、止まっていた空気がかき乱された。

金属的な響きとともに、キコキコと自転車のペダルを踏む音が通りの向こう側から近づいてきた。

「とおぉふぅ、がんもどきっ、とおぉふぅ、がんもどきっ」

威勢のよい声の合間に、パープーとラッパの音が鳴る。なるほど幟の立った自転車の後部には、墨で『豆腐』とだけ書かれた木箱が積んであった。

(ナマで豆腐売りを見るのって、初めてだ)

太一は目を瞬かせた。

珍しい。自転車を漕いでいるのが人間ほどもあるアマガエルとなれば、なおさらである。

「くださいな。豆腐を一丁、くださいな」

子供のように甲高い声がしたのでそちらを見ると、小さな金盥がとことこと走ってくるところだった。これにも虫のように細い手足が生えている。

「あいよ、豆腐一丁!」

アマガエルは自転車を停めて木箱の蓋を開けると、水掻きのついた手で水に沈んだ豆腐を掬い上げた。慣れた仕草で金盥の中にそれを移してやる。

「おじさん、ありがとう」
「まいどあり。二十円だ」
「ツケといてね」
「あいよ」
豆腐の重みでよろけながら礼を言う金盥に、カエルは「気をつけてお帰り」と声を返した。
そうか、と太一は納得した。
（おじさんだったのか）
カエルの性別は、顔を見ただけではよくわからない。
気温はまだ高いのに、急に肌寒さを感じて太一はぶるっと身震いした。
――阿川君だったらどうやって異世界へ行く？
ふと、和泉栄奈のくるくるとよく表情のかわる顔が浮かんだ。
「電車とバスを乗り継いで」
そう言ったら、またつまらないと言われてしまうだろうか。確かに栄奈が言うところの「安易」で「苦労しない」方法でこんなところへ来てしまったわけだが。
プァー、プー。
豆腐屋はラッパを吹き鳴らしながら、太一には目もくれずに自転車を漕いで走り去った。
太一はため息をつくと、ジーパンのポケットからくしゃくしゃに折りたたんだメモを取り出

した。バス停から目的地までの行き方が簡単に記されてある。昨夜、自分で地図を見て写したものだ。

——空栗荘。

カラクリソウ、とメモに記した目的地を口にした。

彼がこれから一人暮らしを始めるアパートの名前である。

「太一。おまえ、しばらく一人で暮らしてみないか」

父親であるところの阿川啓介がそう切り出したのは、一ヶ月ほど前のことだった。

「父さんの古い友人がアパートを持っていてな、この前たまたま会って話をしたら、どうも部屋の借り手を探しているらしいんだ。家賃は安いし賄いつきだから、学生にはもってこいのはずなんだが、建物が古いとか部屋に風呂とトイレがついていないとかの理由で、今の若い人にはどうしても敬遠されてしまうらしい。それで旧知のよしみというか、息子が高校生だと言ったら是非にと頼まれてしまってね。まあ、おまえが部屋を借りれば、あいつも助かるわけだから」

嘘がヘタだなと太一は思った。

息子の目から見ても、啓介は不器用な人間だ。真面目で優しくて、気が弱くて、他人を傷つけないための嘘さえ上手くつけない。

「大丈夫、おまえの高校から通えない距離じゃない。うちから通うのより近いくらいだ。おまえの年なら、よそで部屋を借りて一人で自由にやってみるのも楽しいんじゃないかな。……うん、もちろん、おまえさえよければの話だが」

ちょうど夕食が終わったばかりで、キッチンからは洗い物をする水音が聞こえてくる。太一がいる居間では、つけっぱなしになっていたテレビからバラエティ番組の賑(にぎ)やかな音楽が流れていた。

会話はキッチンには届いていないだろう。

「鈴子(すずこ)さんは何て言っているの？」

皮肉のつもりはなかったが、啓介は困ったような顔で微笑(ほほえ)んだ。

「彼女はまだ知らないんだ。話していない」

「鈴子さんが言い出したのかと思った」

啓介はため息をついた。

「そんなことはない。全然違うよ」

息子の顔をじっと見つめて、またひとつ、ため息。

「だが、そうだな……正直なところ、おまえと鈴子の双方のためにも、おまえは少しの間家を離れたほうがいいのかもしれないとは思っている」

それが本音なんだろうな、と太一は思う。

「鈴子さん」は父親の再婚相手だ。彼女が半年前に来てから、太一にとってこの家はぎこちない空気の流れる気詰まりな場所になった。鈴子のことを嫌っているわけではない。好きでも嫌いでもない。だが鈴子は再婚相手の子供に気を遣い、啓介は息子と新しい妻に気を遣い、家の中ではいつも誰かが誰かの言葉や表情を息をつめてうかがっているような、微妙な緊迫感が蜘蛛の糸のように張り巡らされている。

だから、父の申し出に太一はむしろホッとしていた。

「家賃は払ってくれるんだろ？」

「もちろんだ。それと必要な分の生活費も毎月渡す」

キッチンの水音がやんだ。

太一はテレビのリモコンを手に取ると、音量をあげた。キッチンにいる鈴子には何も聞こえないように。

それから、うなずいた。

「いいよ。——俺、家を出ても」

夕焼けは、まるで誰かが照明を消し忘れたみたいに、いつまでも空を赤く染めたままだった。時間が止まったような夕暮れ。見上げれば光に縁取られた紫色の雲が、ゆったりと流れていく。

「あーい、飴やぁ、飴飴、ヨカヨカ飴や飴――っ」
「アイスクリン、アイスクリン、冷たいの、召していらっしゃい、いらっしゃい」
「金魚ぉー金魚ぉ。出目金に黒金」
「毎度おなじみ、チリ紙交換車でございます、ご家庭でご不要となりました古新聞、古雑誌、ボロキレなどございましたら――」
地図を見ながら角を曲がるたびに、あたりはどんどんすごいことになっていった。
バス停の周辺は寂しいくらい静かだったのに、今や往来は活気と喧騒にあふれている。方々から押し寄せる物売りの声。視界をせわしなく行き交う大小様々の影。ざわざわ、ざわざわと赤い空気が震えていた。
太一は地図を握りしめると、ついに足をとめた。
（いくら異世界でも、限度ってものが）
さすがに目眩がしてきた。
チリ紙交換車はわかるとして、他のは一体何だろう。前後の二つの桶に棒を渡して担いでいる（ぼて振りというヤツか、もしかして）金魚売りやら、万国旗で派手に飾り立てた飴売りやら、時代劇から脱け出たような格好でもはや何を売っているのかわからない連中やら。
いや、それよりも問題は。
（人間が一人もいないんだけど）

物売りばかりか通行人まで、すべて人間の格好をした人間以外のモノである。犬や狐や熊や、ニワトリやトカゲや、それから――。

半分透き通った煙のようなもの。全身毛むくじゃらの黒いもの。頭部のほうがデカい肌色の雪だるまみたいなもの。牙のあるもの尻尾のあるもの目がひとつしかないもの。生き物ですらないものもいる。たとえばたった今、太一の目の前をトコトコと横切って行った、赤い前垂れつきのお地蔵さんとか。

（……このまま帰ったほうがいいかな）

この町に住むことになったとして、いろんな意味でご町内の方々との意志の疎通が難しそうだ。太一の場合、相手が人間でも難しいというのに。

今日は部屋の下見を兼ねて、アパートの大家に会うことになっている。よほどの問題がなければ、太一は数日のうちにでも引っ越しをすませるつもりでいた。

だけど、もしかしなくてもこの状況は「よほどの問題」の範疇ではないだろうか。

（異世界にあるアパートだし）

引き返すべきか、予定どおりに大家に挨拶に行くべきか。

――どうかしている。

太一は、いよいよ赤い空を見上げた。

普通の人間なら、最初に魚に足が生えて歩いているのを見た時点で逃げ出しているはずだ。

でなければ、自分の頭が狂ったと思うか、これは夢だと決めつけるか。悲鳴をあげるとか、パニックを起こすとか。いずれにせよ、人としてそれが正しい反応というものだろう。

（俺ってやっぱり、他人よりいろんなことが鈍いんだろうな）

感覚とか感情とかの目盛りが、きっとどうしようもなく、他の人間よりも狂っているのだ。このまったく現実ではありえない光景を前にしてまだ、家へ帰るかこのままアパートへ向かうか、迷っているなんて。

頭では今自分の身に起こっていることが異様としか言いようがないことがわかっているのに、心の部分では恐怖や驚きや混乱という感情がさっぱりわいてこない。

――怖いというのは、どんな感情だっただろう。

握り締めていた指を開くと、太一はもう一度アパートまでの地図を見た。

（……とりあえず行くか？）

その時だった。

「ああもう、イライラするのう。さっきから、何をそんなところでぼけっと突っ立っておるんじゃ。まったく最近の若いもんは、思い切りが悪くて困る。ほれ、さっさとせんかい。どのみちバスは当分来んのだから、おまえさんは先に進むしかなかろうが」

しわがれた声がすぐ傍らから聞こえた。

太一は首を巡らせる。

声の主は、そばの塀の上にいた。こちらを見下ろして「やれやれ」とばかりに頭を振っている、一羽の真っ黒な――。

「カラス？」

「見ればわかることを、いちいち訊くな。わしがカラス以外の何に見えるというんじゃ。カワセミか、オオイヌワシか、ヤンバルクイナか？」

ヤンバルクイナなら、多分実物を見てもわからない。

太一は相手を凝視して思わず呟いた。

「なんか……すごく微妙」

このカラスは服を着て通りを歩いているわけでも、物を売っているわけでもない。見た目にはどこにでもいる、普通のカラスだった。

しかし見た目は標準サイズでも、しゃべっているのは人間の言葉だ。

つまりここと現実の世界と、その両方において「おかしなカラス」であると言えよう。

「何をじろじろ見ておる。ふん、不躾な若造め。カラスがそんなに珍しいのか」

「すみません」

カラスが不機嫌な声を放ったので、太一は素直に謝った。

「べつにカラスは珍しくないですけど、しゃべるカラスはもしかしたら少し珍しいかもと思ったので」

つい丁寧な言葉づかいになるのは、鳥といえどこの相手が、なんとなく頑固な老人のような印象を与えたからだ。

「ふふん。もうちょっと気の利いたことを言わんか。もしかしたらだの、少しだのと、そんなことがあってたまるか。カラスがしゃべるのは、人間にとってはものすごく珍しいことにきまっておる。まさに驚天動地なみにな」

カラスは鼻白んだように言った。

「それはそうとおまえさん、空栗荘の新しい住人じゃろ？」

「え……」

カラスはまるで伸びをするように、艶やかに黒い翼を広げると、したり顔で、

「柊二郎が言っておったぞ。おまえさんが今日、挨拶に来るとな」

誰だろうそれ、と太一は思ってから、空栗荘の大家の名前だと気づいた。

時国柊二郎。父の旧友だという人の名。

部屋を借りることになってから、父は何度か電話でその人と連絡を取り合ったようだが、太一自身は今日が初対面だ。

しかし――。

「住人になるかどうかはまだ決まってませんが」

「なんじゃ、ここまで来てまだ迷っておるのか。まったく何をグズグズしておるのやら。愚か

な図と書いてグズと呼ぶのは、いやまったくどうして、今のおまえさんのためにあるような言葉じゃわい」

どうも説教好きのカラスのようである。

（なんで俺、こんなところでカラスに叱られているんだろう）

どっちかと言えば、ここに来たから迷っているのだ。それより何より、カラスと世間話をするような人と、本当に会って「この先よろしく」と挨拶してしまっていいのだろうか。

カラスはふふんと器用に鼻を鳴らした。

「しかしどのみち空栗荘へ行かなければ、おまえさんはここからは出られんぞ。さっきも言うたように、バスは当分来んからな」

「当分て、どれくらいですか」

「そうさな、ざっとあと二八五七日と十八時間は来んじゃろ」

「……すみません。年数で言ってください」

「八年にちょっと足りんかの」

もちろん信じられるわけがない。

「でも、駅から何本もバスが出てたけど。ちゃんと賽河原町経由っていうのが。来る時は俺以外にも人が乗ってたし」

「それは表側の話じゃろ」

「表側？」

カラスは呆れたように太一を見ると、パシンと黒い嘴を鳴らした。

「もしやおまえさん、何も知らずに来たのかね？」

「知らないって、……何を？」

「ここが妖怪の住む町だということをじゃ」

太一はカラスを見つめた。

まじまじと見つめた。

さらに見つめて、それからやっと口を開いた。

「妖怪って、ヌリカベとかろくろっ首とか、そういうやつのこと？」

「一応そいつらも、住民登録はしておるがな」

それは税金を払っているということか？

しかし今度は信じないわけにはいかない。なぜならこの会話の間にも、太一とカラスの周囲には頓狂な格好の物売りの声が響いていて、すれ違ってゆく人間でない通行人がいて、夕焼けの空はさっぱり暮れようとしなかったからだ。

「妖怪の町なのに、どうして普通にバスで来れたり、実際の地図に地名が載っていたりするんですか？」

「だからそれは表側のことじゃよ。いいかね、地図に載っておるのは表の賽河原町で、そっち

にはちゃんと人間が住んでおる。バスも定刻に走るし、人間も毎日行き来して普通に生活しておるさ。けれどもおまえさんが今いるのは、同じ賽河原町でも、その裏側じゃ。こちらは人間が滅多にやって来ることはない。誰もが外から簡単に来ることのできる場所ではないんじゃよ。——それでもまあ、ごく希に、迷い込んでくる人間がいないでもないがな」

カラスは交互に足を踏み変えて、ひょいひょいと塀の上で身体を揺らした。

「一言で言えば、ワケアリの連中さね。もともと妖怪の存在をよく知っている者か、現世との交わりをみずから断ってしまった者か、何かの必然が作用した者か。その他にもいるが、まあ、理由は人それぞれじゃ」

「俺、バスに乗って降りたらここにいたんですが」

必然も何も感じないから、何かの間違いで来てしまったのではないかと思う。

「おまえさんの理由など、わしが知るかい」

カラスは素っ気なく嘴を振った。

「おまえさんがここにいるのなら、それは縁があったということなんじゃろ。その縁が何なのかは、自分でよく考えてみることじゃな」

太一は考えてみた。しかしこれまで聞いたカラスの言葉を幾度反芻したところで、結局よくわからなかった。

「とにかく、賽河原町はふたつあって、俺は本来の場所とは違うところに来ちゃったってこ

と？　そういうふうに思えばいいんですか？」

「いささか違うな」

カラスは太一に対して、物分かりの悪い子供を諭すような口調になった。

「賽河原町はひとつじゃよ。――つまりな、物事を一方向からだけ見れば、真実はひとつじゃろう。けれども見方を変えて反対側から見れば、そこにはまた別の真実がある。どんなものも、見ようによっていかようにもカタチを変える。自分の見ているひとつきりのものが正しいとは限らんさ。この賽河原町も然り。人間の側から見れば何の変哲もない町じゃが、妖怪の側からすれば、今おまえさんが見ているものこそこの町の本来の姿ということになる」

「――」

なぜかしら、その言葉は胸にひっかかった。何かとても、大切なことのように。

と、その時。

「いよぅ、クロ爺。そんなとこで何を話し込んでんだ？　――おっと人間じゃねえか。珍しい」

通りのむこうから、派手な格子柄の着物を着て下駄をつっかけた男がずかずかとこちらに近づいて来た。物売りの風情ではない。片手に火のついていない煙管を持ち、もう一方の手に竹の虫籠を提げている。

ともあれ、太一のことを珍しいと言ったその男のほうこそ、妙ちくりんな見てくれをのぞけ

ば姿かたちは人間そのものだ。

（この人も妖怪なのか？）

まるで太一の考えを見透かしたように、カラスは肩をすくめるのとそっくりの仕草を見せた。

「言うておくが、そやつは貉（むじな）だ。酔狂（すいきょう）で人間に化けておるだけじゃよ」

「ムジナ？」

とたん、目の前まで来ていた男の姿が、ばらりと輪郭を崩した。

「そおぉのとおーり」

奇妙に間延びした声とともに、毛むくじゃらの獣の顔になって、裂けたような真っ赤（まっか）な口で笑った。そうしてすぐに人間の姿に戻ると、

「なんだい、驚きもしねえ。ああ、おもしろくない」

「すみません」

「人間ならもうちょっと、『ひゃあ』とか『わあ』とかお世辞でも悲鳴をあげるもんじゃあないのかい。少しくらいは怖がってもらわなくちゃねえ。ガッカリの拍子抜けだ」

妖怪にまでつまらないと言われると、申し訳ない気さえしてくる。

「俺、怖いってよくわからないので」

「わからない？」

うなずく太一を、男は不思議そうに見やった。



「それより貉よ。おまえさん、ちょうどいい時に来たな。この坊主を空栗荘まで案内してやってくれんか」

カラスがせかせかと口をはさむ。

「空栗荘だって？　なんだい、こいつは柊のダンナに用でもあるのかい」

「部屋を借りて住むのさ」

「へーえ。そいつは愁傷な。……おっと」

貉はぺろりと舌を出した。

「べつに案内なんて――」

いらない、と太一が言いかけるのを制して、カラスはまたも「ふん」と鼻を鳴らした。

「言うたじゃろう。どのみちおまえさん、空栗荘へ行かないことにはここから出ることは叶わんぞ。あそこが裏と表の接点じゃからな」

「接点？」

「大方おまえさん、こう思うておるのじゃろう。――バスが来なくても他の方法で、人間の世界に帰ることはできるんじゃないか。たとえば道に沿っていい加減歩いていればそのうちここから出られるはずだ、とな」

「はあ、まあ」

確かにそう考えていたから、当分バスが来ないと言われても、たいして気にしていなかった

のだ。
「残念ながらそれは無理じゃよ。ここに来ることのできた人間は滅多におらんが、自力で出ることのできた人間となるとさらに少ない。このままならおまえさん、いつまででもこの町をさまよい歩くことになる」
　黙り込んだ太一を見て、カラスは愉快そうに言葉を継いだ。
「それともうひとつ。おまえさんが持っているその地図は役には立たん。ここでは通りも家もしょっちゅう入れ替わるのでな。最初におまえさんに声をかけたのは、そのことを忠告してやろうと思ったからじゃ」
「ほらよ。こいつのあとをついて行きゃあ、空栗荘まで道案内してくれるぜ。うんと気をつけて、途中で見失うんじゃねえぞ」
　貉は手に持っていた虫籠の蓋を開けた。
　ふわり。光の粉を撒き散らして、金色の蝶が中から飛び出した。きらきらと輝きながら、赤い空へと舞い上がる。
　それを見送り、貉は竹の籠を太一の手に押しつけた。
「空栗荘にたどり着いたら、あいつをこの中にもっぺん入れて、返してくれ。あの蝶はオイラの大切な財産だからな」
「返すって、どうやって」

戸惑う太一を見て、貉はニヤリとした。ひょいと煙管の先で空をさして、
「オイラにまた会いに来りゃいいだけのことだ。空栗荘に住むのなら、あんたはこの先いつだってここへ来ることができる。——ほら、さっさと行きな。蝶が消えっちまうぜ。ちゃんとあとで籠と一緒に返しておくれな」
そんな約束をするのは嫌だったが、断ることはできなかった。蝶を探して太一が見上げると、金色の光はすでに小さくなって遠ざかろうとしていた。
最後に貉は急にいかめしい口調になって、駆け出した太一の背中に声をかけた。
「それから空栗荘に着いたら、柊のダンナに伝えてくれよ。妙な時間にうたた寝をするなってな。あの人の見る夢は、時々素っ頓狂でいけねぇや」
どういう意味なのか、さっぱりわからなかった。

2

蝶は金色の粉をきらきらと振りまきながら、太一を狭くて薄暗い迷路のような路地へ、家と家との間に刻まれた緩やかな石段へ、草むしてぽかんと広い空き地へと誘った。
あたりの風景はどこか古めかしい。来る時にバスの中から見たそれとは、似ているようでまったく違っている。

消えない夕焼け。終わらない夕暮れ。
妖怪の住む町。
——驚かないのか。怖くはないのか。
蝶を追って、両側に樹の茂った坂道をのぼりながら、太一はさっきの貉の不思議そうな顔を思い出していた。
——怖いというのは、どんな感情だっただろう。
（お母さん……？）
声をかけても反応のない背中。能面のように動かない表情。誰もいないキッチンを白々と照らす照明。
毎日少しずつ、ゆっくりと壊れてゆくもの。
（触らないで。あっちへ行って。あんた誰？　あんたなんか知らない）
足下に開いた真っ暗な穴をのぞき込むような、胃袋を冷たい手でぎりぎりと摑まれて膝が震え出すような、世界のすべての色が消えてしまうような、あんな想いを「怖い」というのなら、そんな感情はとっくに擦り切れてしまったから、きっともう二度と、何かを怖いと思うことはない。

ふわり、と蝶が視界を横切った。

「あ……」

坂を登りきったところに、古色蒼然とした木造の建物があった。民家にしてはかなり大きい。広い玄関には磨りガラスを嵌め込んだどっしりとした木製の引き戸、その上に張り出した瓦屋根が優美なアーチを描いている。

「ここが空栗荘？」

蝶はしきりに促すようにまわりを飛び回っていたが、太一はしばらくの間ぼかんとして、その建物を見つめていた。

「これ……アパートじゃないだろ」

どう見ても、クラシックな旅館である。一体いつ建てられたものだろうか。古い建物のことなど太一にはさっぱりわからなかったが、以前にテレビで紹介されていた明治だか大正だかに造られたという有名観光地の旅館に雰囲気がよく似ていた。

家賃が安いのと、部屋に風呂がない云々の父親の言葉から、雨漏りでもしそうなボロのアパートを想像していたのだが、これは別の意味で衝撃的だった。

（本当にここ？）

間違いなくここが空栗荘だった。なんとなれば、入り口の上に大きな字で『空栗荘』と書かれた看板がかけられてあったから。

太一は登ってきたばかりの坂を振り返った。樹木の梢のむこうに、賽河原町が見渡せる。不

思議なことに夕焼けの底に沈んだ町は、陽炎が立ったようにゆらゆらと輪郭が揺らいでいた。

（まあ、いいか）

さっきまで、彼はあそこでカラスや、人間の顔をした貉と話をしていたのだ。そんなありえない体験をしておきながら、ここに来て今さらためらうなんてバカげている。

ここは異世界なのだ。何でもありだ。アパートが旅館に化けるくらい、きっとたいしたことじゃない。

金色の蝶が焦れたように、太一の目と鼻の先をひらりとかすめた。それから玄関先に吊るされてある、呼び鈴らしきものの紐にとまって、何度か羽を打った。

早く鈴を鳴らせといっているらしい。

「これを引っ張ればいいのかな」

太一は蝶を驚かせないように、そっと紐を握った。

コロン、コロン、コロン。

予想外に大きな音が響いて、そのとたんにガラス戸が滑るように開いた。

「おや、あんた。裏から来たのかい？」

姿を見せたのは小柄な老婆だった。

本当に小さい。並んで立てば、それほど背の高くない太一の肩くらいも丈があるかどうかだ。

地味な色柄の着物の上に割烹着、髪は雪のような白髪である。皺だらけの顔で、老婆は太一を

じろりと見やった。

「大家から聞いているよ。あんただろう、新しくここに入ることになっているのは。まだ学生なんだってね？」

老婆がせかせかと早口で言うものだから、太一はうなずくのが精一杯だ。

「あんたの父親が大家と友達だってねえ。まあいいさ、そんなことは。何をぼけっと突っ立ってるんだい。早く中にお入り。あんたの部屋は掃除しておいたよ。――おや？」

そこでようやく気づいたように、老婆は赤く染まった空を見上げた。

「またこんなことになっているよ。だからあれほど昼間から寝るなと言っているのに、ちょっと目を離すとすぐこれだ」

ぶつくさ言いながら、するりとまたガラス戸のむこうに姿を消してしまった。

そのまま行ってしまいそうだったので、太一は慌てて「あの」と声をあげた。

「何だい？」

「すみません。この蝶を捕まえたいんですけど、どうすれば……」

まだ呼び鈴の紐にとまっている蝶を指差して訊ねると、

「どうすればって、あんたそこに籠を持っているじゃないか。蓋を開けば勝手に戻るよ」

愛想のない声が玄関の内側から返った。

「貉の蝶だね。貉に会ったとみえる」

「カラスにも会いました」
「クロ爺だね。あれは偏屈だけど世話焼きなのさ」
老婆の言うとおり、手にしていた虫籠の蓋を開けると、蝶は自分からふわりと中に飛び込んだ。
（これ、返さなきゃいけないのか）
太一はため息をついた。
約束というのは好きじゃない。それは自分ではない誰かとの関わりだから。約束した相手に縛られてしまうことだから。
「籠の蓋には気をつけるんだよ。うっかり蝶が逃げ出して、表の世界にでも飛んで行っちまったら面倒だからね。それでなくても逃がしたなんて知れたら、貉がどれだけ騒ぐことか。喧しいんだよ、あいつは」
さらに、駄目押しのように老婆に言われて、太一は虫籠をしっかりと抱えた。
そうしてひとつ深呼吸すると、空栗荘に足を踏み入れたのだった。

「うわ」
玄関に入って、思わず声が出た。
三和土の両側に大きな靴箱。飴色に磨かれた木の床に壁。ミルク色の傘をつけたレトロな電

燈。木の手すりのついた二階への階段。……と、そこらじゅうに置かれた、というより積み上げてあるように見えるガラクタの数々。

（なんでこんな物があるんだろう？）

大小さまざまな招き猫だとか、赤いダルマとか、ガラスケースに入った古ぼけた市松人形とか、庭に転がしておいてもよさそうな一抱えもある石とか五円玉でつくった五重塔とか。壁にはべたべたと観光地のペナントが貼られてあったり、提灯がぶらさがっていたり。

（趣味悪……）

「全部、泊まり客の土産さ」

老婆はガラクタに混じって転がっていたハタキを手にすると、ダルマやらガラスケースの埃をぱっぱと払った。

「泊まり客ってことは……やっぱりここって旅館ですか？」

「そうだよ。ほら早くおあがり。とりあえず靴はそのままにしておいていいから」

老婆はちらと太一の顔を見て、皺だらけの口元を歪ませた。

初めて笑った。ニヤリ、といかにもおもしろそうに。

「一昔前まではここも盛況だったんだけどねえ。近頃じゃ客足もめっきり落ちて。やっていけないんで、下宿も兼ねることにしたんだよ。泊まりの客以外にも、家賃をもらって人を住まわせているってわけさ」

それにしたって家賃が安いうえに下宿人もたいした数がいるわけではないから、赤字もいいところなんだけどね、と老婆はつけくわえた。

（なるほど）

アパートが旅館に化けた理由をとりあえず納得してから、太一は首をかしげた。

「客って、もしかして妖怪？」

「馬鹿をお言いじゃないよ。妖怪が金を払って宿に泊まると思うのかい」

妖怪は金を払わないということなのか、そもそも宿に泊まるようなことはしないということなのか、どっちかわからないが、それはともかく。

「じゃ、ここは人間のための宿ってこと？」

「当たり前だろう」

老婆はふんと鼻を鳴らした。

「ごちゃごちゃ言わずについておいで。中を案内したあとで、大家を呼んでくるから」

「あの」

ハタキを手にしたままさっさと踵を返した老婆を、太一は引き留めた。

とりあえず確かめておかなければならないことがあった。

「さっきのカラスから、ここは裏と表の接点だって聞いたんですけど。ええと、つまり、人間の住む賽河原町が表で、妖怪がいる側が裏で、――ここから人間の世界に戻れるって。本当

ですか？」

「なにもあんたに説明してもらう必要はない。アタシはずっとここで働いているんだからね。その通り、間違いなくここはあっちとこっちを繋ぐ場所さ」

太一をつくづくと見やって、老婆は呆れたように言った。なんでわざわざそんなことを訊ねるんだと言わんばかりだ。

「だったら、どうやったら帰れるんですか？」

「表側に帰る方法かい？　へえ、あんた、帰りたいのかね。人間の世界に未練があるようには見えないけどねえ」

「――」

一瞬、太一は言葉を失った。

老婆はまたもニヤリとすると、

「冗談だよ。――もう一度玄関の戸を開けて外をのぞいてごらん」

意味がわからないままもう一度三和土に降りて、太一は夕陽の映り込んだ重いガラス戸を開けた。

とたんに、目を瞠った。

「え？」

強烈な陽射しが、視界に広がった。樹々の緑が鮮やかに燃えている。真っ青な空と、そこに

むくむくと浮かぶ綿のような入道雲。あたりにさんざめく蟬の声。
眩しくてくらくらする。
ちょうどその時、ぼーん、と階段の横にかけられた振り子時計が時刻を告げた。
午後三時だ。
（なんだよ。どうなってるわけ……？）
そうして気がついた。
真夏の午後の、これが本当の風景だ。
玄関の前に、彼がさっき登ってきた坂道はない。代わりに目に入ったのは、飛び石が門までつづく前庭だった。背の高い生け垣が緑の波のように道路と建物の敷地を隔てている。眺めている間に、門の外を車が何台か通り過ぎていった。
「わかったかい？　そっちが表側。人間の住む側の町だ」
振り返ると、老婆はやっぱりハタキを持ったまま、腰に手をあてて太一に顎をしゃくった。
「あちらもこちらもお望みのままさ。好きな時に好きなほうに出ていけばいい。戸を開ければいいだけのことなんだよ。簡単だろう？　――ふふ、覚えておきな。この世のどこでだって、人間と異形を分けるもんなんざ、そのガラス戸一枚程度のものなのさ」
「イギョウ？」
「ヒトとかかわるヒトでないモノたちのことさね。まあその呼び名も人間の言い分にすぎない

けれどもね。妖怪なんてのはその最たるものだ」

太一は、たった今まで夕焼けの色をしていた戸口のガラスをつくづくと見た。不透明なガラス超しに外の風景は見えないが、いつの間にかそこには、空の青と庭木の緑がうっすらと映っていた。

――どっかのドアを開けるとか

――そういうのはもう、全然新しくないから

和泉栄奈の言葉が、ふとまた脳裏をよぎった。

太一はガラス戸を見つめて首をすくめた。

(だったら、これもやっぱり『ありきたり』な方法ってことになるわけだけど)

そういえばあいつ、小説は書けたのかな。なんとなく、そんなことが気にかかった。

「アタシのことは『お露さん』と呼んでおくれ。怪談に出てくる美女の名前さ」

「ええと、お皿が一枚二枚って人……？」

「そりゃ『お菊さん』だよ。嫌だねえ、今の若いもんは牡丹燈篭も知らないのかい」

お露さんは住み込みで、空栗荘の住人と客の食事づくりから、その他諸々の家事や雑事の一切を切り回しているらしかった。年をとっているということ以外、幾つくらいかはよくわからない。だが背中も腰もぴんと伸びて、足取りも軽々としている。

「ここが風呂場だ。十時に湯をおとすきまりだから、時間は守っとくれ。それと一応男湯と女湯にわかれているからね、注意しとくれよ」

「この広間が食堂だよ。住人も宿泊客もここで食事をする。食べ終わったあとの食器は自分でそこのカウンターまで運ぶこと。食事の時間はそこの壁に貼ってあるから、特に朝は寝坊なぞしたら食いっぱぐれるよ。あと、好き嫌いは許さないからね」

「ここが団欒室だ。棚にある本は好きに読んでいいよ。客たちが置いていったものだ。ここでは酒の持ち込みと馬鹿騒ぎは厳禁。もっともあんたはどっちも関係なさそうだけどね」

木の香りのする大きな檜風呂。広々とした座敷に長いテーブルと座布団を並べた食堂。玄関の雑然とした印象に比べ、どこもきちんと掃除されていて、明るく気持ちがいい。

案内してもらった場所のうち、団欒室だけが洋風だった。毛足の長い絨毯がしかれて、革張りのソファや揺り椅子が置いてある。壁の一面は本棚になっているが、並んでいるのは字面の難しい本ばかりだ。驚いたことに部屋の隅には暖炉まであった。

「ああそうだ、冬にはその暖炉に火をいれるんだけどね、いいかい、変なものを燃やすんじゃないよ」

お露さんは真面目くさって、太一にむかって人差し指を振ってみせた。

「変なもの？」

「前に芥子粒を放り込んだバカ者がいてね。あの時は皆して幻覚を見ちまって大騒ぎだったん

だ」

（芥子粒？　幻覚？　……ていうか、意味わかんないんだけど）

普通はせめてゴミを燃やすなくらいの話じゃないのか？

「どうしてそんなもの……？」

「さてね。理由はそのおバカに直接訊くんだね。まだここに住んでいるから」

そう言われても、あまり関わりたくない人種のような気がする。

「さて次は――」

「あの」

太一は思い切って言った。

「なんだい」

「最初に言わなきゃいけなかったんですけど。俺、部屋を借りるかどうかまだ決めてないんです」

「おや、そうかい」

お露さんはふんと鼻を鳴らした。

「だったらそういう話は大家にしておくれ。アタシはただ、あんたが来たら一通り案内しておけと言われていたから、そうしているだけさ。――いいからさっさとついてきな。一応、部屋だけは見せておくから」

それに、とふたたび太一を従えて歩き出しながら、お露さんは言葉をつづけた。
「あんたは多分、ここに住むことになるんだろうよ」
「――どうしてですか」
「もし本当に関わりたくなければね、さっき玄関の戸を開けた時に、あんたはここを出て行っている。あのまま人間の世界に戻っていたはずさ」
でもそれは、帰ろうと思えばいつでも表の世界に帰れるとわかったからだ。
いや。
（違うのかな）
あの時、ガラス戸のむこうに踏み出そうとは、カケラも考えなかった。選ぶことは、確かにできたはずなのに。
「……これを返さないといけないし」
太一は後生大事に手に持ったままの虫籠に目をやる。貉の蝶は、時おり羽を揺らして金色の光をあたりに振り撒いた。
「おもしろい子だね」
お露さんは背中をむけたまま、いったん黙り込んでから言った。
「妖怪との約束を守ろうというんだね。そんなもの、知らん顔で無視して、なかったことにしちまったっていいのにね。そうやって裏切るのは、いつだって人間のほうなんだから。――で

もまあ、あんた、なかなか気に入ったよ。ふふ、こういうのもひとつの縁なんだろうさ」

部屋は二階にあった。つきあたりの角部屋だ。

ドアを開けると、中は六畳の和室。明るいのは南側と東側に窓があるからだ。入ったところは三畳の板の間。南に面した窓の手前も二畳ほどの床板があって、畳の部分との境を障子で仕切るようになっている。

どうやら客室をそのまま、下宿に使っているらしい。

「特別待遇だよ。ここはもともと長期滞在者用の部屋だったんだ」

言いながら、お露さんは東側の窓を開けた。とたんに蟬の声が一際大きくなった。庭の樹々の間を通ってきた風が、すうっと心地よく部屋に流れる。

「特別って……？」

「なにしろ台所と家具つきだ」

老婆は三畳の板の間にある、小さなガス台つきの流しに顎をしゃくった。

「ま、アタシのつくる食事に文句がなけりゃ、湯をわかすくらいしか使い道はないけどね」

家具というのは、南側の板の間に置いてある木製の机と椅子、本棚のことだった。

「布団は押し入れに入っているし、あとは身の回りの品さえありゃ、いつでも引っ越してこれるよ」

そのあとお露さんは、大家に知らせてくると言って出て行った。残された太一は、虫籠を机の上に置くと、あらためて部屋を見回した。六畳でも板の間をあわせるとかなり広い。南側の窓の外には大きな桜の木があって、腕を差し伸べるようにこちらに枝を伸ばしている。春になったら部屋にいながら花見ができそうだ。

風がまた通った。植物の青い匂いのする風。桜が枝を揺らして、木漏れ日が板の間の床できらきらと踊る。

ちりん。どこかで風鈴の涼しげな音色が響いた。

3

――忘れるんじゃない。

――いつもあんたを見ているから。

――好きだよ。いつまでもずっと、大好きだよ。

ガタンっ。

急に大きな物音がして、太一はハッと目を開けた。

お露さんが戻るのを待っているうちに、窓の下の壁にもたれかかっていつの間にかうとうとしていたらしい。

夢を見ていた。すぐ近くで誰かが何か囁いていたような。夢の中ではその声の主のことを確かに知っていると思ったのに、とても懐かしいと感じたのに、飛び起きたとたんに全部頭からすっぽり抜け落ちて、何もわからなくなってしまった。

「あ……？」

部屋の中に人影を見つけて、太一は一瞬息をつめた。

（女の子……？）

七歳か八歳くらいの、おかっぱ頭の小さな女の子だ。太一が寝ている隙に部屋に入り込んだらしい。

椅子によじのぼって、机の上にあった虫籠を両手で持ち上げてしげしげと中をのぞき込んでいる。さっきの物音は、この子が椅子を動かした時のものだった。

「ダメだ、それに触っちゃ！」

思わず大声が出た。

女の子は驚いたように振り返った。と、その身体がバランスを崩して、椅子の上でぐらりと揺れた。

「危ない！」

ガッターン、と盛大な音をたてて、女の子は椅子ごと床に転がった。
そのままの格好で、目を真ん丸にして太一を見上げている。慌てて近寄って立たせてやろうとしたら、その前に女の子はぴょんと自分で跳ねるように立ち上がった。それから、可愛い顔をくしゃくしゃにして、太一にむかって舌をつきだしてみせた。
「あっかんべーだ」
そうして、唖然とした太一の手をすり抜けて、ぱたぱたと部屋から駆け出していってしまった。
「……何だよ、一体？」
どこの子だろう。ここの住人だろうか。
かさ、かさ、と紙をすりあわせるような音で我に返った。
畳の上に虫籠が落ちている。女の子が転んだ拍子に、一緒に投げ出されたのだ。籠の蓋が外れて、中からふわりと金色の光が舞い上がった。
（うわ、まずい！）
蝶が逃げる。
太一は開いたままだった東側の窓に飛びつくと、急いでそれを閉めた。行き場を失って蝶はいったん天井近くまでふわふわと浮かび上がったが、すぐに、今度はドアにむかってひらりと羽を打った。

しまったと思った時は遅かった。さっきの女の子が駆け出して行ったあと、部屋のドアは開けっ放しになっていた。太一が捕まえようとして手を伸ばすより早く、蝶はまるで空中を滑るようにして、廊下に消えてしまった。

太一は落ちていた虫籠をひったくると、蝶を追った。

廊下に飛び出したのと、ふたつ隣の部屋のドアが開いたのが、同時だった。

金色の光が、ちょうどふうわりとそのドアの前をよぎるのが見えた。

「その蝶、捕まえて！」

太一はとっさに叫んだ。

出てきたのは大学生くらいの青年だ。ぽかんと太一を見てから、

「え、なに、なんや？」

思わずという感じで、鼻先をかすめた蝶に手を伸ばした。

とたんに、

「あ……」

「げっ」

青年の指に触れるか触れないかのその瞬間、蝶はぱっと光を放って消えた。まるで手品みたいに、空中に姿が溶けてなくなったのだ。

「うわしまった、もしかして今の、あっち側の蝶か⁉」
走り寄った太一と自分の手を交互に見比べて、青年は素っ頓狂な声をあげた。
「アホ、それならそうと最初に言え。どーするんや、おまえが大声出すから、ついうっかり」
言葉に西の訛りがある。
「蝶はっ？」
「成仏させてしもたわ！」
「……は？」
蝶が成仏？
コンコン、とその時、隣室のドアが内側から叩かれた。
「廊下で騒ぐな、ミヨシ」
渋い感じの男性の声がした。太一と青年の部屋の間にはさまれたその部屋にも、住人が誰かいたようである。
「ああタカハシさん、悪い」
青年は素直に謝ってから、あらためて太一を見た。
「新入りか、おまえ？」
横柄な口調だ。視線が上から太一を見下ろしてくる。——まあ、相手のほうが上背がだいぶあるので、当たり前なのだが。

大学生かと思ったが、よく見ればもう少し年齢は上のようだ。目つきが鋭くて、なんというか、ナイフみたいなおっかない雰囲気がある。一見すればあまり近づきたくないタイプかもしれない。

「部屋どこや。え、あっちの角部屋？　……ふぅん、あそこの部屋、ずいぶん長いこと空きやったのにな」

そんなことはどうでもいい。

「それで、あの蝶はどうなったんです？」

「せやから成仏やて。お陀仏や。めでたくあの世行き。何度も言わすな、ボケ」

「死んだんですか？」

「ああ？　なに言うとる。死ぬもなにもあいつは最初から――」

そこで黙り込み、青年は怪訝な目を太一にむけると、がしがしと頭を掻いた。

「もしかして、なんも知らへんのか」

太一は返事につまった。何を知らないのかも知らないからだ。

「あれ、おまえの蝶と違うんか」

これにはうなずいた。

「借り物なんで、返してくれって言われてたんですけど」

「あっち側の住人にか。……ようわからんヤツやな。妖怪に会うたくせして、あれが何かも知

らへんなんてな。あれ、ほんまは蝶やない」
「蝶じゃない？」
「人間の魂や」
青年はあっさりと言った。
「魂は蝶や鳥に化身することがあるからな」
太一は顔をしかめた。
「つまり幽霊ってこと？」
「そこまでハッキリしたもんやない。けどまあ、ふらふら飛んでるくらいなら、本体はきっちり死んどる」
太一はニコリともしない相手の顔を黙って見上げた。
（人間の魂？）
虫籠を摑む指に力をこめる。確かに金色の蝶なんて妙だとは思ったのだ。けれども自分が持っていた籠に死んだ者の魂だか霊だかが入っていたとなると、あまり気分のよいものではない。
とりあえず、この青年が言っている言葉の意味くらいはこれでわかった。
――あの蝶は死んだ人の魂だったから、成仏して、消えてしまった。
それはいいとして、これで躯に蝶を返せなくなってしまった。返す約束だったのに、どうし

ようかと太一は思う。

コンコン、とふたたび隣室のドアが音をたてた。

「ミ、ヨ、シ」

「あのなタカハシさん、こいつ新入りやて。名前は――」

その時点でようやく、互いの紹介がまだだったことに青年は気づいたらしい。

「誰やおまえ」

「阿川太一です」

「高校生？」

「はい」

「俺はミヨシ。カタカナでミヨシ」

それは名字だろうか名前だろうか。しかしそれ以上の説明はなしに、青年は隣室のドアに顎をしゃくった。

「で、こっちはタカハシさん」

そう言われても、こちらはこちらで、ドアが開く気配もない。タカハシさんと呼ばれた人物は、挨拶に出てくるつもりはないようだった。

（無視かな）

歓迎されていないということだろうか。

「あの蝶、誰に借りたんや？」
むっつりした声で言われて、太一はふたたびミヨシに目をやった。
「貉です」
あいつか、とミヨシは軽く舌打ちした。
「狡いとこあるからな、あいつは」
「狡い？」
「悪いヤツやないけど、妖怪てのはひとクセもふたクセもある連中やから、つきあうつもりなら気をつけろ」
「はあ」
妖怪と懇意になるつもりはないけど、と太一は思う。
約束のことをもう一度思い出し、小さく息をついた。
（謝ってお金で弁償するというのはどうかな）
しかし人間の魂は、金に換算すると幾らくらいなのだろう。
（ものすごく高かったら困る）
考え込んでいると、お露さんが一階からあがってきた。
「やれやれ、やっと大家が起きたよ。毎度苦労させられるったら。なんとかならないのかね、あの寝ぼけ癖は」

ぶつぶつ言ってから、お露さんはじろりとミヨシを見た。
「なんでまた、あんたがいるんだい」
「つれないこと言うな、オバチャン」
「お露さんとお呼び。あんたにオバチャンと呼ばれる筋合いはないさ。それより、また何かやらかしたんじゃないだろうね？」
「またてなんやねん」
「おや、お忘れかい。何のつもりだか暖炉で護摩を焚いて芥子を放り込むとか、つくった護符がいきなり火を噴いてボヤになりかけるとか、盆に戻ってきた誰かのご先祖を悪霊と間違えて祓いかけるとか。これまでの騒動は、たいがいあんたが原因だったと思うがね」
「あうう」
（あれ？）
歯ぎしりするミヨシを、太一はちょっとだけ意外な気分で眺めた。
（……この人、そういうキャラ？）
お露さんいわくの「団欒室の暖炉に芥子粒を放り込んで騒ぎを起こしたおバカ」というのは、ミヨシのことだったらしい。護摩だの護符だのという単語は太一にはぴんとこなかったが、なにやらマヌケそうなエピソードだ。おっかなくてとっつきの悪そうなミヨシの外見の印象と、かなりギャップがある。

「で、一体それはどうしたんだい？」
お露さんは、太一が持っている空の虫籠をちろっと見た。
「蝶が逃げてしまって」
言いかけた太一の声にかぶさって、
「それをミヨシが、うっかり祓ってしまったんだよ」
どこかおもしろがっているようなタカハシさんの声が響いた。
「うーわ、そらないやろ、タカハシさん」
「ほら言わんこっちゃない。やっぱり騒ぎじゃないか」
お露さんは呆れた顔でミヨシを睨んだ。
「あんたは、なんでそんなことをするかね」
「たまたまや。俺がたまたま部屋を出たら、こいつが捕まえてくれて叫んで、見たらたまたま蝶が俺の目の前を飛んどった。で、たまたま触ってしもて。俺のせいやないやろ」
ミヨシはぶすっと応じる。
「なにがたまたまなもんかね。まったく間が悪いったら。これはきっちりあんたのせいだよ。責任をとって、あんたが代わりの蝶を探して捕まえてくるんだね。この子は貉との約束を守ろうとしていたんだから」
「代わりて、そんなもん俺が探すのか⁉　そもそも蝶を逃がしたのはこいつの責任やろ？」

「つべこべ言うんじゃない、無節操暴走お祓い男。とっさに力のセーブもできないから、いつまでたってもあんたは一人前の術者扱いされないんだよ。ちっとは自覚しな」

ぽんぽんと容赦のない言葉を並べられて、ミヨシはいささか情けない顔になった。どうも力関係では、お露さんのほうが上らしい。

当の太一はすっかり会話から取り残されたかたちで、首をかしげた。

(術者？　お祓いってことは、神主とかお坊さんとかエクソシストとか……？)

しかし目の前の男は神主にも僧侶にも神父にも見えないが。

「あー、わかった。わかりました。とにかく貉に蝶を返せるようにしたらええんやろ」

ミヨシはついに降参したように片手をあげた。

「けどあの蝶、あのままでも成仏寸前やった。貉のヤツ、算盤づくでここへよこしたんと違うか。ちゃっかりしとるからな、あいつは」

「今にはじまったことじゃないだろ。妖怪相手にはめられて文句を言うんじゃないよ。連中には連中の道理ってもんがあるんだから。――ん、なんだい？」

もぞもぞしていた太一に、お露さんは顎をしゃくる。

「代わりの蝶なんているんですか？　だって、人間の魂を捕まえるってことですよね」

ふふん、と鼻を鳴らしてお露さんはニヤリとする。

「その気になって探しゃ、ひとつふたつはそのへんをふらついてんじゃないかね。魂の吹き溜

まる場所だってあることだしね。ま、あんたにゃ探すのは無理だろうが」
（だから？）
太一は仏頂面のミヨシを見た。
「ミヨシさんは、そういうのが見える人なんですか？」
「なんや、そういうので？」
「だから……霊とか」
「見えないと仕事にならん」
仕事？
「それこそ迷うてる霊を成仏させたり、頼まれて悪い霊やら魔物やらを退散させたり。他にもいろいろあるけど、一応そういうことをして食っとる。これでも子供の頃から修行はしとるんや。実家が寺やったし」
「じゃあ、やっぱりお坊さん？」
「いや」
なぜかミヨシは不機嫌に声を落とした。
「霊能者ていわれるけど、そう呼ばれると胡散臭うてかなわん」
「修行中の半人前が、えらそうなことを言ってるんじゃないよ」
お露さんが笑う。

「放っておいてくれ。人生は終わるまでが修行や」

（……霊能者？）

本当にそういう人っているんだ、と太一は感心した。

しかし霊能者と聞くと、テレビに出てきて「ここには霊がいます」とか言って他の出演者をキャアキャア騒がせたり、なぜか人生相談を始めて「先祖の霊が云々（うんぬん）」とか言い出すオカルトな人たちしか思い浮かばない。——多分、ミヨシもそう思っていて、だから胡散臭くて嫌だと言っているのかもしれない。

「そうか。霊能者だから、触っただけで蝶が成仏したのか……」

納得して呟（つぶや）いた太一を見つめて、ミヨシは唇の端を歪（ゆが）めるように笑った。

「えらいあっさり信じるヤツやな」

「え？」

「素直はけっこうや。けどおまえ、さっきから言うてること聞いてたら、表の世界で普通に生きてきた人間やろ。魂やら悪霊を祓うやら、あげくに霊能者やて聞いて、ああそうですかてそんな簡単に納得するもんか？　信じられへんとか、こいつアブナイなとか、少しは思うもんと違うか」

絡むような冷ややかな口調だ。

何かいけなかったのだろうかと、太一は思う。

「幽霊を見たことあるか？」
「ないです。多分」
「妖怪を見たのは、今日が初めてか」
「はい」
ミヨシはふぅんと唸るような声をあげた。
「なのにそんな平気な顔しとるんか。よっぽど神経が図太いんやな。たいがいの人間は、生まれて初めて妖怪を見たら、そういう反応はせえへんぞ。――なあ、おまえがここに住む理由て何や？」
「この子は大家の友達の息子なんだよ。それじゃいけないのかい」
お露さんがじろりとミヨシを睨む。
「そんなもん、ここに来る理由にならん」
「つべこべ煩いね、あんたは。悪い癖だよ」
「癖てなんや」
「お節介焼き」
その言葉は本人にとっては不本意だったらしく、ミヨシはむっと黙り込んだ。
「すみません」
太一は肩をすくめた。

多分また、いつものように、他人の感情を汲むことができなくて相手を不快にさせてしまったのだろうと思う。

お露さんとミヨシはそろって彼を見た。

「俺、なんか感情とか感覚が他の人とズレてるみたいなんです。それに……どうでもいいって思うし」

「どうでもいい？」

「ええあの、妖怪とか幽霊とか、俺にはあまり関係ないことだと思うので」

そうか、と呟いてミヨシは白々と目を細める。

「虫籠を部屋に置いといで」

やんわりと、お露さんが会話を打ち切った。

「こんなところでいつまでも立ち話をしていてもしょうがないよ。食堂にきな、スイカを切ってあるから。貉の蝶のことは今すぐどうこうできるものでもないんだし、折りを見てあんたらで算段するんだね。——さて、いくら何でも、大家ももう起き出してきたことだろう」

4

しかし当の時国柊二郎の姿は、食堂にはなかった。

かわりに若い女性がいて、テーブルに置かれたスイカの一切れに齧りついていた。
「お先。いただいてます」
入ってきた太一たちに気づいて、女性は布巾で手を拭うとニッコリ笑った。
二十歳を幾つか過ぎたくらいだろうか。色白で、鼻筋の通った綺麗な顔立ちをしている。身体の線もほっそりと華奢で、和風に着物でも着ていればさぞ似合いそうな印象だが、実際には白いTシャツにジーパンというシンプルかつ飾り気のない格好だった。頭部を覆うバンダナから、長い黒髪がさらさらと背中に流れている。
「帰ってたんか、古都子」
ミヨシは座布団を引き寄せてテーブルの反対側に座ると、スイカを一切れ手に取った。
「あんた、ここにいたなら大家を見なかったかい？」
お露さんに訊ねられて、古都子と呼ばれた女性は肩をすくめた。
「柊さん？　ううん、カケラも見てないけど」
「まさかまだぐずぐず寝ぼけているんじゃないだろうね。まったく、起きてからが長いんだよ、あの男は」
いかにもうんざりしたように言ってから、お露さんは太一をつついた。
「ほら、あんたもいつまでも地蔵みたいに突っ立ってるんじゃないよ」
太一は慌ててぺたりと畳に座った。

その目の前に、はいとスイカが差し出される。
テーブル越しに太一にむかって身を乗り出した古都子の髪からは、かすかに香のようないい香りがした。
「あなたが柊さんの言っていた子でしょ。ここに新しく住むことになったっていう、……ええと確か、阿川太一君ね。私は井原古都子。よろしく」
「――なんでおまえが、こいつのことを知ってるんや」
ミヨシはスイカの種をぷっと吐くと、顔をしかめた。
「だから柊さんから聞いたの」
「俺は聞いてへんかった」
「それはミヨシが柊さんのことを避けてるからでしょ。たまには世間話でもしてみなさいよ。べつに隠してたわけじゃないんだから」
「避けとるわけやない。わざわざ話すことがないだけや。男同士で世間話なぞできるか。気色悪い」
「これだものね」
古都子は笑った。声を抑えた、柔らかな笑い方だ。
あらためて太一を見ると、
「私は木彫り職人なの。師匠があっちの賽河原町に住んでいる人だから、弟子入りしてからは



毎日、ここから師匠の工房に通っているのよ」
「木彫り職人？」
具体的にどういう仕事か太一にはよくわからなかったが、つまり彼女は、妖怪たちの側の世界で働いているらしい。
「あっち、っていうか妖怪の世界って、人間の住める場所なんですか？」
「師匠のこと？　うーん、あの人はとっくに人間をやめちゃってるから。昔は表の世界でも有名だったのよ。そこそこ伝説の人。本人はどうでもいいみたいだけど」
「はあ」
「でもほんと、今日はまいったわ」
これは太一にではなく、独り言のように古都子はぼやいた。
「午後からいきなり夕焼けだなんて。うちの師匠は電気が嫌いで、太陽の光か蠟燭の明かりでしか作業をさせてくれないから、手元が暗くて困っちゃったわ。妖怪たちも今日のはさすがに呆れていたみたい」
「それは難儀だったね」とお露さん。
「うん。でも夕焼け程度のことなら、害はないものね」
あれ、と太一は思った。
「いつもじゃないんですか？」

「え、何が？」
「俺が見た時には夕焼けになっていたから。あっち側って、いつもあんなふうに夕方みたいな空なのかなって思ってたんですけど」
妖怪が棲む世界なら、そういうことがあっても不思議じゃないと思っていた。だが、古都子の口振りでは違うらしい。
「あっちもこっちも、一日の時間の流れは同じよ。朝昼夜、ちゃんと太陽が昇って沈んで、春夏秋冬の一年があって、月も表側の世界と同じサイクルで満ちて欠ける。基本的なことは何も変わらないの。ただ、今日がちょっと特別だっただけ」
「特別って……」
「大家に聞け。説明が長くなるから面倒くさい」
ミヨシがぼそっと言った。
「またそんな言い方をするんだから」
古都子はそっぽを向いたミヨシを軽く睨んでから、
「でも、そうね。つまるところ私にもうまく説明はできないの。こういうことは柊さんが話すべきだと思うし」
「……」
なんだかごまかされたような気がした。

ともかく、永遠につづくかのようなあの夕焼けの空が、異世界であるあちら側にしても異常事態だったということだけは、わかった。

（いつもじゃなかったんだ）

……少しだけ、惜しい気がした。

夕暮れ時のあの町の風景は、とても綺麗だったから。

お露さんが一度厨房へ引っ込んで、すぐに人数分の湯呑みを持ってあらわれた。

「ほら、ほうじ茶だ」

「うわ熱っ。こういう時は氷を入れた麦茶が出てくるもんと違うんか」

「冷たいものばかり腹に入れたら毒だろ。他人の心遣いのわからない男だねえ」

よく冷えて甘いスイカと、たっぷりと熱くて濃いほうじ茶は、思いのほか相性がよかった。

クーラーがないのにそれほど暑いと感じないのは、食堂の広い窓から心地よい風が入ってくるからだ。

ちりん。風鈴がまた、どこかで鳴っている。

（そういえば）

その響きで思い出した。

「ここには小さな女の子がいるんですか？」

「女の子だって？」

両手に持った湯呑みからズッと茶をすすって、お露さんが怪訝な顔をする。
「いいや。ここには子供はいないけどね」
「でもさっき――」
小学生くらいの少女が部屋にいたこと。その子のせいで蝶を逃がしてしまったことを、太一は話した。事情を知らない古都子も、貉の蝶と聞いただけでだいたいのことは察したらしい。
「あのな」
聞き終えて口を開いたのはミヨシだ。
「子供が走って部屋から逃げ出したのなら、廊下で足音くらいするやろ。それなら俺にも聞こえたはずや。けど、そんな音も気配もいっこもなかった」
「でも嘘じゃなくて、本当に」
「嘘やとは言うてない。おまえが会うたのは人間やないてことや。――ここにおったらそういうことは日常茶飯事。覚悟しとけ」
「……人間じゃない？」
だけど、普通の女の子にしか見えなかった。椅子から落ちて、太一を睨んであっかんべーをした。すごく負けず嫌いな感じがして、それがちょっと可笑しかったのだ。
「アカネだね」
お露さんが鼻を鳴らす。

「その子、おかっぱ髪だったろう？　七つかそこらくらいで、クリーム色のワンピースを着て、胸当てつきのエプロンをしていなかったかい」

クリーム色のワンピース。女の子の服はよくわからないし、よく見ていなかったけど、言われてみればそうだった気がする。背中でふんわりと白いリボンのように結ばれていたのは、多分エプロンの紐だろう。

太一がうなずくと、お露さんはやれやれというように頭を振った。

「遅かれ早かれ出てくると思った。あんたが来た時に、なんだかゴトゴトと騒いでいたからね。あんたか蝶か、どっちか知らないけど気になって仕方がなかったんだろうさ」

「アカネってあの子の名前ですか？　……やっぱり妖怪？」

「うーん。アカネちゃんの場合は付喪ってことになるわね」

言ったのは古都子だ。

「ツクモ？」

「古い器物に魂が宿ると付喪神というものになるの。力の強いものは自分で動いたりしゃべったりすることもできるようになるわ。アカネちゃんの場合はそこまで古いってわけじゃないんだけど、持ち主の思い入れがきっと強かったのでしょうね。時々人間の姿になって出てくるのよ。可愛い子だったでしょう？」

「まあ、可愛いかったですけど」

物に魂が宿って動いたりしゃべったりする？
（妖怪と、蝶に化けた人間の魂の次は、付喪？）
というか、そんなことを日常の出来事みたいに平然と話しているこの人たちは、考えてみればすごく変だ。今さらだが。
「だからそのアカネっていうのは、何なんですか？」
「人形さ。あんたも見たろ。玄関のガラスケースに入っていた市松人形。あれがアカネだよ」
「……人形!?」
そういえば玄関のガラクタの中にあった。お露さんがハタキをかけていたガラスのケースの中の、古ぼけた人形。
太一はしばらく黙り込んでから、まず疑問に思ったことを口に出した。
「市松人形なのに、どうして人間の時は洋服なんですか？」
「おまえな、最初に訊くことがそれか」
ミヨシが呆れる。
「実体化して人間の姿になれるくらいなら、ついでにどんなカッコして出てくるのも自由やろ」
「だけどアタシはああいうバタくさい格好は好かないね。なんでも外国の小説に出てくるなんとかって女の子の真似らしいけど」

「不思議の国のアリス」
古都子がクスッと笑いながら言う。
「私は可愛いと思うけどな」
「そうそう、その『ありす』だ。以前の持ち主が、その本をよくあの子に読んできかせていたからね。すっかり影響を受けちまって」
「――以前ってことは、今はもうその持ち主はいないんですか？」
訊いてから、太一は後悔した。人形が客の土産だとかいう他の品物と一緒に玄関に置かれている理由なんて、よく考えてみればわかりそうなものだ。
いないよ、とお露さんは呟いた。
「もうずいぶん前の話だね。亡くなったって聞いたよ。その少し前に、アカネをここに預けていったんだ」
その時、ぺったんぺったんとスリッパを引きずる音が聞こえてきて、食堂のドアが開いた。
「ああ、やっと目が醒めました。お手数かけてすみません、お露さん。起き抜けにこんなに頭がボンヤリするってことは、僕は身体が弱いんでしょーかね」
のほほんとした口調でそんなことを言いながら入ってきたのは、藍色の作務衣を着た、ひょろりと痩せた男である。眉と目尻の下がった、なんだか気の抜けたような顔の造りをしている。顔色が悪いのかと思うほど色白なので、「身体が弱い」と聞けば思わずうなずいてしまいそう

だが、お露さんは容赦なかった。
「あんたのボンヤリは寝起きにかぎったことじゃないだろ。身体のせいにするんじゃないよ。風邪ひとつまともにひいた例しもないくせに」
「なんですか、それじゃまるで僕がバカかハサミか、どっちかみたいじゃないですか」
「それは『使いよう』のたとえだよ。ハサミはもともと風邪なんかひかないからね」
　すると選択の余地なく僕はバカですかそーですか、とアクビまじりに呟きながら、時国柊二郎はテーブルに近づいてきて「どっこらしょ」と座った。
　それから初めて気がついたように、
「これは皆さん、おそろいで。――おや、君が阿川太一君ですか」
　太一にむかってにこやかに会釈した。
「せっかく挨拶にきてくれたのに、遅くなってすみません。僕が大家の時国柊二郎です。呼び方は時国さんでも柊二郎さんでも、時さんでも柊さんでも大家さんでもなんでもいいです。どうぞよろしく。それで引っ越しの予定はいつですか。おや、うまそうなスイカだ」
　ほとんど息継ぎなしにそれだけ言うと、柊二郎はテーブルに出ていた塩の壜に手を伸ばした。自分の前に確保したスイカに、盛大に塩を振りかける。
（それ、かけすぎなんじゃ？）
　と、誰もが思ったあたりで壜をおいて、嬉しそうにスイカを食べはじめた。

「――」

挨拶を返すタイミングを失って、太一は柊二郎を見つめた。他の住人たちも、無言で見守っている。それくらい幸せそうな食べっぷりだ。

やがてお露さんが、埒があかないとばかりに柊二郎の脇腹を肘でつついた。

「あんた、話すことはそれで全部かい？」

「んあ？」

「じゃあ言うけど、この子はここに住むかどうかまだ決めてないそうだよ」

「……え？」

柊二郎の口と手がぱたりと止まった。

「え、え、えええ、えええええぇぇ――!?」

ものすごい驚き方だ。

「ここに来ないんですか、住まないんですか、どうしてですかっ？　あ、もしかして部屋が気に入らなかったとか、住人の若干一名が気にくわなかったとか？」

「……なんで俺を指さすんや」

「ここはいいところですよ。交通の便はいいし食事はおいしいし、アットホームな旅館兼下宿です」

おまけに異世界とつながっていて、人間に化けて動き回る人形やら妖怪やらをナマで見られ

るサービスつきだ。
「俺は――」
「君がここに住んでくれないと、僕はとても困ったことになるんですよ。ああどうしよう、どうしよう」
「何が困るんだい」
あまり訊きたくないんだけどね、という顔でお露さんが訊ねた。
「実は太一君のお父さんから、家賃を三ヶ月分、前払いでもう受け取ってしまっているんです」
「たいした額じゃないだろう。最悪、返せばいいじゃないか」
お露さんが素っ気なく言うと、柊二郎は心底悲しそうな顔をした。
「それ全部、もう使っちゃったんです。――ということは、太一君が空栗荘に来てくれないと、僕は他人のお金を勝手に使い込んだことになってしまいます。ああ困った、僕は犯罪者だ。そうだ、かくなる上は首を吊ろう」
「俺、ここに住みます」
太一のその一言で、柊二郎は悲劇役者そこのけに頭を抱え込んでいた手を、ぱっと下ろした。
「本当に？」
「はい。お世話になります」

べつに「首を吊ろう」という言葉にほだされたわけではない。

――ここが逃げ込める場所でありさえすれば、それでいい。

異世界だろうが、妖怪がいようが、誰が住んでいようが、そんなことはどうでもいい。かまわない。最初のうちこそ迷ったが、このままずっと「家族」と一緒にあの家にいるよりも、ここで一人で暮らすほうが、やはりずっと楽な気がした。

（とはいえ、できればもうちょっと普通の下宿のほうがよかったな……）

人間じゃないものがどっさりいて、それが日常茶飯事だと言われてしまうような、奇天烈な場所じゃなくて。

父さんはここがどんな場所か知っていたのだろうか。ふと、太一は思った。

（知ってたら、いくらなんでもここで暮らせなんて言うわけないか。たとえ友人の頼みでも）

家を出るか出ないかの二者択一で、もし太一が下宿先が気にいらないから家を出ないと言い出したら、啓介だって困るはずなのだ。さっさと家賃を三ヶ月分も前払いしてあったというのが、いい証拠である。

「ああ、よかった。ありがとう太一君。おかげで首を吊らずにすんだから、君は僕の命の恩人です」

柊二郎はあっという間にへらりとした笑顔になった。どこまでが本気でどこまでが冗談なのか、よくわからない男だ。

「というわけで。――はい、これ」
「はい、って」
太一が手渡されたのは、数字を書き込んだプレートである。
「０１４４？　何ですかこれ」
「ドアにかけておいてください。それが君の部屋番号です」
部屋番号？
「それがどうして０１４４？」
二階の一番端の部屋なら、２０１ではないのだろうか。少なくとも「２」ではじまる数字であるべきだろう。
「部屋の番号なんて、そこに誰が住んでいるかの区別さえつけばいいんですよ。一階の部屋だから１のつく番号じゃなきゃいけないとか、１０２号室の隣が１０３号室じゃなきゃいけないなんてきまりはありません。ゆえに、ここでは僕の趣味で部屋番号を決めさせてもらっています。なにしろ僕は、ここの大家ですから」
「趣味ですか」
そういうのって、勝手に決めていいんだろうか。まあ、いいのかもしれないけど、住所を書く時にややこしくなりそうである。
「ちなみに古都子さんの部屋は１１０７号室、ミヨシ君の部屋は５９６３号室です。――ふ

ふふ、わかりますか？　実はこれ、数字の語呂合わせなんですよ。古都子さんは『イイオンナ』、ミヨシ君はこれで結構苦労の多い人なので『ゴクローサン』と読みます」

古都子は「ありがとう、柊さん」と言い、ミヨシは「よけいなお世話や」とそっぽをむいた。

「つまり、車のナンバープレートみたいなもの……？」

車の場合、４２５６「死に頃」とか４９８９「四苦八苦」とか、語呂合わせで縁起の悪いナンバーは嫌われるという話を聞いたことがある。

そう、と柊二郎はうなずいた。

「僕の部屋にも番号がついてますよ。なんと君たちより一桁多い、７８３７４。『悩みなし』、です」

「悩み、ないんですか？」

「ありません」

きっぱりと、柊二郎は胸を張る。

「……。それで、俺の部屋の０１４４というのは？」

即座に、へらへらした笑顔と声が返った。

「『お人好し』です」

「はあ」

ずずーっと、お露さんが投げやりに茶をすする音が、食堂に響いた。


سين 0144

5

ついでに夕食も食べて行くように勧められたが、それは断って、太一は空栗荘を出た。

表側の賽河原町は、最初にバスの中から見たとおりに何の変哲もない町だった。当然ながら、人間の格好をした人間でないものたちの姿はなく、物売りの喧しい声もない。

空栗荘からバス停までは十分ほどの距離で、難なくたどりつくことができた。行きにあれだけ迷ったのがまるで嘘みたいだ。

バスが来るまでの間、太一はベンチに腰をおろしてぼんやりと町の風景を眺めた。

時間だけならとっくに夕刻なのに、空には夕焼けも日没の気配もまだない。アスファルトやコンクリートが陽射しと熱気をはね返して白かった。

人々が歩いている。しゃべっている。車や自転車が通り過ぎる。エンジンの音。クラクション。セミの声。

当たり前の、普通の、日常の光景。

(あっちの世界のほうが綺麗だな)

ふと、太一はそんなことを思った。

——異形と呼ばれるものたちが派手な色の服を着て、生き生きと動き回って、金色の蝶が

町を染める夕焼けに羽ばたいていた、あちら側の町のほうが、ずっと綺麗だ。

家の最寄りの駅についた頃には、さすがに日が暮れていた。太一は駅前のハンバーガーショップで夕食を食べて、啓介の帰宅時間を見計らって家に戻った。

「ただいま」

「おかえりなさい。すぐに夕食にするから、もうちょっと待っててね」

キッチンから顔を出した鈴子に、

「すみません。俺、もうすませてきたから」

太一は頭を下げる。

「え？　あ、そうなの？」

「なんだ、そういう時はちゃんと連絡しろと言っただろう。せっかくつくってくれているのに、悪いじゃないか。高校生にもなって、それくらいの気遣いもできなくてどうする」

居間のソファで夕刊を読んでいた啓介が、顔をあげた。

「ごめん。空栗荘で、どうしても夕食を食べて行けって勧められたもんだから。そのあと急いで帰って来たから、連絡するのを忘れたんだ」

誰も傷つけないための嘘。他人との会話はいつまで経ってもヘタなのに、この家ではこんな嘘が平気でつける。

「いいのよ、そんなことは気にしないで。私は全然かまわないから。太一君が下宿先の人に気を遣うのは当たり前なんだから、ね？」

太一が家を出て一人暮らしをするというのは、鈴子ももう知っていることだ。

「あ、そうだ、それじゃお風呂ね。すぐにお風呂いれるから」

言うなり居間を走り出て浴室へと行ってしまった。止める間もない。

彼女の姿が消えると、太一は肩の力を抜いた。

「それで、どうなんだ？」

啓介が訊ねる。

「え？」

「空栗荘」

「……うん。いい感じだったよ」

立ったままで、太一はうなずいた。

「俺、明日になったら部屋の荷物をまとめるよ。できるだけ早く引っ越そうと思う」

「そうか。気に入ったんだな」

啓介はホッとしたように表情を緩めた。

「柊二郎はどうだった。ちょっと変わっているが、おもしろいヤツだろう？」

「うん」

ちょっとどころでなく変わっているのは確かだ。
もっとも、空栗荘自体が、すでにして変わっているというレベルを突き抜けている。
「そう言えば、父さんのことを『お人好し』って言ってたけど」
（――君のお父さんとはうんと小さい頃に知り合って、そのあと高校で再会したんですけどね。いやもうなんて言うか、とにかく履歴書の長所と短所と特技の欄に書き込めるくらい人が好いんですよね、彼は）
部屋番号の意味を訊ねると、柊二郎はそう応じた。
（つまり息子である君の中にも、彼の『お人好し』ＤＮＡが脈々と息づいているわけです）
（俺、お人好しなんて言われたことはありませんけど）
（大丈夫。ここに住むようになれば、必ず君は『お人好し』に目覚めます）
そんなムチャクチャなことを言われて、結局太一は０１４４のプレートを部屋のドアにかける羽目になってしまったのだ。
「相変わらずそんなことを言っているのか、あいつは」
啓介はため息をついた。
「父さんは空栗荘へ行ったことはある？」
「ああ、まあ、子供の頃に何度かな」
「じゃあ――」

やっぱり訊いてみようか。そんなわけはないと思ったけど、でもひょっとしたら、啓介は知っているのだろうか。——あそこが、空栗荘が人間と人間でないものとをつなぐ場所だということを。

だが、先に口を開いたのは啓介のほうだった。

「柊二郎は学生時代に、『ぬらりひょん』と呼ばれていたんだぞ」

「ぬらりひょん？」

「妖怪の名前だ」

一瞬、太一は息を呑んでいた。

「妖怪？　——あの人、妖怪なの？」

「何を言っているんだ」

啓介は呆れたように、息子を見た。

「そんなわけないだろう。ぬらりひょんというのは、やたらぬらくらした妖怪で、柊二郎にピッタリだからついたあだ名なんだ。だいたい、妖怪なんて本当にいるわけがない」

「あ、うん。……そうだね」

太一は喉元にひっかかっていた質問を、そのまま飲み込んだ。

（妖怪って本当にいるよ、父さん）

啓介はやはり、空栗荘のことは何も知らないようだ。

「引っ越しのことは、荷物の量を見て業者に頼むかどうか決めよう。次の日曜日まで待てば、父さんも手伝うよ」
「うん、ありがとう。じゃ俺、もう部屋に行くから」
「風呂が入ったらすぐに降りてこいよ」
啓介はちらと浴室のほうを見た。
「彼女もああして、おまえに一生懸命に気を遣っているんだから、な？」
「――うん」
啓介の、たったそれだけの言葉に息がつまりそうになる。疲れる。
わかってるよ、と口の中で呟いて、太一は居間を出た。

二章　付喪

1

引っ越しの荷物は多くはなかった。机と布団はすでに空栗荘にあるし、あとは服や本や太一が日常に使っている細々とした物を運ぶだけだったから、業者に頼む必要もなかった。

次の日曜日、太一は父親の運転する車に荷物を積み込んで、空栗荘にむかった。

初日のように途中でまた裏側の世界に入り込んでしまったらどうしようと思っていたが、結局何事もなく車は現実の賽河原町に入って、呆気ないほど簡単に空栗荘に到着した。

玄関脇に車を停めて荷物を降ろしにかかっていると、

「やあ、来ましたね、太一君」

ガラス戸が開いて、柊二郎が顔を出した。

「啓介君も、どうもご苦労さま」

よろしくお願いします、と挨拶した太一の横で、啓介は車の後部席のドアを開けてダンボー

ル箱を指差した。
「これを運ぶのを手伝ってくれ、柊二郎」
「いやです」
即答である。
「大家のくせに」
「大家は普通、引っ越しの手伝いなんてしませんよ。あなたはお人好しのくせに、時々図々しいですね」
「そっちこそ、相変わらずのらくらだな」
それは学生同士のような気安いやりとりで、傍で聞いていた太一はちょっと意外な気がした。
（父さん、本当にこの人と仲がいいんだ……）
クスクス、とその時笑い声がした。
「僕でよければ、お手伝いしますけど」
見ると、生け垣のそばに麦藁帽子をかぶった一人の青年がいて、こちらに笑顔をむけていた。泥だらけの軍手をちょうど脱ぎ捨てたところだから、庭で何か作業でもしていたのだろう。声をかけられるまで、太一はそこに人がいることにも気づいていなかった。
「大家さん、生け垣のメンテナンス、終わりました」
「そうですか。いつもすみませんね、レン君。――ちょうどよかった、君の紹介はまだでし

たっけ」

柊二郎は「おいでおいで」と青年を手招きすると、

「太一君、彼は8783号室の風田レン君です。で、レン君、こちらは今日から空栗荘に住むことになった0144号室の阿川太一君と、おまけでついて来たお父さん」

誰がおまけだ、と抗議の声をあげた啓介を無視して、柊二郎は言葉をつづけた。

「レン君は樹や花の世話がとても上手いんです。それで時々、庭木や花壇の手入れをお願いしているんですよ。何しろここの敷地は樹が多いですから、僕一人ではなかなか行き届かなくて」

「風田レンです。よろしく」

レンは麦藁帽子をとって挨拶した。ミヨシよりも年下だろう。小柄だが、穏やかで優しげな目をした青年だ。

「こちらこそ、息子をよろしくお願いします。仲良くしてやってください」

言いながら啓介は、小さな子供にするように太一の頭に軽く自分の手をのせた。

とたんに太一は強く首を振って、その手を払った。ほとんど反射的な動きだ。

——そんなふうに触られるのは苦手だ。他人の手の感触も温もりも、気持ちが悪い。

啓介は慌てて手を引っ込めた。

その一部始終を眺めて、柊二郎はわずかに目を細める。



けれどもすぐに、何も見なかったみたいにふわっとアクビをして言った。
「それじゃ僕は食堂でお茶でも飲んでいますから。——啓介君は久しぶりに来たんだから、帰る前にもういっぺん僕のところに顔を出していってくださいね」

「手伝ってもらってすみません」
「いいよ。たいしたことじゃないから」
お礼を言ってしまうと、あとは何をしゃべっていいのかわからなかった。
レンはダンボール箱を抱えて、先に階段をのぼってゆく。荷物を持ってあとにつづきながら、太一は黙り込んだ。
(何か話さないと)
相手は親切で手伝ってくれているのだから、このまま黙っているのは悪い気がする。
「あの、……8783号室ってどういう意味ですか」
やっとそんなことを訊いてみた。
「ああ、語呂合わせ？『花屋さん』」
「……まさか風田さんの」
「レンでいいよ」
「レンさんの仕事って」

「花屋。の、バイト」
なんか、そのまんまである。
（まあ、この人のが一番まともな気はするけど）
『お人好し』とか『ご苦労さん』とか『いいオンナ』よりは。
二階の廊下は人気がなく静かだった。外出でもしていて誰もいないのだろうか、と思ったとたんに、太一の隣の部屋のドアが内側からコン、とノックされた。
タカハシさんはいるらしい。
「あの、今日からよろしくお願いします」
荷物を抱えたままドアにむかって言ってみたが、返事はなかった。
太一は隣室のドアを見つめた。部屋番号は『１７４』。どういう意味だろう。
「タカハシさんは騒々しいのが嫌いだから、気をつけたほうがいいかもしれない。それ以外はいい人っていうか、害のない人だよ」
太一の部屋の前で、レンが振り返って言った。
（害がない……？）
なんだか妙な言い方だ。
「じゃ、部屋で音楽を聴いたりしたらまずいですか？」
「それくらいなら大丈夫だよ。とんでもなく近所迷惑な騒音だったら文句を言われるかもしれ

ないけど。でもその場合は、タカハシさんより先にミヨシさんがキレて怒鳴り込んでくるかもね」

レンは笑った。

とりあえず気をつけようと太一は思った。文句を言われるのも怒鳴り込まれるのも、御免だ。他の住人とのトラブルは極力、避けたい。

『0144』のプレートのかかったドアを開けると、ふわりと風が通りぬけた。太一がここに初めて来た時と変わらず、窓の外の桜の枝葉からきらきらと木漏れ日が射し込んでいる。

「これはここに置いておけばいい？」

「はい」

レンは入り口の板の間に荷物を降ろした。手をはたいて太一のほうに向き直ると、

「0144はどういう語呂合わせ？」

「『お人好し』です」

「お人好し？」

「大家さんに言わせると父がそうなので、俺もそのうちそうなる予定だそうです」

「そうなんだ……」

レンはまた笑う。優しい笑い方だ。それから、まるで呟くように言った。

「君のお父さん、君のことをすごく心配しているね」

唐突な言葉に、太一は目を瞬かせた。
「……それはまあ、一応親だから」
すごくかどうかは知らないが、啓介だって初めて一人暮らしをする息子を、人並みに案じるくらいはするだろう。
「うん。……そっか」
一瞬、レンの表情が痛みをこらえるように曇ったことに、太一は気づいていなかった。
もっと他のことに気をとられたせいだ。
部屋を見回して、あれと思った。
（虫籠が）
ない。前に来た時、窓際の机の上に確かに置いていったはずなのに。
あの虫籠までなくしたら、本当に貉との約束を守れなくなる。
駆け寄って机の下を覗き込む。引き出しをひとつひとつ開けて中を調べ、次には空っぽの本棚に目をやった。どこにもない。
「どうしたの？」
レンが訊ねた。
「虫籠がないんです。借り物なんですけど。——ここにあったはずなのに」
風でもでてきたのか、窓の外の桜が小枝を揺らして、ぱしんとガラスを叩いた。

「押し入れの中だよ」
こともなげなレンの声に、太一は顔をあげた。
押し入れに近づき、襖を開けると、レンの言うとおり上段に積み重ねられた布団の上に虫籠がちょこんとのっていた。
「どうしてこんなところに……？」
「お露さんがそこにしまったんだって。誰かが勝手にいじらないように、じゃないかな」
「はあ」
首をかしげていると、ぱしん、とまた窓が鳴った。
「ああそれから、できれば昼間は窓を開けておいてくれって言ってる。春の間に枝が伸びすぎて、いちいちガラスにぶつかるのが煩わしいからって」
太一はしばしレンを凝視した。
「言ってるって、誰がですか？」
「誰がって、もちろんその」
レンは窓の外を指差した。
「桜の木が」
「――」
さらにたっぷりと長い時間、目の前でにこにこしている若者を見つめてから、太一は思い

切って訊ねた。
「網戸は閉めてていいですか。虫が入るから」
ぱしん。
「仕方がない、妥協するって」
「……ありがとうございます」

「おや、もう終わったんですか。ずいぶん早かったですね」
食堂に入ってきた啓介に、柊二郎は湯呑みを手にしたままのんびりと声をかけた。
「もともと大きな荷物もなかったしな。あのレンという青年が運ぶのを手伝ってくれたおかげで、思ったより簡単にすんだ。箱を開けて片づけるのは、太一が自分でやると言っている」
啓介は座布団も敷かずに畳の上に座った。
「あの部屋は懐かしいな。おふくろに連れられてここへ来た頃と何も変わらない。窓の外の桜はずいぶん立派になったが」
「そりゃああなた、あれから三十年以上経ちますからねえ」
「わざわざあそこを太一の部屋にしたのか？」
「もちろん、わざわざですとも」
柊二郎はすまして応じる。湯呑みをテーブルに戻すと、他愛ない世間話の口調でつづけた。

「奥さんはお元気ですか？」
「どちらの」
「両方」
啓介は軽くうなずくと、テーブルに視線を落とした。
「真理子とは――最初の妻とはもう何年も連絡をとっていない。最後に話した時には元気そうだったし、太一に会いたいとも言っていたんだが。それきりだ。鈴子のほうは、この半年ずいぶん頑張ってくれたと思う。太一の母親になるのは無理としても、なんとか家族にはなろうと努力してくれている」
「それはまた、あなたにはもったいないくらいデキた女性ですね。思春期の難しい年頃の息子がいる、さえないバツイチ中年と結婚しようだなんて。相当の胆力と覚悟がなきゃ、やれることじゃないですよ」
「さえないは余計だろう」
啓介は苦笑する。すぐに真顔になった。
「太一が彼女を受け入れてくれれば、何か変わるかもしれないと思ったんだが。結局、事態は悪化しただけだ」
「だいたいあなたは昔から、物事を一生懸命考えるわりには間が抜けていますからね」
「どういう意味だ？」

「前の奥さんと別れたのは、いつ頃ですか」
柊二郎はちろりと目を細めて訊ねた。
「太一が九歳だったから、六年前か」
「で、再婚したのが半年前。――半年前っていったら、太一君は高校受験の直前でしょう。ただでさえプレッシャーの多い受験生に、いきなり父親の再婚相手の、それまで見ず知らずの他人だった女性を引き合わせますかね？」
啓介は、口ごもって「うう」と唸った。
「いや、それは……予定ではもちろん、太一の受験が終わって、もっと落ち着いてからそれとなく段階を踏まえてだな、彼女を紹介するつもりだったんだ。だが、受験まで半月という時に、太一が風邪で寝込んで……おまけに俺の出張が重なって……それこそ大事な時期だから、看病してくれる人間が必要だと思って、な。それで彼女に、家に来てくれるように頼んだわけで……」
柊二郎は処置なしとでも言いたげに、首を振った。
「それで、太一君は何と？」
「いいんじゃない。おめでとう。――まるきり他人事みたいな反応だった」
「どんな反応を期待してたんです。息子が反発して家を飛び出し、父親はうろたえ、再婚相手は泣き出す修羅場とか？」

「茶化さないでくれ」

「――茶化したくもなるさ。相変わらずのおバカだね、あんたは。ほんと、昔とちっとも変わりゃしない。大人になったのは図体だけかい」

「うわっ」

いきなり背後から聞こえた声に、啓介は飛び上がらんばかりに驚いた。

「お、お露さん!?　まだ生きて……、じゃなくて、あなたこそ全然お変わりなくお元気そうでっ」

「はいはい、まだ生きておりますよ。なんだい、人をバケモノみたいに。ほら、茶をいれてきたよ。それとご注文どおりに千登勢堂の水羊羹。まったく人使いの荒い家主だよ」

ぽんぽんとした口調とは裏腹に、お露さんは麦茶と水羊羹ののったガラスの皿を丁寧な手つきで二人の前に置いた。

「うほほーい」と、柊二郎が奇妙な歓声をあげる。

「まあ、ゆっくりしてお行き」

お露さんはふんと鼻を鳴らしてそれだけ言い置くと、さっさと厨房へ引っ込んだ。啓介はそれを見送って、

「ああ、ビックリした。あの人、今幾つなんだ?」

「そんな恐ろしいこと、とても本人に訊けません」

「……本当にここは以前と何も変わっていないんだな」
　啓介は感慨深く呟いた。
「さすがに住人の顔ぶれは変わりましたけどね。あ、目に見えるほうの、ですよ。見えないほうの連中は大半そのままです」
　柊二郎は爪楊枝で水羊羹をひとかけら切りわけ、口に入れた。しばらく甘みを味わうように頬を緩ませてから、
「正直ね、あなたから電話をもらった時には驚いたんですよ。本当に久しぶりでしたから」
　啓介はうなずく。麦茶を一口飲んで、ぽつりと言った。
「すまん。柊二郎」
「何がです」
「電話でも話したが、太一にはおまえに頼まれてここを紹介したことにしてある。俺のほうから言い出したことだとわかれば、あいつは自分がやっかい払いされたと思うかもしれない。――まあ、どのみちそう考えているかもしれないが」
「嘘の苦手なあなたにとっちゃ、一世一代の大嘘ってとこですかね。その苦労に免じて、一応口裏だけはあわせておきましたよ」
　ただね、と言葉がつづく。
「ここがどういう場所なのかはあなたも知っているはずです。なぜこの空栗荘があって、ここ

に集まってくるのがどういう人間たちなのかもね。最後に一度だけ確認しますよ。太一君を本当にここによこしていいんですか？　普通に生きていれば一生知る必要のない世界のことを、あの子は知ることになるんですよ」

「それが悪いことだとは、俺は思わない。あちら側はおふくろが愛した世界だ。……俺には縁がなかったが」

　啓介は肩をすくめた。語尾にかすかに自嘲が混じっていた。

「外から眺めていれば、あちら側は万華鏡みたいな世界だ。不思議で、怖くて、美しくてかたちがさだまらない」

「いえいえどうして、あちらもなかなか大変ですよ。そこに人間が関わるとなるとね。扉一枚隔ててのぞいているくらいが、ちょうどいいんです。ヘタにあちらにのめり込めば、今度は人の世界に交われなくなる。あなたのお母さんのご苦労はご存知でしょう」

　啓介はうなずいた。

「それでも、ですか？」

「俺にはもうどうしていいかわからないんだよ。わかっているのは、太一はこのままではいけないということだけだ。今のままでもあいつは、……笑わないんだ」

「原因は前の奥さんですか」

「ああ」

「虐待？」

啓介は首をふって、いっそう深い息をついた。

「そんな話じゃない。太一があんなった原因は俺にもある。別れる一年ほど前から、真理子は自分の世界に閉じこもるようになっていた。精神科の医者にも通った。だが俺は、彼女の言動がおかしくなっていくことに気づいていながら、仕事を理由に、忙しいのを言い訳に、知らないふりをした。悪いことなど何も起こっていないふりをして、きっとそのうち状況はよくなると自分に言い聞かせて、現実を見ないで逃げたんだ。――だが、太一には逃げ場はなかった」

小学生の子供は、自分の母親が壊れていくのを、同じ屋根の下で目を見開いて見つめていたのだ。

「真理子はまるで太一のことなど見えていないみたいだった。そして太一も、気がつくと母親に関心を示さなくなっていた。何とかしなければと思った時にはもう遅かった。何もかも、取り返しがつかなくなっていたんだ」

「バカですね」

柊二郎は容赦なく一言で断定した。

「ああ」

「情けなくて弱っちくて、一生懸命なのに空回りでぐるぐるしてて、土壇場でマヌケなことを仕出かす大バカです」

「そこまで言うか」
言いますともと呟いて、柊二郎は肩をすくめた。
「まあ、それだけ鈍いから僕とつきあっていられたんでしょうね。……人が苦労して張った結界を、全然気づかずにぶち破ってくれるような人間でしたからねえ、あなたは」
「何を言っているんだ？」
「いえいえ、こちらの話」
柊次郎はへらりと笑ってから、真顔に戻った。
「わかりました。あなたがかまわないのであれば、太一君のことはこちらで引き受けますよ。——多分あの子はひどく怖い目にあって、同じ想いをもうしたくなくて自分で自分を縛ってしまったんです。でもね。どんなに固い結び目でも、何かのはずみに解けないとはかぎらないですから」
啓介は彼を見つめてから、顔を伏せるように頭を下げた。
「太一を、よろしく頼む」

「——やれやれ。友達の息子だというから、どこの友達かと思えば啓介のことだったのかい。それならそうと最初にお言いよ、まったく」
啓介が帰ったあと、お露さんはテーブルの上を片付けながら、ぶつくさ言った。

「太一君を見ればわかるかと思ったんですよ」
柊二郎は片手で頬杖をつき、ぼんやりと窓の外に目をやっている。
「わかるもんかね。太一はあまり父親に似ていないじゃないか。似ているとすれば、むしろ」
お露さんはあとの言葉を飲み込む。ぽつりと付け足した。
「どうりで、アカネが反応したわけだよ。あの子には太一のことがわかっていたんだね」
「はい」
相変わらずぼんやりしている大家を、お露さんは睨んだ。
「初緒さんのことを、太一に教えてやらないのかい？」
「それは太一君が自分で気づいて知らなきゃいけないことですから」
ようやく視線を窓から引き戻すと、柊二郎は「でしょ？」というように微笑んだ。
ふん、とお露さんは盛大に鼻を鳴らす。
「あんた、安請け合いをしたわけじゃないだろうね」
「安請け合い？」
「啓介を安心させるためにさ。――太一はなかなか難しいよ。あの子は初っ端から、『裏側』を通ってここへやって来た。希にいるけどね、あっちとこっちの境界を簡単に越えちまうような人間は、人の世に何の未練も執着もなくて自分のいる場所から逃げ出そうとしている連中が多いんだ」

「でもお露さん。言ってたじゃないですか。彼は妖怪から借りたものをちゃんと返そうとしているって。約束を守ろうとするのは、相手とのつながりを自分から断ちきるつもりはないってことです。本人がどう思っていようと、太一君にはそういうもの、たとえば相手の信頼とか気持ちを無視することができないってことなんです。それが太一君の他者との関わり方なら、わりと大丈夫なんじゃないかと僕は思いますけどね」

「なんだか、わかったようなわからないようなことを言うねえ」

それにね、と柊二郎は頭をかしかしと掻いて、ふわっとアクビをした。

「僕の見たところでは、あの子は父親に輪をかけたお人好しですよ。そういう意味では、ここにいたら苦労するかもしれませんがね」

2

トイレと風呂の入り口にも、それぞれナンバー入りのプレートがかけられてあった。

『1010』と『4126』。――「トイレ」と「よいフロ」である。

(このこだわりは何だろう……?)

内心で首をかしげつつ、太一は食堂にむかった。引っ越しの片づけもあらかたすんで、ちょうど夕食の時間になっていた。

「ああ、太一君。今、レンとあなたの話をしていたのよ。今日からですってね。よろしく」
食堂には先に古都子とレンが来ていた。厨房から揚げ物のいい匂いが漂ってくる。メニューはエビフライとつけあわせのキャベツ、大根おろしを添えた卵焼きに、ニンジンとゴボウのキンピラ。それと豆腐の味噌汁だ。
「ご飯はここよ。セルフサービスだから自分でよそってね。食器類はこっち。お茶はこのポット。おかずのほうは、カウンターでお露さんに声をかけて」
勝手がわからずにまごまごしている太一を見て、古都子は箸を置いて立ち上がると、てきぱきと指示した。子供の面倒をみるみたいに茶碗にご飯をよそって差し出しながら、
「はい。それとお茶。こんなサービスは今日だけよ。明日からは自分でやること。それから、エビフライはタルタルソースか、レモンと塩かどっちか好きなほうでね」
「すみません」
古都子は今日も白いTシャツと藍色のジーンズの飾り気のないいでたちだ。バンダナをとっているので、彼女が動くたびに長くて綺麗な黒髪がさらさらと動く。焚き染められた香のようないい匂いが、ふわりと太一の鼻をくすぐった。なんとなく戸惑う。
「はい、太一君。お隣どうぞ」
トレイに食事をのせてテーブルに運ぼうとしていた太一は、古都子に促されて仕方なく彼女の隣に座った。本当は少し離れて、一人で食べるつもりだったのだ。でもたった今世話を焼い

てもらったこともあって、古都子に笑顔をむけられると断れなかった。
「ごめんね、レン。そこのお塩をとってくれる？」
「はい」
むかい側の席に座っていたレンは、言われたとおりに古都子に塩の壜を手渡した。レンのほうがやはり年下に見えるから、まるで仲のいい姉弟みたいだ。
「太一君は」
古都子が真顔になって声をかけてきたので、太一はちょっと身体を硬くした。
「なんですか？」
「エビフライ、好き？」
力が抜けた。何を訊ねられるのかと、一瞬警戒していた。
「好きですけど。……まずくなければ」
言いながらエビフライにタルタルソースをつけて、口にいれた。
美味かった。
サクサクの熱い衣。弾力のあるエビの身の甘さを、タルタルソースの酸味が絶妙に引き出している。キャベツは柔らかく、卵焼きはふっくらと上品な味わいで、キンピラはぴりりと唐辛子がきいていた。
「おいしいでしょう、お露さんの料理」

まるで自分のことを自慢するように古都子が言う。
「おいしいです。こんな美味い食事、なんか久しぶりっていうか……」
古都子は首をかしげた。
「でも今までは、自分の家でご飯を食べていたんでしょう?」
「——父の再婚相手が、あまり料理の上手な人じゃなくて」
鈴子のつくったエビフライはいつも揚げすぎで、衣がやたら油っぽいうえに肝心のエビの味が抜けてしまっていた。太一の好物のハンバーグは味が薄くて肉がぼそぼそに固く、チキンを照焼きにすればうんざりするほど甘かった。かろうじて普通に食べられたのは、野菜の煮物や和え物くらいだ。
ただでさえ息苦しい食卓は、そのおかげでいっそう気詰まりなものとなった。
ある時、しょっぱすぎるチンジャオロースに閉口して、「無理につくらなくても、外で出来合いのものを買ってくればいいよ」と鈴子に言ったことがある。それを聞いた啓介が、「頑張ってつくってくれているのに、なぜそんなことを言うんだ」と怒った。
どうして怒られるのか、わからなかった。外で買ってきたもののほうがよほどおいしいし、鈴子だってそれこそ「頑張って」料理をつくるよりもよっぽど楽だろうと思ったのだ。
「そうだったの」
古都子が呟くように言ったあとに、会話が途切れる。

こういう沈黙は苦手だ。太一は急いで視線を逸らせると、食堂を見回した。

ミヨシはまだ来ていないらしい。タカハシさんも、もちろんいない。そのかわり——実はさっきから気になっていたのだが——太一たちから離れたテーブルの端っこで、黙々と一人で食事をしている人物がいた。

一見、エリートサラリーマン風。銀縁のメガネをかけた、クールな雰囲気の男である。シワひとつない真っ白なシャツを着て、ぴしりと正座をして食事をしている姿は、なんだかちょっと場違いだ。

男はじきに食事を終えると、立ち上がった。空になった食器をカウンターに戻し、そのままこちらには目もくれずに食堂を出て行こうとしたが、古都子に声をかけられて足を止めた。

「十遠見さん。この子が今日からここに暮らすことになった、阿川太一君」

男はちらと太一を一瞥して、戻って来た。

「太一君、彼は2400号室の十遠見順さん。——あのね、十遠見さん。この子はまだ高校生だから、あまりふっかけないでやってね」

(ふっかける?)

何を、と首をかしげる太一をメガネの奥からじろじろと見やって、十遠見は顔をしかめた。

「学生か。確かに金の持ち合わせはなさそうだな」

じろりと、次に視線が太一の皿に向けられる。

「エビの尻尾を残すんじゃない。もったいないじゃないか」
「はあ？」
太一がぽかんとしている間に、十遠見はさっさと踵を返すと食堂を出て行ってしまった。
「十遠見さんは公務員よ。ちょっとややこしい人だから気をつけて」
「ややこしい？」
古都子は箸をとめると、クスッと笑った。
「なんていうのか、性格がね。あ、もちろん悪い人じゃないのよ。――でも、そうね、商売上手といえばいいかしら」
「それで、気をつけろって何を？」
「頼ってもいいけど、必ず代価を要求されるから、その時はとりあえず半額にねぎること」
「……もしかして、ものすごくがめついとか、あくどいとか」
「ああ、そういうことじゃないの。理不尽なことでお金を要求したりは、その……あまりしないし。お金が好きなだけ」
「はあ」
よくわからないけど、要するに頼らなければいいということだろう。わざわざ頼むことがあるとも思えないし。
「２４００号室っていうのは？」

「『自信満々』て読むの」
確かにそんな感じだったな、と思いながら、太一は自分の皿に目をやった。
（エビフライの尻尾って、食べられるのか……。知らなかった）

3

空栗荘での、最初の夜。
真夜中過ぎに、太一は布団の中で目を開けた。
胸のあたりがずっしりと重く、息苦しい。まるで何かが上に乗っかってでもいるような——。
（本当に乗ってるし）
タオルケット一枚かけただけの彼の身体の上に、少女が馬乗りになって、顔をしげしげとのぞき込んでいた。
アカネである。
例によって、クリーム色のワンピースにフリルのついたエプロン。今回も「不思議の国のアリス」風だ。部屋は真っ暗なのに、彼女の周辺だけ空気が燐（りん）の火のようにかすかに輝いていて、輪郭も色彩もはっきりと見てとれた。
「何か用？」

起き上がれずに横になったまま、太一はとりあえず訊いてみた。
「うん。遊びに来た」
ちんまりと彼の上に腰を下ろしたまま、アカネはこっくりとうなずく。
「じゃあ、十二時間後に出直して来て」
「どうして？」
「多分見たらわかると思うけど、俺、寝てるから」
付喪の人形はぷうっと頬をふくらませた。
「だって初緒は太一と遊んであげてって言ってたもん」
人形が自分の名前を呼んだことに少々の違和感をおぼえながら、太一はまず質問した。
「初緒って誰？」
驚いたように、アカネは目を丸くした。
「初緒はアカネの友達だよ。いつも一緒にいて、遊んでくれたの。本を読んでくれたし、二人でいろんなとこに行ったの。でも初緒はいなくなっちゃった。それでいなくなる時に、初緒はもう遊べないけど代わりに太一と遊んであげてって、そう言ったの」
察するに、初緒というのはアカネのもとの持ち主らしい。
（そうか、亡くなったって。……でもその人がどうして俺のことを……？）
「俺、その人を知らないけど？」

アカネはいよいよ信じられないというように、太一を見た。
「知らなくないよ。初緒は太一を知ってるよ。アカネも知ってるよ。太一と遊んであげてって初緒が言ったもん。だからアカネは、太一のことをずっと待ってたんだもん！」
そう言われても、太一にはこの少女と以前に会った記憶がない。付喪と呼ばれるものの存在自体、空栗荘へ来て初めて知ったくらいだ。
（人間に化ける人形なんて、一度会ったら俺だって忘れないと思う）
「ねえ、本当に俺？　誰か他の人と間違えてない？　ていうか、そろそろ上からどいてくれない？」
ひくっとアカネの喉から息がつまったような音が漏れた。
「……忘れちゃったんだ」
「え？」
ひくっ、ひくっ、ひっく……。アカネの大きな目にみるみる涙が盛り上がり、頬を伝ってこぼれ落ちた。
そっか、としゃくりあげるアカネを見つめて、すごく困りながら太一は納得した。
（人形も泣くんだな）
燐のようなかすかな光を映してころころと落ちる涙は、まるで水晶みたいに綺麗だ。
「太一は忘れちゃったんだ。ひどいよう。……ひっく、アカネは待ってたのに。忘れるなん

て、……ひっく……ひどいよう」
「あの、でも」
「初緒が太一のことを大好きだったのも忘れちゃったんだあ！」
一瞬、息がつまった。
――好きだよ。いつまでもずっと、大好きだよ。
ふたたび、太一はその声を聞いたような気がした。意識の奥底に隠れていた思い出のカケラが、まるであぶくみたいにぽっかりと脳裏に浮かび上がる。
ひとつの光景と、ひとつの会話。それを手繰り寄せようとした、とたん。
「バカバカバカ！　太一なんか大キライ！　もうもう、太一とは絶対に遊んであげないんだからっ、知らないんだからもうごめんて謝ったって許してあげないんだからね！」
くすん、と大きく鼻を鳴らすと、アカネは地団太を踏むように太一の上から飛び降りた。半分泣き顔のふくれっ面で太一を睨みつけると、「あっかんべー」とまたもやこ憎らしく舌をつきだして、バタバタと部屋を飛び出して行った。
ワンピースの裾とエプロンのリボンがひるがえり、あっという間にドアの外の闇に消える。
（あ、まずい）
こんな時間に大きな音をたてたら、間違いなく他の住人から苦情がくる。
太一は慌てて起き上がると、ドアに駆け寄った。そっと廊下をのぞく。暗い夜間灯がついて

いるだけの廊下はしんと静かで、人気はなかった。
（消えた……!?）
いつもいきなり出てきて、いきなりいなくなる。
ちょっとだけ胸が痛んだ。
（何も泣かなくたって）
目の前で誰かに泣かれたことなんてこれまでなかったから、どうしていいかわからなかった。
太一はため息をついてドアを閉める。
もう一度布団に横になり、タオルケットを胸元までひきあげると、天井の暗がりに目を凝らして考え込んだ。
さっき、思い出したこと。
ややあって、呟く。
「……ばあちゃん？」

――誰？
――あんたのおばあちゃん。でも私が会いに来たことは内緒。
――どうして？
日溜まりのような微笑みの記憶。顔は覚えていない。姿も思い出せない。でもその人は確か

にそこにいて、ほっこりと暖かい空気で彼を包んでくれていた……。

「いや、そんなわけない」

太一は天井を見上げたまま、また呟いた。

すぐに奇妙だと気づいた。

それは一体いつの記憶だろう？

太一の祖母は二人ともすでに他界している。父方の祖母は太一が生まれてすぐ、母方の祖母など母親が子供の頃に事故で死んでいるのだ。

だから「おばあちゃん」と呼べる人間と、そんな会話を交わせたはずは、なかった。

（じゃあ、あれは誰だ……？）

朝。目をさまして時計を見ると、八時近かった。

結局明け方まで寝つかれず、ようやくとろとろしたと思ったら今度は寝過ごしてしまったわけだ。

（朝食に間に合わないかも）

時間厳守と言われていたことを思い出し、太一は大急ぎで顔を洗って食堂にむかった。

「最初の朝から寝坊とはね。ずいぶんよく眠れたとみえる」
カウンターでアクビをしている太一にお露さんは皮肉を言って、それでもちゃんと暖かい朝食を出してくれた。
「それとも逆かい。まあ、今朝は大目に見てあげるよ」
察しているような口振りに、昨夜のことを言おうかどうしようか、ちょっとの間太一は迷ったが、なんだか面倒くさくなって「すみません」とだけ言って食事のトレイを受け取った。
今朝のメニューは焼き魚にポテトサラダ、茄子の味噌汁と生卵と海苔。絵に描いたような朝ご飯だ。
食堂には誰もいなかった。置いてある食器が減っていたり、炊飯器のご飯があまり残っていなかったり、人のいた気配はあるから、みんなとっくに食事を終えて仕事に行ったのだろう。
太一には予定はない。引っ越しの片づけはすんでしまったし、今日はどうしよう……と、食事をしながら考えていると、騒がしい足音とともに誰かが食堂に飛び込んで来た。
「オバチャン、朝飯！」
ミヨシだ。こちらも寝過ごしたのか半分寝ぼけたような仏頂面、髪の毛も寝癖がついたままである。
たちまちお露さんのドスのきいた声が厨房から返った。
「いい度胸だね、あんた。昨日はすっぽかしで、今日は遅刻かい？　生憎とオーダーストップ

を五分過ぎているよ」
「わかっとる。けど、頼むわ。オバチャン……やのうてお露さんの飯を食わんと、一日力が出えへん」
「調子のいいこと言ってんじゃないよ」
文句とともに出てきた食事を受け取って、ミヨシは迷うことなく太一が座っている場所まで来ると、真正面の席にトレイを置いた。とって返し、ご飯を茶碗に大盛りによそって戻ってくる。そのまますごい勢いで食べはじめた。
（なんでわざわざそこに座るんだろう）
もそもそとご飯を飲み込みながら、太一は思う。眠いのか他に理由があるのか、今朝のミヨシは前に見た時よりもさらに不機嫌な顔をしている。なんだかデカくておっかない犬に正面から睨まれているみたいで、落ち着かない。
（引越しの挨拶をまだしていないけど……なんだかそんな雰囲気じゃないし……）
「おい」
「はい」
いきなり声をかけられたので、反射的に返事をした。
「夕方、決行する。ええな」
言って、ミヨシは味噌汁をずずずっと一息に飲み干した。

それきりまた黙り込んだから、しばらく待って太一は質問した。
「何をですか？」
「――アホ。魂を獲りに行くにきまっとる」
「あ、そうか」
貉の蝶の「代わり」を探す話だ。
「俺も一緒に行くんですか？」
「当たり前や。なんで俺がおまえのために、一人で苦労せなアカンねん」
「でも俺、霊だか魂だかって見えませんけど」
「なんとかなる」
そういうものなのだろうか。
ミヨシは横目で太一をじろりと見ると、肩をすくめた。
「昨日一日かけて、ええポイントを見つけといた。なかなかイキのええやつがおりそうや」
とても死者の魂の話をしているとは思えない。それはともかく、
「朝からずっと探していたんですか？」
「……」
「夕食にも戻らずに？」
「……飯なら外で食った」

「すみません。俺が妖怪と約束したせいで」
ミヨシは箸を置いた。湯呑みに手を伸ばす。太一がまだ食べているというのに、彼の皿はすでに空だった。
「言葉、間違えんな。『すみません』やのうて『ありがとう』や。そのほうが気分ええ。それと、貉と約束したこと自体は悪いことやない」
「じゃあ、……ありがとう、ございます」
窓の外で蟬が笑い出すようにいっせいに鳴きはじめる。庭の樹木の梢越しに、真夏の青い空が広がっていた。

4

午後五時。「ありがとう」と言ったことを、太一は少しだけ後悔した。
夕方とはいえ、夏の空はまだ暮れる気配もない。太一が貉の虫籠を持って前庭に出ると、ミヨシはすでに先に来て待っていた。
ほい、と押しつけられたものを見て、太一は戸惑った。
「何ですか、これ？」
「見てわかれ。麦藁帽子と虫取り網。おまえの持っとる虫籠とあわせて、小学生の昆虫採集三

点セットや」

「小学生じゃありませんけど」

それ以前に、昆虫採集でもない。

「そのカッコなら他人に見られても怪しまれん」

「じゃあどうしてミヨシさんは普通の格好をしているんですか」

ポロシャツにジーパン、なぜか足下は雪駄ばきのミヨシである。

「二十歳過ぎてそんなアホなカッコができるか」

ぬけぬけと言って顎をしゃくると、ミヨシは歩き出した。

「晩飯までには終わらせる。二日つづけて食事をすっぽかしたら、お露さんに絞め殺されるからな」

「――」

高校生だってこの三点セットはかなり「アホなカッコ」だと思いながら、太一はミヨシのあとをついて行った。

十分も歩くと川に出た。両脇に沿ってのびる道は、桜並木の遊歩道。見下ろすと、二メートルほど下に水の流れが見える。川幅はたいして広くない。川底の石が透けて見えるから、さほど深くもなさそうである。

大人の腰の高さほどの鉄柵があって川と遊歩道を隔てているが、ミヨシはためらいもなくそれを乗り越えると、川岸に飛び降りた。

「はよ来い」

鉄柵の脇に立て看板があって、『危険ですので川に降りないでください』と書いてある。いいんだろうかと首をかしげてから、太一は虫取り網を先に放って、ミヨシにつづいた。

水際のせいかひんやりとした風が流れて、川岸に生い茂った夏草を揺らした。その濃い緑の草をかきわけるようにしてミヨシは川を遡って歩く。

どんどん歩いてゆく。

（どこまで行くんだろう？）

さすがにそんなことを太一が思いはじめた時に、前を歩くミヨシがようやく口を開いた。

「両脇にずっと鉄の柵がつづいとるやろ」

「はい」

「なんでこの川が危険なんかわかるか？」

「さあ」

「雨が降るといきなり水嵩が増すことがあるんや。それがひとつ。――もうひとつの理由は」

ミヨシは歩く速度を緩めると、太一が追いつくのを待って声を低めた。

「この川は時々、通り道になることがある」

「通り道？」
「空栗荘と同じや。あっちの世界とつながって、人間やないもんが川面を通る。そいつらが乗り越えられんようにあの柵がある」
太一は彼を見上げた。
「本当に？」
「どうやろ」
ミヨシはとぼけるように言う。もしかして、からかわれているのだろうかと太一は思った。
「けど、この川は昔『河童川』て呼ばれとったんや。河童に水底にひきずりこまれるから、やっぱ近づいたらアカンて。この町のじいちゃんばあちゃんが子供の頃まで、そう言われとったらしい。……昔話も言い伝えも、まるきり嘘とは言えん。したら、誰かがこの川は異形の通り道やて知ってて、結界のかわりに柵をつくったのかもしれへん」
太一は川面に目をむけた。その時になって、ようやく日が暮れかけていることに気づく。斜めに射し込む光を反射して、川面は光の粒を撒いたように輝いていた。
あたりを見渡すと、少し不思議な風景になっていた。
両脇にのびる柵のむこうはまだ明るいのに、水際には薄青い夕闇が広がりはじめている。まるで空気の色がぱっきり分かれてしまったみたいだ。ひやりと吹いた風が、また川辺の草を揺らした。

「結界って何ですか？」
太一は訊ねた。
「護りっちゅうか、目に見えん壁やな。自然にできるもんもあるし、人間がつくりだすもんもある。わかりやすく言えば、蚊を入れんために網戸を閉めるようなもんや」
「……そんなもの、なくてもいいのに」
なんとなく太一は呟く。本当に、なんとなくそう思ったのだ。
しかし応じたミヨシの声は今しがたの風と同じようにひやりとしていた。
「簡単に言うな。あっちとこっちが交わったら、悪いことのほうが多いんや。人間にとっても、あいつらにとっても、な。異形の道理は人間には理解でけへんし、人間の道理は異形には通用せえへん。仕切りは必要や。そのために空栗荘で俺らは――」
そこまで言って、ミヨシはあとの言葉を飲み込んだ。そうして乱暴に目の前の草を腕で薙ぐと、川面に顎をしゃくった。
「着いたで。あそこ、見えるか」
ミヨシが示した先、川岸の岩が出っ張って手前に水溜まりのような浅瀬をつくっていた。真上に灌木が枝を差しかけているせいで、浅瀬の水面は一際、夕闇が濃い。そこに、ふわふわと幾つもの淡緑の光が踊っている。
「あれは……蛍？」

豆粒ほどの光のうちには、空中に漂うように静止しているものもあれば、跳ね回るように不規則な動きを繰り返しているものもあった。太一は思わず目を凝らした。

「よう見てみ。あの中に他のより少しだけ大きいて青っぽいやつがおるやろ。あれは虫と違う」

言われても最初は区別がつかなかった。やがて、水面でゆらりと漂っているだけに見える光がそうなのだと気がついた。

「じゃあ、あれが」

「魂や」

太一は押し黙ってから、言った。

「でもあれ、蝶じゃありませんけど」

ああ、とミヨシは気のない声を返した。

「今はみんな蛍なんや。蝶はなあ、春やないと。貉もそれくらいわかっとるから、別にとやかくは言わんやろ」

そういうものにも旬があるのか、と太一は感心した。

「逃がすなよ。音をたてんように近づいて、その網で魂だけそうっとすくえ」

脇腹を肘でつつかれ、太一は手に持っていた虫取り網を胡乱に見つめた。

どこにでも売っていそうな、それこそ種も仕掛けも変哲もない、安っぽい網である。まさか

本当にこれを使うとは思わなかった。

（人間の魂って、こんなもので捕まえられるんだろうか）

なんだかずいぶんお手軽な気がしたが、ぐずぐずしていても仕方がないので、太一は言われたとおりに水面の光にむかって網を精一杯つきだした。

ふわあっと散るように光が飛び交う。水面から浮き上がった青い光の一群にむかって大急ぎで網を振った。失敗。背後でミヨシの呆れた声がした。

「アホ。そんなんで捕まるかい。おまえ、虫取りしたことないんか？」

「……ないです」

今度は慎重に網を動かした。空中を乱れ飛ぶ光の粒が、緩やかに動きを落ち着かせるのを待って、そうっと、息を殺しながら、ゆっくりゆっくりと――。

うまくいった。青い光がひとつ、吸い寄せられるように網の中におさまった。

「よし、そのままこっちへ持ってこい」

ミヨシは預かっていた虫籠の蓋を開いた。蛍に化けた死者の魂は、いったん網の中から舞い上がったが、一瞬輝きを強めたかと思うとついっと自分で籠に飛び込んだ。こっちの水はあーまいぞ、と口ずさみながらミヨシはパタンと蓋を閉ざす。息をつめて見つめていた太一も、思わずほっと肩の力をぬいた。

「よっしゃ、一件落着」

その時だった。

「こらあっ！　阿川太一！」

いきなり元気のいい声が響いた。

「蛍を獲ったら駄目じゃないかっ！」

太一は首をすくめて声の方角を振り返った。川面ばかりを見ていたから気づかなかったが、太一の頭より高い場所にある柵の「あちら」側は、燃えるような金色に染まっている。日没寸前の太陽の光だ。見上げたら目が眩んだ。

何度か瞬きを繰り返して、声の主を確かめた。一人の少女が、柵から身を乗り出すようにしてこちらを睨んでいる。

「あ……」

ちょっと驚いた。

クラスメートの和泉栄奈だった。

ミヨシがチッと舌打ちした。

「知っとるやつか？」

「うん。同じ高校の……同じクラスの」

やれやれというように顔をしかめると、ミヨシは蛍を入れた虫籠を太一に渡し、コンクリー

トで補強してある斜面を一息に駆け登った。苦もなく柵を越えて、今度は太一に手を差し伸べる。一瞬困ってから、太一は虫取り網と虫籠を相手に預けて、手を借りずにどうにか柵を乗り越えた。

そうして、あらためて和泉栄奈と向かいあった。

栄奈はもう彼を睨んではいなかった。明らかにたじろいだ様子で、そそそ、と太一の背中に回ると、ぴたっとくっついてきた。小さな動物が怯えて物陰に隠れるような素振りに、太一のほうが困惑する。

「何やってんの？」

栄奈は太一の肩越しにこわごわとミヨシを見た。

「その人、阿川君のお兄さん？」

「ミヨシさん？　同じ下宿の人だけど」

「じゃあ、赤の他人⁉」

「……普通一般には、知り合いって言うと思う」

どうやらミヨシがおっかないらしい。それでも、果敢に栄奈は声をあげた。

「この川の蛍はみんなのものなんだからっ。わざわざ遠くから見に来る人もいるのに、蛍がいなくなったらみんなガッカリするでしょっ。だから勝手に獲って家に持って帰ったり、業者に売ったりするのは駄目！　ルール違反！」

正しい主張だが、人の背後に張りついたまま言われても困るな、と太一は思った。触られたり摑まれたりしたわけではないが、背中がもぞもぞする。

しかしまさか、籠の中にいるのは本物の蛍などではなく人間の魂だと説明するわけにもいかない。

（どうしよう）

ミヨシはむっつりと采奈を見ていたが、何を思ったかぐいっと彼女にむかって身を乗り出すと、

「わっ！」

「きゃあぁ！」

お化けに驚いた子供みたいに、采奈は太一の背中で身を縮めた。露骨に怖がる彼女を見て、ミヨシはちょっと傷ついた顔になった。

（だったらやらなきゃいいのに）

「あのな」

ミヨシは頭をがしがしと掻いて、真面目くさった声を出した。

「あんたの言うことは正しい。けどこれ、蛍やないで」

「え？　でも……」

「これは、南米産ホタルモドキや」

「ホ、ホタル……モドキ……？」
何なのだろう、それは。
「もともと日本におった蛍と違う。外国から来たばかりの新種で、環境省が今調査しとるとこや。ほら、よう見てみ。日本の蛍よりデカいやろ」
ミヨシが虫籠を持ち上げると、死者の魂はぺかりと一際強く光を放った。本体はよく見えなかったはずだが、采奈はこくこくとうなずいた。
「う、うん。本当、おっきい」
「こいつの幼虫もえらいデカいうえに大食漢でな。蛍の幼虫はもともと肉食で川におる貝を餌にしとるんやけど、ホタルモドキはあっという間にその貝から何から餌になるもんを全部食い尽くしてしまう。せやからこいつらが増えたら日本の蛍は絶滅してまうかもしれへん。そうなったら大事や。時々テレビや新聞で、外国から来た生き物が環境破壊で問題になっとることがあるやろ？」
「あ、うん。ブラックバスとかカミツキガメとか――」
「そや。実は俺は環境省の調査員で、ホタルモドキが日本の蛍に及ぼす影響を調べるために、こうして捕獲してデータをとっとるというわけや」
（うわ、すごい嘘）
しれっとした顔で口からでまかせを並べるミヨシを見て、太一は呆れる。

「え、そ、そうなの？」
　采奈は目を丸くした。
「で、ここにいる阿川太一君には、同じ下宿のよしみで、夏休みの間だけバイトで今回の調査を手伝ってもろとる」
「なぁんだ、そうだったんだ」
　采奈に肩越しにのぞき込まれ、太一は仕方なしに「うん」とうなずいた。
「そっか。よかったあ。――ごめんね、蛍を盗もうとするなんて、阿川君て本当は他人の気持ちも考えない根性腐れのすごい性格悪いやつかも、なんて勝手に思い込んじゃった」
　ようやく太一の背中から離れて、采奈はきゃらっと笑った。
「根性腐れ……」
　本当に蛍を獲っていたんじゃなくてよかったと、太一は思う。「暗い」とか「つまらない」ならともかく、さすがにそこまでは言われたくない。
「そっか、バイトなんだ。いいな、調査員のバイト。なんかおもしろそう。あでも、下宿ってことは阿川君てもしかして、一人暮らししてんの？　……あれ？　確か阿川君の家って一戸建てで家族と一緒に住んでなかった？　住所だってここからずいぶん遠い……」
「なんで知ってんだよ、そんなこと？」
　太一が首をかしげると、采奈はあっと小さく叫んで、まるで空中をひっかきまわすみたいに

わたわたと両手を大きく振った。
「あああっとそれはクラス名簿を見たの。うちの近くに住んでいる人が誰かいないかなって。誰もいなかったけどっ。それで、阿川君の家のことは親戚があのあたりに住んでて、通りかかった時に見たのっ、たまたまっ」
「へえ」
それだけ言うのに、どうして顔を赤くしてジタバタしなきゃいけないんだろう、と太一は思った。
「俺、ちょっと事情があって賽河原町の親父の知り合いのところに下宿することになったんだ。二学期からは、こっちから学校に通うから」
「ええ、嘘！　本当に!?　その下宿、どこ？」
栄奈は目を真ん丸くした。
「中央の、バス停の近くに空栗荘って旅館があって、そこ」
「旅館なの？　あれえ、でも中央のあたりにそんなのあったかなぁ、うーん……？」
眉を寄せて考え込んでいる栄奈を見て、太一はしまったと思った。何も住んでいる場所まで教える必要はなかった。それに空栗荘は普通の場所じゃない。ちらと見ると、ミヨシは唇の片端を小さくひきあげた。笑ったのか顔をしかめているのか、どちらだろう。
「でも、同じだね！」

ひとしきり首をひねったあとで、采奈はぱっと笑顔になった。相変わらず、くるくると表情が変わる。

「同じ？」

「うちね、ここのすぐ近くなんだ」

「和泉って賽河原町に住んでるの？」

どうしてだか、太一は一瞬ひやりとした。もちろん彼女は「表」の側の住人であって、あちらの世界の者ではない。賽河原町に住んでいても、あちらのことは何も知らないはずだ。なのに、それこそ異世界で現実の世界の知り合いにばったり出くわしてしまったような、妙な気分がした。

「うんっ。……うわあ、なんか嬉しい！」

「何が？」

「え、だって同じ学校のクラスメートが一緒の町に住んでるのって、なんか嬉しくない？」

それはさっぱりわからない。

「さっき本屋に行った帰りに阿川君を見かけて、もうビックリしちゃった。だって持ってるのが虫取り網に虫籠でしょ？　え、なに、この人って学校じゃ一匹狼なのに、昆虫採集が趣味なんだ、うわあ意外って思って、ついて来ちゃったんだ」

悪びれもせずに言って、采奈はえへへと笑った。

「なんだよ、それ。……一匹狼？」
「知らないの？　クラスの女の子たちも言ってるよ。阿川君て笑わないし無駄口をきかないし、一人でも全然平気って顔をしてるから。なんだかんだ言ってみんな、無理矢理でも友達をつくって群れたがるじゃない？　阿川君はそういうの全然関係ない感じだから、すごいよねって」
「ふぅん」
（何がすごいんだろう？）
群れないのではなく、群れ方がわからないだけだ。
「おい。夕飯に間に合わんようになるから、そろそろ行くで」
傍らのミヨシが、素っ気なく割り込んだ。
「あ、ほんとだ。暗くなってきちゃった。私も帰らないと怒られちゃう。じゃね、阿川君！」
――あそうだ、今度この町のお祭りあるけど、来る？　お盆の夏祭り。賑やかですごく楽しいよ。おいでよ絶対！　じゃあね！」
最後の「じゃあね」のあたりでは、栄奈は大きく手を振りながらすでに何メートルか先まで走り出していた。そのまま、あっという間に夕闇の中に消えてゆく彼女を見送って、「祭りか」となぜか苦々しくミヨシは呟いた。
「賑やかな娘やな。おまえの彼女か？」

「話をしたのは今日で二度目」

へえ、と気のぬけた声を返して、ミヨシは歩き出す。

帰りは川岸ではなく、遊歩道を戻った。

藍色に透き通った黄昏。西の空にわずかに消え残る光と家々に灯る明かりが交じり合い、昼と夜の間ですべてのものが輪郭を曖昧に揺らがせる、誰そ彼時。

ジョギングや犬の散歩をさせている人たちと、時おりすれ違った。

ミヨシは手を伸ばすと、いきなり太一の頭から麦藁帽子を取った。持っていた虫籠にそれをかぶせて隠すようにしてから、太一の手に押しつける。

「そうやって持っとけ。また誰かに、蛍を獲ったやろて言われたらやっかいや」

肩に担ぐように虫取り網だけ持って、ミヨシはさらに足を速めた。取り残されそうになり、慌てて歩調をあわせながら、太一はふと思ったことを口にした。

「あの、これ、本当に貉に渡していいんですか？」

麦藁帽子と一緒に抱え込んだ虫籠。指先がほんのりと熱をおびて感じるのは、錯覚だろうか。

「なんで」

「俺だったら死んだあと、虫取り網で獲られて籠に入れられるなんてイヤだなって……なんとなく」

「そいつの心配をしとるんか？　けったいなこと言うやつやな」

ミヨシは横目で彼を見た。ぶっきらぼうな口調で、
「なんぼ人間の魂でも、そうなってしもたらもう意思も感情もない。成仏しそこなって、ふわふわさまよって、そのうち消えてしまう。貉のとこに行ったほうがまだマシやで」
「そうなんですか？」
「あいつはそうやって捕まえた魂をよう可愛がるから。大切にされることで供養になるんやろ。貉に飼われた魂は、最後はちゃんと上へあがっていきよる」
「上？」
「死んでから行くべきところ」
そんなところがあるのか、と太一は思った。それは天国だとか極楽だとか言われている場所なのだろうか。
「そっか。……なら、いいけど」
「ほんまけったいなやつ」
ミヨシはもう一度そう言ったが、それはさっきよりも柔らかな口調だった。
「はよ来い。ぐずぐずしとったら、ほんまに飯に間に合わんようになる」

空栗荘の前まで来た時だった。
すう、と気温が下がったような気がした。

なんだろう。一瞬身震いして太一は考える。足下を流れていくような冷気。この感覚は、たとえていうなら――。

（ドライアイスの煙？）

ミヨシの足が止まった。

「おい」

低く張りつめた声に、思わず太一は彼を見上げる。声だけでなく、一点を睨みつけるミヨシの表情もぞっとするほど鋭い。

「あいつと目を合わせんなよ」

「……あいつ？」

ミヨシの視線の先。空栗荘の門の前に、何かがいた。真っ黒な、霧のようなもの。車ほどの大きさの、もやもやと輪郭のさだまらない、何か。

（何だろう、あれ）

気味が悪い。太一は小さく息を呑む。

冷気はその霧のようなものから流れ出している。

「魅かれて出て来よったな。――祭りが近いせいか」

「祭りって、あの」

全部言い終えることができなかった。黒い霧のようなそれが、こちらに気づいた。――気



づいたのだと、どうしてだかわかった。
ミヨシが舌打ちする。
「アホ。目を合わせるなて言うたやろ！」
「……すみません。どこが目なのかわかりません」
いや、その前に。
「一体何なんですか、あれ？」
「死霊や。本気でタチが悪い類のな」
幽霊とか怨霊とか背後霊とか自縛霊とかいろいろ耳にしたことがあるけど、死霊というのはどのへんにランクインするんだろうと思いながら、太一は守るように麦藁帽子ごと虫籠を抱きしめた。
（そういえばこれも、死者の魂なんだけれども）
ずるっ。
霧が動いた。ゆっくりと。まるでにじり歩くように、こちらにむかってきた。
ずる、ずる、ずる。肉の腐ったような臭いが冷気とともに吹き寄せる。霧の中に人間の手が見えた。何本も。血の気がなく真っ白なそれが、地面をひっかくように摑んでは前へと這い進んでいるのだ。
吐き気がした。

「俺があいつを引き留めておく。その間におまえは空栗荘へ行って、十遠見を呼んでこい」
「十遠見さんを？」
「ええか、絶対にあの黒いのを見るなよ。俺が合図したら横を走り抜けろ。それと、門の中に入るまで息は止めとくんや。わかったな」
「は、はい」
意味はわからなかったが、そうしなければならないことはわかった。それくらい、ミヨシの口調は有無をいわせなかった。
「臨兵闘者皆陣裂在前！」
右手の中指と人差し指で、素早くミヨシは空間を縦横に切るような仕草をした。つづいて、
「ノウマクサンマンダ　バサラダンセン　ウンタラタカンマン！」
太一は目を瞠った。ほんの一瞬だったが、細い光の糸で編まれた網が空中を広がって、死霊に絡みついたように見えたのだ。
「――縛」
死霊の動きが止まった。
「今や。行け！」
合図とともに、太一は息を止めて駆け出した。

「十遠見さん！」
食堂に飛び込んできた太一を見て、古都子とレン、そして十遠見の三人は驚いたように食事の手を止めた。
「十遠見さん十遠見さん十遠見さん――っ！」
「なんだ？」
と、十遠見が訊いた。
「早く！　――死霊っ、ミヨシさんミヨシさん！」
「ちゃんとわかるように言いたまえ」
十遠見は右手に茶碗、左手に箸を持ったまま、顔をしかめた。左利きらしい。
「だから、外に死霊ってのがいて、ミヨシさんが十遠見さんを呼んでこいって――っ!!」
「なんでまた」
「知りません！」
ざあぁっと、突然、食堂の外の樹木が揺らいだ。ぴしぴし、ぱし、と枝が窓を叩く。
その音に耳をすませていたレンが、口を開いた。
「うん。少しやっかいなのが来ているみたいだ。ミヨシさんが表で相手をしている、けど」
「行っておやりよ」
そう言ったのは、厨房から顔をのぞかせたお露さんだ。

「多分ミヨシは、あと二、三日は力を出せない。例の周期さ」
そういうことかと呟いて、十遠見は茶碗と箸をテーブルに置いた。「よっこら」とそのクールな外見に似合わない掛け声とともに立ち上がる。
「世話の焼ける。――今回は五千円といったところか」
食堂を出ていく彼をぽかんとして見送っていた太一に、古都子が冷たい水を入れたコップを差し出した。
「驚いたでしょう。落ち着いたらご飯を食べちゃいなさいよ。今夜はお露さん特製の麻婆豆腐。辛いのは好き？」
「好きです。それで、ミヨシさんは……？」
「大丈夫よ。十遠見さんがサポートに行ったから」
「十遠見さんて、公務員じゃないんですか？」
「公務員だよ」
お露さんが無愛想な声で割り込んだ。食器が片付きゃしない、と小声でぼやいてから、
「あれで国家公認の術者だからね。ここにいるのもお上の命令さ」
（国家？　公認？）
よくわからないが、それだけとんでもなくすごい人のように聞こえる。
「術者ってことは、十遠見さんも霊が見えてお祓いができる人なんですか!?」

「まあ、一般的な解釈としてはそれでいいのかねえ」
太一は目を瞬かせた。
——どうしてここには、そんな奇妙な人たちばかりが集まっているのだろう。
「今回は間が悪かったわね」
古都子が呟くように言った。
「ミヨシもいつもなら、死霊のひとつやふたつは自分で対処できるはずなんだけど。ちょうど、不調の時期にかかっているみたいだから」
「ミヨシさん、具合でも悪いんですか？」
病気とか怪我とか。でもそんなふうには見えなかったけど、と太一は思う。
お露さんがふんと鼻を鳴らした。
「あの男は、自分の力のコントロールができないんだよ。調子のいい時と悪い時の波が激しくてね。なまじ力はあるからすぐに暴走して、反動で月に一度は熱を出してひっくり返る。そうなると祓いもままならない役立たずさ。今がその時期ってことだ」
「はあ」
「この分だと、明日あたり熱を出して寝込むかね。ま、三日も経てばけろりとして元に戻るけども。——ミヨシがいつまでたっても半人前の所以さね」
その、刹那。

電流のようなものが、音もなく空気中を走り抜けたように、感じた。
樹木のざわめきが消えて、なんともいえない静寂が、そのあとに訪れた。
「終わった。……でも、ミヨシさんが……」
レンが言い終えるより先に、太一は今までしっかり抱いていた虫籠を帽子ごと、古都子に手渡した。
「それ、預かっていてください！」
言うなり、食堂を走り出た。
「あ、ねえ、太一君!?」
古都子は首をかしげると、麦藁帽子をちょっとずらして、虫籠の中身を確かめた。そういうことだったの、と納得したようにうなずいてから、
「レン。ミヨシがどうしたの？」
「ええあの、十遠見さんとケンカしてます」
いつものことですけど、と困ったようにレンはつけ加える。
古都子とお露さんは顔を見合わせた。
「始末料で五千円は、確かに高いと思うわ」
「まったく、十遠見にとっちゃいいカモだよ、ミヨシは」
やれやれというように肩をすくめ、それからお露さんは出て行った太一の姿を追うように、

食堂の入り口に視線をやった。
ぼそりと言った。
「お人好しか。……なるほどね」

門の外から鋭い声が聞こえる。道路に飛び出し、その場を一目見て、太一はつんのめりそうになった。
（あ、元気だ）
ミヨシは無事のようだった。長い足を投げ出して地面に座り込み、何やらわめいている。傍らで十遠見が、腕を組んで冷ややかに彼を見下ろしていた。
死霊の姿はどこにもない。まるで最初からそこには何もいなかったように。
「三千円や、三千円！　それ以上はビタ一文出さんで！」
「命の恩人に対してそういう態度は感心しないぞ」
「なーにが命の恩人や。公僕やったらたまには納税者に奉仕せい！」
「こちらは正当な報酬を要求しているんだ。時間外勤務だからな。死霊を一体祓うのに五千円なら、安いものじゃないか」
「祓う間、あいつが動けんようにおさえとったのは俺やろ！」
（五千円て、そういうことか）

どうやら助けてやったのだから金を払えということらしい。十遠見を頼ると必ず代価を要求される、と古都子が言っていたのを太一は思い出した。
「おい」
言い争いをぼけっと見ていた太一に気づき、ミヨシが声をかけた。
「そこで何しとるんや、おまえは？」
「あの……大丈夫かなと思ったので」
「アホ、大丈夫にきまっとる。素人のくせしていちいち気にすんな」
なぜか怒ったような声で言うと、ミヨシは立ち上がった。——いや、立ち上がろうとしたのだが、力が入らずにまた路上にへたり込む。
「くそっ。肩かせ、十遠見」
「空栗荘まで支えていけというのなら、プラスして五百円だ」
「この守銭奴！」
「その言い方は美しくないな」
十遠見は指先でメガネを押し上げると、ふっと笑った。
「私は拝金主義者なのだよ」
いばって言うことだろうか。
「もうええわっ。——こっち来い、太一。おまえが手をかせ」

「え……」

言われたとおりにミヨシのそばまで行って、太一は困った。

他人に触られたくない。しかし、相変わらず有無をいわさぬ調子で、ほら、とミヨシは手を差し出す。そうして白々と目を細めた。戸惑いを知られた気がして、太一は軽く息をつめる。

(触られるんじゃなくて、自分から触るんだ。それなら)

自分に言い聞かせ、思い切って、ミヨシの手を摑んだ。驚くほど熱い。背中のあたりが少しだけぞわっとして、太一は歯を食いしばる。相手の手を振り払うかわりに、もっと強く指に力をこめた。

そのまま、ミヨシの腕を担ぐように自分の肩に回した。つっかえ棒になった気分で、踏ん張って歩き出す。

ミヨシは容赦なく体重をかけてきた。

(重いっ)

初めてだ、こんなふうに誰(だれ)かの重みを支えるなんて。

——自分から誰かに触れたことなど、今までなかったことに、気づいた。

「フラフラすんな。おまえ、細すぎ。高校生ならもっと筋力と体力つけろ」

一緒にフラフラと空栗荘の玄関を目指して歩きながら、ミヨシが勝手なことを言う。

「まるで駄々(だだ)っ子だな」

十遠見のほうは、金をもらわなければ本気で手伝う気はないようで、うしろから二人の様子を眺めながらコメントした。

（俺、何してんだろ……）

空栗荘に越してきて、二日目。

明日、貉に会いに行こうと太一は思った。蛍に化けたあの魂を返しに行こう。それでやっかいなことは終わりだ。あとは、妖怪だとか幽霊だとか、ここに住む奇妙な住人たちのこととか、なるたけ見て見ぬふりで関わらないようにしよう。あちら側など、もともと彼には関係のない世界なのだから。

ミヨシの呼吸が、少し苦しげに耳元で響いていた。

「あのう、このまま部屋に行きますか？」

「食堂。飯がまだや」

「え、具合がよくないのに食べるんですか⁉」

「食う。何がなんでも食う。死んでも食う」

本当に駄々っ子みたいだ。

ジジジ、と庭の樹にいる蟬が闇の中で寝ぼけたように一声鳴いた。

5

翌日。

朝食を終えて出かけようとしていた太一は、玄関でお露さんに止められた。

「まさかあんた、一人で貉のところへ行くつもりじゃないだろうね？」

なぜそんなことを言われるのかわからなくて、太一はスニーカーに片足だけ突っ込んだ格好で相手を見返した。

お露さんはため息をつく。

「あっちの町を甘く見るんじゃないよ。最初にここへ来る時だって、それこそ貉に道案内を頼まなきゃならなかったんじゃないか。あんた一人じゃ迷子になって遭難するか、ヘタすりゃとって食われるのがオチさ」

「食われるんですか？」

「妖怪の全部が全部、人間に好意的だなんて思わないことだね。これだけはハッキリと言っておく。連中とつきあうには、それなりの注意と覚悟が必要なんだ。妖怪はお伽話なんかじゃない、人間と同じようにしっかりとこの世に存在しているモノなんだからね。人間にとって都合のいい存在でも何でもないんだよ」

（――あっちとこっちが交わったら、悪いことのほうが多いんや）

ミヨシの言葉を思い出した。

（でも、悪いことって具体的にどういうことなんだろう）

妖怪の出てくる昔話や怪談を、太一はあまりよく知らない。せいぜいが、誰でも知っているメジャーな妖怪の名前を幾つか聞いたことがあるくらいだ。

「こういう時は慣れた者が一緒について行くのが一番なんだが……、さて困ったね。案の定ミヨシは今日は熱を出して部屋で寝込んでいるし、古都子とレンは自分の仕事があるしね。タカハシさんは論外だし、アタシは空栗荘を空けるわけにはいかない。十遠見は……役には立つけどタダ働きは絶対にしないからねえ。大家は根っからの役立たずのうえに、逆に面倒ばかり引き起こすにきまっている。うーん……」

「大家さんて普段は何をしているんですか？」

「たいがい寝てるね」

「寝てるんですか？　いつも？」

「起きている時間のほうが短いんじゃないかね。ま、起きてたって寝ぼけたような男だけどさ」

お露さんはそのまま考え込み、それから「ああそうだ」と呟いた。

「仕方がない。アカネを連れておゆき」

「えっ」

言葉を失った太一を尻目に、お露さんは玄関のガラクタの山からガラスのケースを「よいしょ」と発掘して、中から人形を取り出した。

赤い振り袖の市松人形。肩でそろえた黒髪と、ぷっくりとあどけない少女の顔。着物の柄は赤地に散った白い小花、金糸で刺繍をほどこした帯が背中で羽のように大きく結ばれている。

「綺麗だろう。どこぞの名人がつくった逸品らしいよ。この胡粉の見事なことといったら、本当に生きているみたいだ。だから魂も入りやすかったんだろうねえ」

手にした人形を惚れ惚れと眺めるお露さんだが、太一にはどうやってもただの古い人形にしか見えない。

（そうすると、おとつい怒って部屋を出て行ってから、自分でこのケースの中に戻ったってことになるんだろうけど……？）

なんだか、今さらながらここの住人たちにからかわれているだけじゃないかという気がしてきた。目の前の人形と、おとついの夜に太一の部屋でぽろぽろ泣いて憤慨していた少女とが、どうしても結びつかない。

はいよ、とお露さんは人形を太一の前に差し出した。

「連れて行きな」

「……どうやって」

「人形なんだから、抱いていけばいいだろう」
太一は黙り込んだ。お露さんも沈黙した。二人して人形を間にはさんで無言をつづけたあとに、お露さんは諦めたようにふっと息をついた。
「わかったよ。抱いていくのが嫌なら、カバンにでも入れて持って行きゃいい」
ごそごそとまたガラクタの山をひっかきまわすと、お露さんはなぜかそこに置きっぱなしになっていた空のリュックサックを拾い上げた。
身の丈四十センチほどの人形が、まるであつらえたみたいに、すっぽりとその中におさまった。
「でも俺、ケンカしちゃったんですけど」
リュックを無理矢理持たされて、それでも太一は一応、抵抗を試みた。
「ケンカ？　アカネとかい？」
「というか……一方的に怒られたっていうか」
「ちょうどよかったじゃないか。道すがら、二人でよく話し合って仲直りするんだね」
にべもなく言われ、仕方なく太一はリュックを背負い、片手に虫籠を持って、玄関のガラス戸を開けた。
目の前に巨大な人間の顔があった。
「――」

髭面の男の「顔」だ。戸口をふさぐようにして、それはぎょろりと目をむいていたが、太一を見ていきなりカカカと大口をあけて笑い出した。

太一はぴしゃりと戸を閉めた。三つ数えてもう一度開けると、男の顔は消えていた。

「……行ってきます」

「夕飯までには帰るんだよ」

何事もなかったかのような、お露さんの返事だった。

前に来た時とは逆に、空栗荘からつづく坂道を太一は踏みしめるように降っていった。両側に鬱蒼と樹木の茂る道は、空気がひんやりとして薄暗い。

蝉の声が爆ぜるように響いていた。

(こっちにも蝉がいるんだ……)

見上げると、梢のむこうに真っ青な夏の空が広がっている。

やはりあの日、空がいつまでも夕焼けに染まっていたのは特別のことだったんだ。なんとなく、太一は息を吐く。

だけど特別って何だろう? 理由は大家に訊けと言われていたのに、訊くのを忘れていた。そういえば時国柊二郎とは、引っ越してきた最初の日以来会っていない。

「……あのさ」

しばらく歩いてから、太一は背中の人形に話しかけた。
「あの、こないだのことだけど」
虫籠を持っていないほうの手で、なるべくそっとリュックを背負いなおす。たいして重さは感じなかったけれども、妙な気分だ。
背中からの返事はない。
(人形の時はしゃべったりしないのかな)
思い切って口を開いたのに相手が反応しないから、その先をどうつづけていいかわからなくなる。
「その初緒(はつお)って人のこと……どんな人だった？　女の人、だよね？　若いの？　年は幾つくらいだった？」
もしかしたら自分は本当にただ忘れているだけなのかもしれない、と太一は思う。実を言うと、子供の時のことはあまりよく覚えていないのだ。特に母親が家を出た九歳より前のことが、どうしてだかほとんど思い出せない。
「その人、どうして俺に会いに来たの？　いつ、どこで会ったのかな。俺のこと好きって……どうして」
やはり、人形はうんともスンとも言わない。
太一は歩きながらため息をついた。

「あのさ、もし俺がその人のことを忘れているんだったら、いろいろ話を聞いているうちに思い出すかもって思うんだ。アカネのこととかも、多分……きっと」

そこまで言って、太一は口をつぐんだ。

（……なんか俺、今ちょっとアブナイ人間のような）

いくら異世界とはいえ、男が人形を持ち歩いてそれにぶつぶつ話しかけているなんて、傍から見ればただのヤバい人だ。

（せめて女の子の姿で出てきてくれればいいのに）

アカネがそうしないのは、やっぱりよほど怒っているからだろうか。

やがて坂道が終わり、樹木の落とす影が途切れた。陽射しの中に踏み出したとたん、その強烈な白い光に目が眩んで、太一は思わず目をつぶった。

うわん、と一際大きく蝉の声が耳に響く。——と、その中に別の音がまぎれこんだ。

りん。……ちりん、りりん。

（鈴の音？）

おそるおそる目を開けると、そこはアスファルトで舗装された広い道路だった。けれども、白い陽射しに視界を遮られて、あたりの様子がよくわからない。

ちりん。

鈴の音が近づいてくる。そちらに目を凝らすと、道路のむこうからやってくる十数人ばかり

の集団が見えた。
（人間？　……あ、でもあれって）
男も女も老人も子供もいる。全員が、黒い服を着ている。
喪服だ。
（葬式……？）
ちりん。先頭を歩く黒いスーツ姿の男が、手にした鈴を鳴らす。その後ろに、喪服を着た集団が黙々とつづいている。
太一は目をこすった。葬儀の列はもう間近まで来ているのに、陽射しのせいか人々の姿がひどく曖昧（あいまい）だ。皆一様に俯（うつむ）いているので、顔も見えない。
蟬の声が唐突に消えた。
「見ちゃ、ダメ」
その時、背中で声がした。
「え？」
「あれはダメ。捕まったら、ずうっと、もう死ぬまでずうっと一緒に歩かされるよ。逃げられないの」
「ええ？」
葬儀の列が太一の目の前にさしかかった。

「早く早く、両手の親指を握って。ぎゅって強く握って、そしたらどっか別のとこを見て。そしたらそしたら、気づかれないから！」

リュックの布越しに、アカネはもごもごとじれったげに叫んだ。

太一は言われたとおりに親指を手の中に握り込むと、とっさに自分の足の爪先を凝視した。

路面に自分の影が鮮やかに黒く落ちているのを見てから、気づいた。視界の隅を喪服の足が音もなく、ぞろぞろとよぎってゆく。その彼らの足下に、影がない。

「これ、葬式じゃないの？」

「お葬式だよ」

ひたすら爪先を見つめながら太一が囁くと、アカネも小さく声を返した。

「でもね、これからお葬式がはじまるの。あいつらが人間のところへ行ったら、人が死ぬの。一人だったり、いっぱいだったり」

「あいつらも妖怪？」

違う、とアカネは言った。

「行き逢い神。妖怪じゃなくて、もっとずっと悪いモノ」

なんとなくわかった。彼らは多分、人が魔や災厄と呼ぶものだ。

ちりん……。

やがて喪服の集団は遠のく鈴の音とともに、真っ白な光の中に幻のように消えていった。



待ちかまえていたように蟬がいっせいにまた鳴きはじめた。
太一は大きく息をつくと、握り込んでいた手を緩めた。無意識に力をいれていたのか、両手の親指が汗ばんで痺れている。
(変なものを見ちゃったな。……あんなのもいるのか)
初っ端でもう危険な目にあってしまった。アカネがいなかったら、本当にあの喪服の列に取り込まれてしまっていたかもしれない。
「ありがとう。教えてくれて」
ところがそれには、ムッとふくれっ面をしているような声が返った。
「知らないもん。アカネはもう太一とは遊ばないってきめたんだもん。太一がごめんって言っても知らないんだからね」
ともかく、人形の姿のままでもしゃべることができる、というのはわかった。それなのに黙っていたのは、やはり太一に腹を立てていたせいだということも。
「ああ、うん。……そう言ってたっけね」
他に答えようもなくて太一が言うと、
「むぅ」
妙な唸り声が聞こえて、それきりリュックは沈黙した。
(「むぅ」って何かな?)

首をかしげながら、太一はあらためてあたりを見回した。
（……ところで、どこへ行けば貉に会えるんだろう？）

昼時になるにつれて、気温が上がってきた。
「暑い」
陽射しを避けるために民家の軒下に身を寄せて、太一は手の甲で額の汗を拭った。
町の中をずっとうろついているのだが、貉の居場所はさっぱりわからない。それどころか、通りには他の妖怪たちの姿もほとんどなかった。たまに姿を見つけても、あっという間に駆け去るようにして、太一の視界から消えていってしまう。
（やっぱり妖怪って、昼間は寝てるのかな）
とすれば、最初に来た時にあれほど物売りが賑やかだったのは、あの不思議な夕暮れのせいだったのかもしれない。
（コンビニで弁当でも買ってから来ればよかった）
空腹だし、喉も渇いた。どこかで休みたいけれど、店らしき看板を出しているところはすべて閉まっている。
あたりは廃墟のように、しんと静かだ。
太一は壁にもたれた格好で、向かい側の『青果屋』の看板をぼんやりと眺めた。長い間風雨

にさらされたような看板は、ペンキがはがれて字が薄くなってしまっている。

（すぐに見つかるなんて、どうして思ったんだろう）

こちらの世界に来さえすれば何とかなると、簡単に思っていた。考えてみたら、居場所を知らない相手を、町名だけで行き当たりばったりに探すようなものだ。土台、無茶である。

（異世界なんだから、もうちょっとこう、人間の世界より便利でもいいのに）

太一はため息をつくと、足下に置いたリュックに目をやった。それからふと心配になって、虫籠の中を確認する。もしもこの暑さで蛍が弱って、途中で死んでしまったりしたら……。

「……もう死んでるんだっけ」

蛍は元気だった。

いつまでも休んでいるわけにはいかないので、太一はまたリュックを背負うと、虫籠を片手に提げて歩き出した。

通りの両側には木造の平屋が並んでいる。戸口や窓の格子まで木で造られていて、文化財指定された観光地みたいな光景だ。だけどこの道に踏み込む前は、ステンドグラスを嵌め込んだ洒落た一戸建ても見たし、コンクリートの二階建てのアパートも見た。通る場所によって、この町は幾通りにもその風景を変える。

共通しているのは、建物のどれもがどこか古めかしいということだった。コンクリートは褪せてくすんで、木材は飴色に磨き込まれて。驚いたことに、電信柱までが木の柱でできている。

(昭和な感じがするっていうか)

そんなことを思いながら目の前の角を曲がったとたん。

「ちょいと、そこのにーさん」

いきなり声をかけられて、太一はあたりを見回した。

誰(だれ)もいない。

「どこを見てるのさ。下だよ、下!」

言われて足下を見ると、地面に首がひとつ転がっていた。

テレビの時代劇に出てくるような髪型をした、女の人の首だ。筆ですっと描(か)いたような目が、太一を見上げている。

「悪いんだけどね、アタシを拾ってそこの家の中まで運んでおくれでないかい」

「拾うんですか?」

太一はためらった。

(そうすると、この首を持たなきゃいけないんだよな……)

どうも空栗荘に来てから、誰かと接触する機会が多いような気がする。他人の肌が触れるのは気持ちが悪くて、反射的に身体(からだ)が逃げようとする。

(でも、自分から触れるのは、そんなに嫌じゃなかった……かな)

昨夜(ゆうべ)ミヨシに肩をかした一件で、新発見したことだ。まったく抵抗がなかったわけではない

けれど、いきなり肩や腕を摑まれた時ほど嫌な気がしなかった。
「なにをボヤボヤしているんだい。まさかあんた、このアタシを助けるのが嫌だってんじゃないだろうねっ？」
けっこう若くて美人な首にけんけんと怒鳴られ、太一は仕方なく虫籠を下に置くと手を伸ばした。
「いたたた、髪をひっぱるんじゃないよ。……あ、ちょっと、それじゃ耳がちぎれちまうってばっ。……まったく、女の扱いも知らないんだねえ」
「すみません」
女の扱い方も知らないが、首の扱い方はもっと知らなかった。
「これでいいですか？」
「あいよ。丁寧に運んでおくれよ」
指で触れた女の頬はすべすべして冷たかった。思わずぞくっとしたが、それはいつもの嫌悪感からくるものではない。動悸が急に速くなるような「ぞくっ」だ。
手の中でふふっと女の首が笑い、太一は赤面した。
薄暗い家の中に入ると玄関で女の本体が出迎えた。縞柄の浴衣を着た首のない女性が、上がり口で手招きをしているというのは、なかなかすごい光景だ。
「ああ、やれやれ」

太一から首を受け取って、肩の上にすぽんとおさめると、女はニッと笑った。
「助かったよ。やっぱり昼日中に首を外に飛ばすもんじゃないね。お天道様が眩しくて、目を回しちまった。にーさんが通りかからなきゃ、あのまんま干乾びちまったかもしれないねえ」
「首だけ飛ばすなんてスゴイですね」
とりあえず思ったままのことを太一は口にした。
「やろうと思えば首を抜くこともあるけれど、まあ普段はこんな感じだね」
言った女の首がにょろっと伸びて、蛇の胴体のようにくねった。
（……ろくろっ首だったのか）
すぐまたもとの首の長さに戻ると、女はうなじにほつれた髪の毛をしどけなく指先でかきあげた。ふふ、と笑って、
「それにしてもねえ、にーさん。人間がなんでまたこんなところを、うろうろほっつき歩いているのさ？」
「貉を探しているんですけど」
「貉？　あいつに何か用かい？」
「はあ。借りたものを返しに」
そこで気づいたが、蛍を外に置きっぱなしにしたままだった。慌てて虫籠を取りに戻り、バタバタともう一度家の中に駆け込んで、太一は言葉をつづけた。

「それで、貉がどこにいるか知りませんか？」
そうだねえ、と女は首をかしげた。なんだかそのまま首が下に転げ落ちそうで、見ているほうが不安になる。
「このところ、とんと見かけないねえ。三丁目あたりにでも行って、誰かに貉の居場所を訊ねたがいいかもしれないよ。あのへんは目抜き通りもあるし、ここよりはちっとは賑やかだ。このあたりは昔気質のもんが多いから、何を訊こうにも昼日中はみんな家の中に閉じこもっちまってるもんでね」
「賽河原町三丁目？」
「今日のこの時刻なら、うちの勝手口から出るのが早い。真っ直ぐ行けば大きな通りがあって、その先が三丁目さ」
「わかりました。ありがとうございます」
頭を下げた太一を見て、ふぅん、とろくろっ首は思案するような顔をした。
「ねえ、にーさん。……前に会ったことはなかったかい？」
太一は相手を見返すと、いいえと答えた。本物のろくろっ首に会ったのは、もちろんこれが初めてだ。
「そうかい。じゃあ、アタシの思い違いかもしらん。よく似た顔を見たことがあるような気がしたもんでさ」

まだ腑に落ちない表情をしながらも、ろくろっ首はうなずいた。そうして上がり口の柱にもたれかかると、「勝手口はあっち」と腕を振った。

「じゃあね、にーさん。――柊のダンナによろしく伝えとくれ」

「大家さんを知っているんですか」

そりゃあね、とろくろっ首は笑った。

「この町に住んでいて、空栗荘の主を知らない妖怪はいないさ」

（大家さんて妖怪にも顔が広いのか……）

勝手口から外に出てまた歩き出しながら、太一は思った。そういえば貉やクロ爺も、時国柊二郎のことはよく知っている口振りだった。

今さらながら、奇妙な人だと思う。人間の町と妖怪の町の接点だという空栗荘、そこの家主というのは考えてみればものすごく怪しい人物だ。

（一番わからないのは、どうしてそういう人と父さんが友達なのかってことだけど）

いくら高校の同級生とはいえ、平凡を絵に描いたような彼の父親と、あだ名が「ぬらりひょん」だというあの大家の組み合わせが、今ひとつ太一にはぴんとこない。

そんなことを考えているうちに、大通りに出た。三丁目だ。

「えっと……？」

すぐ近くに交番があった。警官が一人、机にむかって座っている。こちらからは背中しか見えない。

通行人に訊くより早いだろうと思い、太一は交番に足をむけた。

「すみません」

声をかけたが、警官は振り返らない。

「人を……じゃなくて、妖怪ですけど、とにかく探しているんですが」

それでも振り返らない。

「あのう?」

太一が困っていると、ようやく警官は制服に包まれた背中を伸ばした。ゆっくりと椅子ごと振りむいた。

まるで卵のような顔だった。つるんとした白い面には、目も鼻も口もない。

のっぺらぼうである。

しばらく互いに見つめあった——相手に目がないので確かではないが——あとで、太一は訊ねた。

「貉の居場所を探しているんですけど、わかりませんか?」

のっぺらぼうは無言だった。しばらく待ってみたが、いつまで経っても返事はない。

ようやく太一は気づいた。

（あ、そうか。口がないからしゃべれないんだ）

話しかける相手を間違えたらしい。

でもそれだったら、お巡りさんなんて仕事にはむいていないんじゃないだろうか？　そう思いながら、太一は「失礼します」と頭を下げて、交番を出た。

あたりを見渡すと、ろくろっ首が言ったとおりで、昼間でもそこここにうろついている妖怪たちの姿があった。太陽の光が平気な連中なのだろう。

太一はため息をつく。こうなったら、片っ端から貉のことを聞いてまわるしかないかもしれない。正直なところ、人間だろうが妖怪だろうが見ず知らずの相手に声をかけるというのは、太一にとっては勇気のいることだった。

何度も何度もため息をつきながら、引き留める相手を物色していると、背中でまた「むう」と妙な唸り声がした。

「どうかした？」

首をねじって、太一は自分の背中をのぞき込む。

答えないかと思ったら、「うん」と小さくリュックが言った。

もごもごと拗ねたような声で。

「もう太一とは遊んであげないってきめたんだからね。アカネは太一のことなんかきらいなんだからね。……でもねでもね、太一はアカネがきらい？」

「え？」
「もし太一がどうしてもアカネと遊びたいのなら、仕方がないから遊んであげる」
太一は口ごもりながら「うん」と言った。また夜中に「遊ぼう」とたたき起こされてはたまらないなと思ったけれども、うなずいた。
「遊びたいよ」
「うんっ！」
嬉しげな声とともに、人形の量の分ふくらんでいた太一の背中のリュックが、ふわっとしぼんだ。
ぽんと泡が弾けたような音。太一の傍らに、いきなり空中から飛び出してきたみたいに、少女のアカネがあらわれた。クリーム色のワンピースに、真っ白なエプロン。家の中では見なかったきらきらした黒いエナメルの靴を履いている。
地面に降り立つと、太一を見上げて、アカネはぴょんと跳ねた。
「太一はアカネが好き？　すごく好き？」
「えっと……」
「すごくすごく好き？」
答えないとどんどん「すごく」が増えていきそうだったので、太一は急いで言った。
「う……、好き、かな……」

アカネはぷっと頬をふくらませた。
「それじゃダメ！　そんなんじゃわかんない！　太一はアカネのことが、すごくすごくすごく――」
「はい。好きです」
好き。それは、たとえば家族や友達や恋人に執着する言葉。太一にとってはそれこそ別世界の言語のように現実味のない言葉だったけど、とにかくそう言った。
アカネは満足したらしい。ぱっと笑顔になると、ワンピースの裾をひるがえし、クルリとその場で回った。
「あのね、アカネは知ってるよ。貉がどこにいるか、知ってる人を知ってるよ。教えてほしい？」
「え、誰？」
「クロ爺」
少女は白いレースのついたエプロンの胸を、得意そうにそらせた。
「初緒は、こっちの世界にはあまりアカネを連れてきてくれなかったの。でもね、いろんなことを教えてくれたの。こっちのことも、妖怪たちのことも、楽しいことも危ないことも、いっぱい。だからアカネは知ってるの。クロ爺は物知りで何でも知ってるから、貉のこともきっと知ってるよ」

確かに物知りの年寄りみたいなカラスだったな、と太一は思う。
「じゃあ、クロ爺はどこにいるんだ？」
「知らない」
思わず力が抜けた。
ついでに腹がぐーと大きな音をたてる。昼時はとっくに過ぎていた。お腹もすいているが、喉の渇きもそろそろ耐え難い。
（どこかにファミレスとかコンビニとかないのかな……）
人間の世界の貨幣は使えるはずだ。いつぞやのアマガエルが売っていた豆腐が、確か二十円という値段だったのを、覚えているから。
（あれ、でも豆腐が一丁二十円て、安くないか？）
べらぼうに安い気がする。鈴子が家に来るまで、料理も他の家事も自分でやることが多かったから、それくらいは太一にもわかる。
そんなことを考えながら歩き出したとたん、足がもつれた。
「わあ」
思い切り転んで、びったりと地面に貼りついてしまった。腹の下でアスファルトが熱い。慌てて起き上がろうとしたが、今度は急に身体が泥のように重く感じられて動けなかった。
（どうしたんだろう）

まるで、背中の上に何かが乗ってでもいるような……。
「こら、あっちへ行け！　どこかへ行っちゃえ！」
アカネの声が聞こえた。少女は黒いエナメルの靴で地団太を踏んで、何かを殴りつけるように小さな拳を振り回している。
ものすごく苦労して、太一は首をねじった。自分の背中の上にいる、それを見た。
見たけど、なんだかよくわからなかった。
半分透き通った、ぶよぶよのゼリーみたいなものが、彼の上にでんと鎮座している。
（なんで俺、こんなものに乗っかられているんだろう？）
「太一、大丈夫!?」
アカネが彼の顔をのぞき込む。ちょっと泣きそうな顔だった。
「重い以外は大丈夫だけど、これ何？」
「あのね。ヒダルガミ」
「妖怪？」
「うん。ヒダルガミはお腹のすいた人に取り憑くの。取り憑かれた人はもっとお腹がすいて、動けなくなって、ずうっとそのままになっちゃうの」
つまりこれも、危険な妖怪ということになるのだろう、一応。
「どうすればいいんだろう」

「えっとね、ええっとええっと、……忘れちゃった」

「……」

陽射しがじりじりとアスファルトを焦がす。このままだと日干しになりそうだ。

太一は首を持ち上げてあたりを見回したが、行き交う妖怪たちは我関せずといった風情で通り過ぎてゆく。それどころか、

「お取り込み中申し訳ありませんが、魚屋はどこにあるかご存知ありませんかな？」

よりによって道を訊いてきたヤツがいた。

（あ、こないだの……）

シルクハットにステッキ。人間の手足と魚の身体。この世界に来て一番最初に出会った、お魚紳士である。

「魚屋？」

「拙宅で祝い事があり、鯛の尾頭付きを所望しておるのですが、馴染みの魚屋がどこぞへ引っ越したとみえていっこうに店の所在がわかりません」

間近で見ると、やはり鮒のようだ。

（鮒が鯛を食べるのか？）

「すみません。俺、こっちの世界のことはよくわからなくて」

地面に貼りついたままで太一が答えると、

「おやこれは失礼をいたしました。なに、気になされますな。もうしばらく探してみるといたします」

水もないのに涼しい顔で紳士は言い、シルクハットを持ち上げて挨拶すると、ステッキを振り振り立ち去った。

その姿をぽかんと見送ってから、太一は思った。

(しまった。貉の居場所を訊くの忘れた)

と、その時——。

バサバサと上空で翼を打つ音がして、黒い影が太一の目の前にすとんと降り立った。

「やれやれ、おまえさんか。今時ヒダルガミに捕まるとは、どこのマヌケかと思ったが」

しわがれた声で言って、カラスは呆れたように頭を振った。

「クロ爺!?」

「ほら、これを食べろ。ゆっくりとよく噛んで飲み込むんじゃよ」

クロ爺は嘴を開くと、米粒を幾つか吐き出した。

「あ、そうだ。思い出した!」

見守っていたアカネが、叫んだ。

「あのね、ヒダルガミに取り憑かれたらね、お米を食べるといいの。そうしたらヒダルガミは、もういいやって思っていなくなるの!」

太一は目の前の米粒をまじまじと見つめた。
「これ今、口から出しましたよね」
おまけに道路に落ちてるし。生だし。
「嘴じゃ、アホウ。なにか？　おまえさん、このわしのすすめる米が食えないとでも？」
「……食べます」
太一は力を振り絞って米粒に手を伸ばすと、口に入れた。ぐるぐると口の中で回すように噛んで、飲み込む。
「あ？」
そのとたん、嘘のように身体が軽くなった。
「やったー！」
アカネの歓声。太一は上半身を起こして振り返る。ヒダルガミは彼の背中から離れて、ちょうどアカネの頭の高さくらいに浮いていた。やっぱり半分透き通っていてぶよぶよで、その姿はゼリーというよりまるでクラゲだ。そのまましばらくフラフラと漂っていたが、やがて小さく縮んで空気に溶けるように消えてしまった。
「なに、ヤツも悪気はないんじゃよ」
肩をすくめるようにして、クロ爺は言った。
「……悪気はなくても迷惑ですけど」

「妖怪とはそういうものじゃ」
そうだったのか。
立ち上がろうとしたら、クラリときた。一瞬目の前が暗くなって、太一はまた地面に座り込んだ。
「なんじゃ、どうした?」
クロ爺の声が遠く聞こえる。
「は……腹がへって……」
ついでに熱中症の可能性、大。

6

学校が終わって、ランドセルを背負って家に帰る。玄関のドアの前で立ち止まって、長い間立ち止まって、心臓のドキドキを落ち着かせる。
毎日、そのドアを開けるのが、胃がねじきれるくらい怖かった。
――今日はお母さんは家にいるだろうか。
鍵を使って家に入る。一歩中に入って、人のいる気配、いない気配を嗅ぎ分ける。母親がいる時には、その背中に「ただいま」を言った。

いない時にはそのまま自分の部屋へ行って、おやつを食べることもテレビを見ることもマンガを読むこともせずに、膝を抱えてずっと、母親が帰ってくるのを待っていた。夕方になって暗くなると、家中の電気を点けて回った。誰もいないキッチンを照らす明かりは、白々と冷たくて、真っ暗なのと同じくらい心細かった。

すっかり夜になった頃、母親が帰ってくる。普段着にサンダル履きで、バッグも持たず、まるでちょっとの間そのあたりを散歩でもしていたみたいな格好で。本当はどこに行っていたかなんて、知らない。帰ってくると母親は、遅い夕食をつくりはじめる。テーブルに料理を並べて食べはじめる母親は、押し黙ったままで、能面のように表情がない。目の前の彼を見ようともせず、いつもテーブルの一点だけを見つめていた。

ある日、学校からプリントを配られた。家族の人に読んでもらって、読んだしるしにハンコをもらって明日また持ってきなさいと、先生が言った。

（お母さん……？）

呼びかけても反応がないから、おそるおそる手を伸ばした。母親の腕に触ろうとして——。

すごい勢いで突き飛ばされた。

——触らないで。

母親は叫んだ。

——あんた誰？　あんたなんか知らない。

怖くない、怖くない、怖くない。こんなこと、なんでもない。プリントは自分でハンコを押して学校へ持って行った。

何度も、何度も怖くないと自分に言い聞かせた。怖いのは、笑ってほしいから、声をかけてほしいから、見てほしいから。そんなことを望まなければ何も怖くない。

毎日おまじないみたいに呟いていたら、そのうち本当に怖くなくなった。

ある日、母親を見ていてふと思った。多分、直感だったのだろう。

——この人は、きっといつかいなくなる。

彼が九歳の時に、母親はいなくなった。両親が離婚したからだ。

最後に見た母親は、それまでとはまるで別人だった。玄関で別れ際に、彼を抱き締めて、「ごめんね」と言って泣いた。

抱き締めるという嘘。

——ごめんね。許してね。

許すというのは、何を？

その時から彼は、他人に触れられることが気持ち悪くてたまらなくなった。

（……あれ？）

目を開けるとそこは薄暗い家の中で、太一は布団に寝かされていた。額に水で濡らしたタオルがおかれている。

（どこだ、ここ）

「あ、目をさました！　クロ爺、太一が目をさましたよ!!　――太一、大丈夫!?」

仰向けの視界に、アカネの顔がにゅっとあらわれた。

「あのね、太一は道路の上でぐったりしちゃったの。全然起きないから、クロ爺がお巡りさんを呼んできて、ここに運んだの。だってアカネとクロ爺じゃ太一のこと、重くて運べなかったんだよ。ここはクロ爺の知り合いの家なんだって。太一はお腹がへって、暑くて、目を回しちゃったんだって。でもねでもね、涼しいところにいてご飯を食べたら大丈夫だって、クロ爺が言ってるよ！」

アカネが勢い込んでしゃべるのを、太一はまだ少しぼうっとしながら聞いていた。

（そっか、ヒダルガミに乗っかられたあと……腹がへって……）

そのままぶっ倒れたのを、みんなしてここへ運んでくれたらしい。

「お巡りさんて……のっぺらぼうの……？」

アカネと並んでクロ爺が彼をのぞき込んだ。

「うむ。あれは無口だが仕事熱心な男でな。イヤな顔ひとつせずに、ここまでおまえさんを担いできてくれたぞ」

のっぺらぼうの「イヤな顔」って、どんなんだろう？　お礼を言おうにも、のっぺらぼうはすでに交番に戻ったとのことだった。

「すみません。俺、迷惑かけちゃって」

太一はのそのそと布団の上に起き上がった。その目の前に湯呑み、というよりどんぶりが差し出される。受け取ると、誰かがヤカンから冷たい水をなみなみとそこに注いでくれた。

急に舌が粘りつくほどの渇きを感じて、太一はどんぶりに口をつけた。

「この家の井戸水じゃよ。そのへんのヘタな飲み物よりもよほどうまいぞ」

クロ爺がそう言った時には、もうどんぶりは空になっていた。すぐに、誰かがおかわりを注いでくれる。

（……って、誰が？）

傍らに、信楽焼の狸が割烹着を着たような妖怪が座っていた。大きさは人間よりわずかに小柄な程度だ。

「ああ、その人は化け狸の奥方じゃ。おまえが寝込んでいる間、実にまめまめしく世話を焼いてくれたのでな、よく礼を言うておくがよい」

「どうも、ありがとうございます」

太一が二杯目の水を飲み干してお礼を言うと、狸はふくよかな毛深い顔でニッコリした。そうしてヤカンを置いて立ち上がると、ほてほてと台所へ姿を消した。何を思ったか、アカネが跳ねるようにしてそのあとをついて行く。

太一は家の中を見回した。こぢんまりとした古い民家だ。木目の天井からは裸電球がぶらさがっている。柱も壁も畳も、障子や襖の唐紙も古びて茶色い。蛍を入れた虫籠は、部屋のすみに寄せたちゃぶ台の上にちゃんと置いてあった。

太一の視線を追ってちらとそちらを見やってから、クロ爺は心得たように言った。

「心配せんでも、貉にはもう使いをやってある。じきに顔を見せるじゃろうから、飯でも食って待っていることだ」

「え、飯……」

台所からソースのいい匂いが漂ってくる。空腹に沁みた。ほどなくアカネが、大きな皿を持って部屋に飛び込んできた。

「焼きそばー、焼きそばー、青ノリー、太一のー」

歌うように節をつけて付喪の少女がうやうやしく差し出した皿の上には、焼そばが山のように盛られていた。今の太一には、この世のどんなご馳走よりもありがたいものだ。

「いただきます。——あ、アカネも食べるか？」

アカネはふるふると首を振った。

「ううん。アカネは食べないの」
「そっか。人形だもんな」
クロ爺がそれを聞いて、「ほう」と怪訝に呟いたが、すでに焼きそばを口いっぱいに頬張っていた太一は気づかなかった。
貉がやって来たのは、それから間もなくのことだった。

「――というわけで、蛍です」
蝶が蛍に変わった経緯を正直に話し、太一は「すみません」と謝った。
貉は今日も人間の姿に派手な柄の着物を着て、煙管を片手にニヤニヤしながら太一の話を聞いていた。時おり煙管をくゆらせる。火はついていないのに、なぜか白い煙が立ち昇った。
「なに、いいってことよ。蝶だろうが蛍だろうが、たいしてかわりはありゃしねえ」
聞き終えるとそう言って、貉はあぐらをかいた膝にぽんと煙管を打ちつけた。
「かえって手間をとらせちまったな。で、ミヨシ坊は何か言っていたかい」
「ミヨシさんが……何かというと」
「オイラがわざと成仏しかけの蝶を押しつけたとか、まァ、そういう類のことさ」
「あ、……はい」
貉はからからと笑った。笑いながら、煙を太一にふうっと吹きかける。太一は顔をしかめた

が、煙たくはなかった。煙草の煙というよりも、薄荷みたいな不思議ないい匂いがした。
「バレちまってたか。にしてもあの坊主は、文句が多くていけねぇや」
「坊主」というのはお坊さんのことだろうか、子供とか小僧とかの意味だろうか。駄々っ子のことを話すような貉の口振りからすると、どうも後者らしい。
「やっぱりそうだったんですか？」
「まあァな。けど、あんたが必ず返しに来るという保証はなかったから、オイラにとっちゃやっぱり賭けだったのさ」
「はあ」
たっぷりの井戸水と大盛りの焼きそばのおかげで、太一はすっかり元気を取り戻していた。今は布団を部屋のすみに寄せ、代わりに虫籠をのせたちゃぶ台を真ん中にひっぱってきて、皆してそれを囲むように座っている。途中で化け狸の奥方が、冷やした麦茶を人数分——といってもアカネは飲まないが——持ってきてくれた。
貉が虫籠をのぞき込んで目を細めるのを見て、太一はホッとした。ミヨシの言い分では蛍でもかまわないはずだが、やはり本人に確認するまでは不安だったのだ。
「それじゃ俺、これで帰ります。食事までご馳走になって、本当にありがとうございました」
化け狸に礼を言って立ち上がった太一を見て、貉は「なんだい、つれねぇなあ」と苦笑した。
「この次オイラを訪ねて来る時には、『川縁西』ってとこに来な。文字どおりの川っぺりだ、

夏の間は暑さを避けてそこに住むつもりだからよ。道を訊けば誰かしらが教えてくれらァ」
「はい」
でも多分、貉を訪れることはもうないんじゃないかと太一は思う。
約束はこれで、果たしたのだから。こちらの世界に来ることも、もうないかもしれない。
「アカネはどうする？　この中に入るか？」
空のリュックを肩にかけて太一が訊くと、アカネはぶんっと頭を振った。
「ううん。歩く！」
人形に戻る気はないらしい。
もう一度挨拶をして太一が部屋を出ようとした時、それまで黙り込んでいたクロ爺が、声をあげた。
「なあ、おまえさん。そのチビっこのことじゃが。――人形、と言ったな？」
ばさっと翼を広げてちゃぶ台の上に飛び乗ると、顎をしゃくるように嘴でアカネを示した。
自分のことだと知って、アカネはぷっとふくれる。
「アカネはちびっこじゃないもん！」
カラスはかまわなかった。黒いビーズのような目を太一にむけて、いかにも怪訝そうに、
「とするとおまえさん、もしや傀儡師かね？」
「……クグツシ？」

「人形使いさ。呪術師じゃよ。もともとは人形に舞いを舞わせて神に奉納していた者たちだが、やがて人形とともに各地を渡り歩いて人の穢れを祓うことを生業とするようになった。腕のいい傀儡師は人形を生きているように操るし、時には本当に人形に魂を吹き込むこともある。……そう、その子のようにな」

太一は首を振った。

「いえ俺、違います。クグツシとかじゃなくて、ただの高校生です」

「なァるほど、人形か」貉は煙管をくゆらせて、おもしろそうに言った。「人間じゃねえとは思っていたが」

「ふむ。傀儡師でないなら、どうしてその子がおまえさんに懐いているのか、不思議じゃのお」

言いながらクロ爺は、何事か思い出そうとするようにキョロキョロと目玉を動かして、また考え込んでいる。

「不思議じゃないもん！　アカネは初緒の友達なの。それでね、初緒が太一と遊んであげてって言ったから、太一とも友達なの。初緒はアカネに自分の魂をちょっぴりくれたんだよ。だから、初緒が太一のことを大好きだったから、アカネも太一のことが大好きなんだよ！」

アカネはまだふくれっ面だ。

しかし彼女のその言葉は、絶大な効果をもたらした。

「初緒？」

クロ爺と貉は顔を見合わせた。

「……初緒、初緒ハツオ。……おおそうか、思い出したぞ。山猫まわしの初緒じゃ。そのちびっこのことといい、さっきからどうも気にかかっておったが、まったくおまえさん、初緒によく似ておるんじゃよ」

ちゃぶ台の上でクロ爺が大きく首をうなずかせると、つづいて貉もぽんと手を打った。

「おうよ、オイラも覚えているぜ。人間の顔なんざすぐ忘れっちまうけど、ありゃあしこたま別嬪だったからな。最初にあんたと会った時に、どうも前に見た顔だと思ったんだ」

そんなことを言われても、と太一は困惑した。

「山猫まわし……って、何ですか？」

「傀儡師のことをお江戸じゃそう呼んだんじゃよ。初緒は腕のいい術者でな、頻繁にこちらの町に出入りしておったから、界隈じゃけっこう顔を知られておった」

「俺、その初緒って人に似ているんですか？」

そういえば、と太一は思う。

（ろくろっ首も同じことを言っていたな）

前に会ったことはないか、とあの妖怪は彼に訊いたのだ。——多分あれも、初緒のことだったのだろう。

（人形使いだったんだ。……だからアカネを）

彼に、遺していった。

（もしかしたら）

ありえないことだけど、でももしかしたらと太一は思う。彼はその人と会っているのだ。何度も。

「よく似ておるよ。うりふたつとまでは言わんがね。おまえさん、初緒の身内かね？」

「さあ……。えっと、俺、よく知らないんです」

口ごもる。ヘタな答え方をすると、アカネがまたへそを曲げそうだ。

「その人は、だいぶ前に亡くなったそうですから」

「亡くなった⁉」

妖怪たちはしんと黙り込んだ。やがて、

「とんと姿を見なくなったと思ったら、そういうことかい」

しんみりと爺が言い、「よくあることじゃよ」と呟くようにクロ爺が応じた。

ちょっとやるせない空気のまま、その場はお開きとなった。化け狸の奥方だけが、終始かわらないニコニコ顔で、太一とアカネを玄関まで送ってくれた。

いつの間にか夕暮れ刻になっていた。

紫と金色に縁どられた雲が、命のある大きな生き物のようにゆったりを空を流れてゆく。ほっこりと赤いゼリーのような空気に満たされた通りに、物売りたちの威勢のよい声が響きはじめた。軒下の吊り燈篭に早くも火を灯す家もある。

やっぱりこの世界の夕焼けは綺麗だなと、空を見上げて太一は思った。

「帰ろう、太一」

言ってアカネは太一の手をきゅっと握った。思わず振り払いかけて、深呼吸して、太一は気づいた。白くて小さな、冷たい手。体温がない。人間そっくりの、人形の手。

「こっちだよ。早く帰ろ」

太一の困惑などおかまいなしに、アカネはぐいぐいと彼をひっぱった。道を曲がるたびに風景の変わる町の中を、迷うことなく軽やかな足取りで、太一としっかり手をつないだまま走った。

「わあ、ちょっと待って待って。走りすぎ」

さすがに息がきれて立ち止まると、アカネはくすくす笑って、下からのぞき込むように太一を見た。おかっぱの髪は少しも乱れていない。

「もう疲れちゃったの？　アカネは全然疲れてないよ」

「うん。ちょっと休憩。……だけどよく迷わないで帰り道がわかるな。こっちにはあまり来たことがないんだろ？」

「わかるよ。風が吹いてるもの」
「風？」
うん、といきなり真面目くさってアカネはうなずく。
「空栗荘の方角からね、風が吹いてくるの。そよそよって。人間の世界の風。人間の世界の匂いがするの」
「――」
太一には風も匂いも感じられなかった。太一が人間だからだろうか。人間ではないものたちだけが、そんなふうにこの世界と人間の世界とのつながりを感じているのだろうか。
「あのね、太一が目を回している間にね、アカネはクロ爺と少しお話ししたよ」
手をつないだまま、今度は並んでゆっくり歩きながら、アカネは言った。
「ろくろっ首とのっぺらぼうの話をしたら、クロ爺はカアカア笑って、太一のことをおもしろいヤツって言ってたよ」
「へえ」
初めて他人から「面白い」と言われた。
（でも、カラスだし）
あまりのマニアックさに、ちょっと悩む。
「でも行き逢い神の話は、クロ爺は笑わなかったの。すごく難しい顔をしてね、それは駄目

だって言ったの。どうしてってアカネが訊いたら、クロ爺は言うの。太一は危ないって。きっと忘れちゃってることがあるから、早く思い出さないといけないって」

「忘れてること？」

「――怖いってこと」

太一の足が止まった。一緒に立ち止まって、アカネはしゃべりつづける。

「あのね。普通の人間だったら、もし行き逢い神が見えたら逃げるんだよ。アカネが何も言わなくても、見ないようにして行き逢い神がいないところまで自分で逃げるの。行き逢い神はフキツだから。普通の人はそんなこと知らないけど、でも知らなくてもみんな知ってるの。誰にも教わらないのに知ってるんだよ。太一は逃げなかったよね。行き逢い神、怖くなかった？」

どうだっただろう。太一は思い返す。行き逢い神とすれ違った時、嫌な気分になった。異質だとも感じた。でも。

多分、怖いとは思わなかった。

「それでね、クロ爺が言うのはね、人間は自分を守るために怖いって思うんだって。本能って言うんだって。このままじゃ危ないとか何かが襲ってくるかもって思うと、カンカンて鐘が鳴るみたいに人間は怖いって思うんだよ。カンカン、それ逃げろって。でもね、太一は怖いの忘れちゃってるから、うんと危ない目にあっても逃げないかもってクロ爺が言うの。そしたら太一は自分を守れなくて、サイアク死んじゃうこともあるかもって言うの」

アカネは太一を見上げて、つないだ手にきゅっと力をこめた。
「太一もいなくなるの？　初緒みたいにいなくなる？」
「……ううん」
「ほんとに？　太一は忘れちゃってるだけだよね。忘れちゃってるけど、怖いの思い出すから大丈夫なんだよね？」
うん、と呟くように太一は答えた。
それでようやく安心したように、アカネは笑った。そうしてまた太一の手をぐいぐいとひっぱって歩き出した。
刻々と紫の色を濃くしてゆく夕暮れの中。今日見た夢を、太一は思い出していた。空腹と暑さでひっくり返っている間に見た、子供の頃の夢。
あの時のあの母親が、なぜあんなに怖かったのだろう。命が危なかったわけでも、暴力をふるわれたわけでもなかったのに。
怖いという感情が自分を守るためにあるというなら。
――あの時俺は、一体何から自分を守ろうとしていたのだろう。
「初緒さんて人……俺のこと、本当に好きだった？」
緩やかな坂道。トンネルのような樹木の間を抜けて行けば、もう空栗荘だ。

相変わらず手をつないだままで「けんけんぱっ」と跳ねていたアカネが、びっくりしたように太一を見た。

「うんっ」

「そっか。……あのさ。俺も思い出したことがあるんだけど。昔、誰かが俺のことを好きだって言ってくれたんだ。大好きだって。あれ、初緒さんだったんだと思う」

アカネはぱっと顔を輝かせた。

「ねえねえそれじゃアカネは？　アカネのことは思い出した？」

「え、ええっと、アカネはいつ俺と会ったの？」

「太一がね、アカネが人形の時と同じくらいの大きさの時！」

「人形のアカネ？　体長約四十センチ？　それってあの、もしかして赤ん坊？」

「あのね太一ね、猿みたいでふにゃふにゃだった」

多分、生まれてすぐだったと思われる。

「ごめん。会ってても絶対に思い出さないと思う」

「え、どうしてっ？」

「人間の記憶力の限界を超えているから」

「ひどいっ!!」

アカネは太一の手を放すと、ぷうと頬を膨らませた。太一を睨んで、くるりと身をひるがえ

す。そのまま、あっという間に一人で坂道を駆け上がって行ってしまった。
やがて。坂の上からアカネの吼える声がした。
「太一のばかあぁ――――っ！」
風が吹いた。周囲の樹々がさわさわと枝を鳴らした。
異世界の夕暮れの風。もしくは人間の世界とのつながりの風。
太一にはどちらかわからない。
樹木の梢のむこうに、空栗荘の明かりがもう見えていた。

三章　夏の祭り

1

明け方に、たくさんの人間の気配がした。
ざわざわ。ざわざわ。幾つもの足音や、ぼそぼそと何かしゃべっている声も聞こえる。それから、からからと戸を開け閉てする音。
（うるさいな。……誰だろう……？）
布団の中で夢うつつに思ってから、太一はすぐに納得した。
（そうか、お客さんだ。……ここ、旅館だから）
気配は階下から聞こえてくる。玄関のほうから。
きっと団体客が到着したんだろう。それきり気にもかけずに太一はそのまま、また眠りに落ちた。
朝になって目がさめた時、空栗荘はいつもと同じように静まり返っていた。

朝食に降りていくと、食堂の入り口から念仏を唱えるみたいな奇妙な唸り声が聞こえてきた。
「釜開き～、地獄の釜の蓋が～ひ～ら～い～た～～」
何事だろうと首をかしげながら中に入ると、唸っていたのは大家こと時国柊次郎だった。空になった食器を脇によけて、力がぬけたみたいにぐんにゃりと両腕と頭をテーブルの上に投げ出して、恨めし気にわけのわからないことを繰り返している。
見かけるのは久しぶりだな、と太一はカウンターで食事を受け取りながら思った。引っ越しの日に言葉を交わしてから、実に一週間ぶりだ。空栗荘における大家の出現率、というか目撃率はどこぞの珍獣なみに低い。
（そういえば大家さんて、いつもはどこで食事をしているんだろ？）
他の空栗荘の面々はというと、柊二郎から離れたテーブルの端にひとかたまりになって、もそもそと無言で朝飯を食べていた。両者の間にある長いテーブルの距離が、ぽかんと不自然な感じがする。
「おはよう、太一君」
古都子に声をかけられ、「どうも」と挨拶を返してから、迷った末に太一は柊二郎と住人一同の中間に腰を下ろした。
今朝のメニューは卵焼きと、キュウリの入った冷汁と糠漬けだ。
「おいしいですね、この冷汁」

その場のそこはかとなく重い空気をやわらげようとしてか、レンが口を開いた。
「そ、そうね。ご飯に直接かけてもおいしいのよ。冷汁なんて手間のかかるもの、朝から食べられるなんて豪勢だわ」
「そない手間がかかるもんか？」
「魚をいちいち焼いてほぐしてすり鉢ですって、お味噌と合わせてまた焼いて、御汁にしてあるの」
「ここは食事が美味いことだけが救いだな」
十遠見が不機嫌そうに言ったところで、大家の声が一際大きく響いた。
「じ～ご～く～の～ォ、釜～びら～き～ィ」
微妙に節までついている。
一同がまたしんと黙り込んだ。
「さ、そろそろ行かなきゃ。うちの工房はお盆休みがないから」
古都子がそそくさと席を立った。
「僕も、もう行きます」
「なんやレン、花屋は休みと違うんか」
「店は休みでも、花や植木の世話は毎日しないといけないんです」
残ったのは柊二郎と太一、ミヨシと十遠見。気遣いとは程遠い面子で、空気がいっそう重く

なる。

「あのお、地獄の釜の蓋って何ですか？」

大家と住人、どちらにともなく太一は訊ねた。

とたんに、ミヨシと十遠見の箸が止まる。ミヨシがため息をついて、人差し指でちょいちょいと太一を招いた。

太一が座ったまま寄っていくと、

「場の空気が読めへんのか、おまえは。なんやおかしいと思わんか」

「ええ、はい。大家さんがヘンかも」

「『かも』やのうてほんまにヘンなんや。毎年この時期になるとああなる」

ミヨシはげっそりしたように顔をしかめた。

「昨日が十三日で盆の入りやったからな」

「盆の入り？」

「なんぼなんでも盆くらい知っとるやろ」

もちろん知っているが、太一の家では毎年これといって盆の行事らしきものもやらないので、あまりピンとこなかった。長い夏休みの間の数日、テレビのニュースが帰省ラッシュを告げ、父親の仕事が休みになり、あちこち店が閉まって不便なおもいをする。そのくらいの認識だ。

「地獄の釜の蓋が開くと死者がこの世に戻ってくる。せやから先祖の霊を迎える盂蘭盆会のこ

とを、『地獄の釜開き』やら『地獄の釜の口あけ』て言うんや」
なるほど、と太一はうなずいた。つまり柊二郎はさっきから「お盆だ」と言っているわけか。
「それで、お盆だと大家さんはなんであんなふうになっちゃうんですか？」
「しょうもない理由でな。ま、自分の目で確かめたらええ。今日明日にはわかる」
「はあ」
太一が首をかしげた時。
ばきっ。
いきなり派手な音が響いた。
お露さんが厨房から出てきて、あいも変わらず「地獄の釜の蓋が～」とやっていた大家の頭を、アルミのトレイでぶん殴ったのだ。
「あたたた……、何をするんですかー!?」
「いい加減にしな、鬱陶しい！　毎年毎年同じことを言ってるんじゃないよっ、往生際が悪いったら！」
一喝すると、トレイを抱えてお露さんはさっさとまた厨房に戻っていった。
「そんな殺生な、……おや、皆さんいらしたんですか」
涙目で殴られた頭をさすりながら、柊二郎は初めて気がついたように太一たちを見た。
「なーにが、いたんですかや」

食べ終わった食器を持って、ミヨシは席を立った。
「アホくさ。どうせ夜まで暇やし、俺は部屋に戻って寝る」
「え、今から？」
朝食を食べたばかりなのに、と太一が呆れると、ミヨシは肩越しにふんと鼻を鳴らした。
「今日は祭りやからな」
意味不明だ。
「……祭り？」
「地獄の釜の蓋が開けば、この世の者ではないモノたちが自由になって這い出してくる」
さっさと食堂を出て行ったミヨシにつづいて、十遠見も立ち上がる。銀縁の奥の目を細め、太一にむかって口の端だけでシニカルに笑って見せた。
「生者と死者の境界がなくなり、彼岸と此岸が交じり合う。君も気をつけることだな。この時期に戻ってくるのが、善いモノばかりとはかぎらない。――おかげでこちらが振り回される。迷惑なことだ」
「はあ」
こちらも意味はさっぱりだが、どうもグチのようだ。
「あとで君にお守りをあげよう。盆中限定の厄除け祈願だ。ご利益は保証するよ」
「盆中って……そんなお守りあるんですか？」

「私がつくった。本来なら八百円で売るところだが、今回は特別に五百円にしておく」
「いえ、けっこうです」

「今日は賽河原町のお祭りなんです。盆の祭り。毎年、盛況ですよ。夕方からなんですけど、盆踊りがあって、夜店も出て賑やかです」
すっかり正気に戻った柊二郎は、お茶を飲みながらにこやかに言った。
「そうですか」
ミヨシと十遠見もいなくなり、一人取り残された太一は食事を終えてもなんとなく席を立つタイミングを逸して、大家との会話につきあわされる羽目になった。
盆にも祭りにも興味はないけど、仕方なく相づちを打ってうなずく。
「だからミヨシさんが、夕方まで暇って言ってたのかな」
「ええ。今晩は皆さん出かけるようですからね。この町の祭りは特別なんです。なんと一晩中、明日の朝までやっているんですよ。だから皆さん、徹夜覚悟」
「すごいですね」
「まあ、せっかくご先祖様が帰ってくるんだから、一晩くらいは歓迎してつきあってあげないとねえ。太一君はお祭り、行きますか？」
「いえ……。俺、べつに考えてなかったし」

でも。

――おいでよ絶対。楽しいよ。

和泉朱奈が祭りのことを言っていたのを、思い出した。

「……見に行くくらいはするかも」

うんうんとうなずいて、柊二郎はまたお茶をすすった。

それからまるで脈絡なく、

「ここの暮らしには慣れましたか？」

「はい。だいぶ」

食事の時間。風呂の時間。他人と共存してゆくための、日常の細々としたルール。空栗荘で暮らしはじめて一週間が過ぎて、そういうものにも太一は少しずつ馴染みはじめていた。最初は少し煩わしいと思ったけれども、ルールさえ守っていればここの住人たちは――アカネに何度か「遊ぼう」とせがまれた以外は――よけいな干渉は一切してこなかった。大きな音をたてないように注意しているから、タカハシさんからもまだ文句は言われていない。

家にいる時よりも、ずっと楽に呼吸ができる気がした。

「賽河原町はどうですか？　もちろん表側のってことですけど。町内観光してみました？」

「ええまあ、一応」

「じゃあ、道はわかりますね。学校の場所とか。郵便局とか喫茶店とか宝くじ売り場とか、

スーパーとか置き屋とか本屋とか交番とか」
「置き屋って何ですか？」
「いや、いいです。知ってたら問題です。ていうか、冗談です」
男が金を払って女性と遊ぶ場所でーまあ昔の話ですけどー、などとむにゃむにゃ言いながら、柊二郎はずずっと茶をすすった。
「とりあえず、一人でも迷子になる心配はなさそうですね。――というわけで、ひとつ頼まれてもらえませんか」
「何をですか？」
「実は今夜のお祭りのことなんです。人手が足りないんです。僕は今、非常に困っています」
のほほんと、別にちっとも困ってなさそうな顔で柊二郎は言った。
「どうせお祭りに行くのなら、ついでに手伝ってもらえると嬉しいんですけどねえ。徹夜してもらうことになるけど、その分バイト料ははずみますから。去年はミヨシ君にお願いしたんですけど、今年は彼、事情があって手が空かないものですから。どうです、今晩一晩だけ、アルバイトしませんか？」
「俺、バイトの経験なんてないですけど」
「では何ごとも人生経験です。額に汗しておのれの力で金を稼ぎ、人生の苦難と労働の喜びを噛みしめる。バイトこそは人間的成長の萌芽を促す絶好のチャンスです」

人間的成長の萌芽を目的にバイトをする人間は、全然いないとは言わないが、多分少数派だ。
太一は首をかしげた。
「苦難な仕事なんですか？」
「いえ全然。心配しなくても、ものすごーく簡単な仕事です。――お祭りを見物しながらのついでに、あちこち歩いて見回りをしてほしいんですよ。地域の安全のために」
「……見回りって普通は警察がやるものじゃないんですか」
「人間相手ならね」
手にしていた湯呑みをテーブルに戻して、柊二郎はすまして応じた。
太一はちょっと黙り込む。
「つまり、人間じゃない相手の見回り？」
「つまりそうです。十遠見さんがさっき言っていたでしょう。この時期に戻ってくるのが善いモノばかりとはかぎらないと」
遅まきながら、太一は呆気にとられていた。
「でも俺、ミヨシさんや十遠見さんみたいな特別な人たちと違って、お化けや妖怪が出てきても何もできないし」
太一君、と大家は言った。穏やかだが、それまでとは少しだけ口調を変えて。
「ミヨシ君も十遠見さんも、『特別』なんかじゃないですよ。彼らは普通の人間です。そんな

言葉で彼らとの間に線を引かないでください」

「す……みません」

やんわりと窘める口調で、悪いことを言ったのだとわかった。何がとか、どうしてなのかとか、そんなことはわからなかったけど、「特別」というのが時にひどく重い言葉だということはわかった。

「しいて言うなら、彼らは性格が特別なだけです」

「……」

では話を戻しましょう、と柊二郎はニコリとした。

「何も君にバケモノと戦うような危険な真似をしろと言っているわけじゃありません。封じの御札を渡しますから、空気が澱んで悪いモノがいそうなところにそれを貼って回るだけでいいんです。もちろんそういう場所を知らせる探知器もお貸しします。ね、ね、簡単でしょ？」

聞いているぶんには確かに簡単そうだが、人生経験として何の役に立つのかはものすごく疑問なバイトである。

その時、傍らからいきなりのびてきた手が、太一のシャツをつんつんとひっぱった。

「太一太一、どっか行くの？　どこ行くの？」

「え、アカネ⁉」

いつの間にあらわれたのか、付喪の少女は畳の上にワンピースの裾をふんわりと広げて、太

一の隣に座っていた。たった今までそこは何もない空間だったのだから、驚いた。
「ねえ太一ってば、どこに行くのっ？　アカネも行きたいよ」
アカネは目をきらきらさせて、太一の服の袖を摑んだまま顔をのぞき込んでくる。
太一はため息をつくと、
「今日は賽河原町の祭りだってさ」
とたんにアカネはぴょんと跳ねるように立ち上がった。
「お祭りお祭り！　アカネも行く！　太一と一緒に行くもん絶対に行くもん!!」
「おやぁ、アカネちゃん。おひさです」
と、微妙にずれたタイミングで柊二郎が彼女に声をかけた。片手で「おいでおいで」と自分のそばに招き寄せる。
アカネがちょこちょこと近づいていくと、柊二郎は笑顔で彼女の頭に手をおいて、艶やかなおかっぱの髪をくしゃっと撫でた。
「お祭りに行きたいんですか？　でも人がたくさんいるから、迷子になっちゃうかもしれませんよー？」
「アカネは迷子になんかならないよ。太一と一緒だもん」
「あはは。アカネちゃんは太一君のことが本当に好きなんですね」
「うん、大好き。初緒が太一のこと大好きだったから、アカネも太一のこと大好きなんだよ」

「そうですか。初緒さんが」
柊二郎は相変わらずにこにこと笑ったまま、
「でもダメですよ。アカネちゃんはお祭りに行っちゃいけません。今日はお留守番です」
アカネは目を丸くして、それからぶぅと頬をふくらませた。
「やだやだっ！　行くもん。柊二郎の意地悪！　アカネはお祭りに行くの行くの、絶対に行くんだもん！　太一と一緒に行――あっ!?」
一瞬のことだった。
柊二郎は右手の中指と人差し指を立てると、アカネの額に軽く触れた。
それだけの仕草で、駄々をこねていた付喪の少女の身体がぴくんと強張った。え、と太一は目を瞠る。次の瞬間、アカネの身体は振り袖姿の市松人形に戻って、畳の上にころりと転がっていた。
柊二郎はそれを抱き上げると、厨房にむかって「お露さーん！」と叫んだ。
「そんな大声を出さなくても、ちゃんと聞こえてるよ。アタシゃべつに、耳が遠いわけじゃないんだから」
「どーも失礼しました。すみませんけど、この子をよろしくお願いします。今日はお外に出さないようにしてください」
「わかっているよ。『つくも喰い』が出たら大変だ」

割烹着の裾で手を拭いて人形を受け取ると、お露さんは食堂を出て行った。
（どうして大家さんが触れただけで、人形に戻ったんだろう？）
当然疑問に思ってから、まあそういうこともあるのかもと太一は納得した。
（空栗荘だし）
「あの、アカネを連れて行っちゃ駄目なんですか？」
「おんや、連れて行きたいんですか？」
「う……」
お祭りの間ずっとアカネにまとわりつかれている図を想像すると、あまりありがたくない。でもあんなに行きたがっているのをおいていくのも、ちょっと可哀想な気がしたのだ。
「というわけでアルバイトの件、よろしくお願いしますね。徹夜作業ですからね、昼間のうちに寝ておいたほうがいいですよ」
「え、でも」
まだ引き受けるとは言っていない。そりゃどうしても嫌ってわけじゃないけども……と迷っている太一にむかって、柊二郎はぱんっと手を合わせて拝むポーズをした。
「困ってるんですぅ、手が足りないんですぅ、地域の安全のために君の力が必要なんですぅう、これも人助けだと思って……！」
最後は泣き落としだった。

「で結局、引き受けることにしたのかい」

玄関ではお露さんがガラクタの中からガラスケースを取り出し、人形のアカネを丁寧にしまっているところだった。ようやく大家から解放されて部屋に戻ろうとしていた太一を、ちろんと横目で見て、そう訊いてきた。

「はあ結局」

「ふん。まあいいけどね。素人を危険な場に行かせるほど、あの男も馬鹿じゃないだろうから」

言いながら、お露さんはガラスケースの扉に何やら難しい文字を書き込んだ御札をぺたりと貼り付ける。これで外には出てこられないはずさ、と呟いた。

「アカネには気の毒だけど、今日のところはおとなしくしていてもらわないと」

「あの、さっき言っていた『つくも喰い』って何ですか？」

名前からして物騒だ。柊二郎やお露さんの言動をみると、今日の祭りのために外に出るのはアカネにとってはよくないことらしい。

「『つくも喰い』は、器物に宿る魂ばかりを好んで食べる、一種の魔物みたいなものだよ。そんなヤツにアカネが襲われたら大事だ。めったにいるもんじゃないけれど、今夜は何が起こっても不思議じゃあない。用心にこしたことはないからね」

「何が起こってもって……」
「盆の祭りだから」
お露さんは肩をすくめた。
「盆というのは、人の世があの世にもっとも近づく時期なんだ。生きている者も死んだ者も、人も人でないモノもごちゃまぜだ。――人の想いというのは、本人が生きていようが死んでいようがやっかいなものでね、こういう時には怨みだの未練だのといった悪い念が寄り集まって、ひょんなことからタチの悪いモノに変わっちまうことがある。それこそ祭りみたいな、普段と違うテンションで大勢の人間が集まる場所では、そういうモノがあらわれやすいんだよ」
「……あのう、大家さんは簡単だって言ってたけど、もしかしてこれってやっぱり危険なバイトなんじゃ」
「なに、大家はあんたができることだけを頼んでいるはずさ。本当にやっかいなヤツの相手なんかさせやしないよ」
だけど見回りの途中でたまたまうっかり「やっかいな」のに出会ったらどうするんだろう、と太一は思った。
「じゃあ俺、部屋に戻ります」
「昼には素麺を出すけど、食べるかい？」
空栗荘の賄いは基本的に朝夕の二回。しかし休日などで昼食が必要な時には、その日の朝ま

でにお露さんに申し出れば用意してもらえる。
「はい。食べます」
階段をのぼりかけて、ふと思い出したことがあった。
太一は玄関を振り返る。広い三和土にも靴箱にも、いつもと同じ数の靴しか入っていない。
（あれ、そういえば今朝……）
彼の怪訝な表情に気づいて、食堂に戻ろうとしていたお露さんが、「なんだい？」と声をかけてきた。
「いえ。――今朝っていうか、明け方にお客さんが来ましたよね」
「客？」
「団体客。ざわざわって、人がたくさんいるなって思ったんです」
「ああ、そりゃ客じゃないよ」
素っ気なくお露さんは言った。
「あの世から戻ってきた、どこぞのご先祖様の団体さ。毎年のことだけど、ここが近道だからってお手軽にうちの玄関を通り抜けて行くんだ。帰りも通って行くけど、知らん顔して放っときな」
「……」
お盆というのはけっこう大変な行事なんだなと、太一は思った。

2

「これが探知器です」

夜七時。早めに夕食を終えて玄関を出た太一に、柊二郎が意気揚々と差し出したのは、なんと提灯だった。

あたりはすでに暗い。腕の長さほどの竿の先にぶら下がった丸い提灯からは、柔らかな乳白色の光がゆらゆらと滲み出ていた。

「なんとこの提灯は、悪いモノがそばにいると中に灯した炎が赤く変わるんです。これなら一目瞭然、どんな獲物も素早くキャッチ。優れもののアヤカシ探知器です。で、提灯の火が赤くなったら、この御札をぺんっと。壁だろうが樹だろうが電柱だろうがポストだろうが、そばにあるものに貼ってください。それで君のお仕事は完了。——はい、これを持って。そうそう、そんなふうに。もし火が消えちゃったら、このバッグの中に百円ライターが入ってますから、自分で火をつけてくださいね」

笑顔とともに提灯と、それに御札やライターの入ったショルダーバッグを押しつけられ、太一は戸惑った。

「……こんなの持って歩いてたら、すごく目立つんじゃないかと思うんですけど」

今時、提灯。むしろ化け物よりも人間に怪しまれそうだ。

「大丈夫ですよ。提灯を持って歩いている人は他にもいますから。――この町では昔から、提灯を盆の魔除けにするならわしがあったんです。ま、当たらずとも遠からずってことですね。今でもお年寄りなんかは、祭りに提灯を持って歩く人がけっこういます」

「はあ。そうですか」

「それから、注意事項です。まず、誰かに呼ばれたらすぐに返事をしないこと。必ず相手を確かめてからにしてください。次に、どうもヘンだと思ったら自分から『もしもし』と声をかけてみてください。『もし』とか『もうし』とか返事をしてきたら、それは人間じゃありません」

「もうし？」

「そういう答を返してくるのは、たいがい妖怪ですけどね。連中はなぜか、繰り返しの言葉が苦手なんですよ。まあ妖怪なら、今夜のところはたいした悪さはしかけてこないと思いますが」

それから、とつづけて柊二郎は提灯を指さした。

「時々、足下を照らしてみてください。自分の影の数が増えていたら、何かがくっついてきちゃったってことですから。そういう時は『影踏み』の要領で影を踏めば、相手は離れます。『影踏み』というのは、もともとは厄払いの作法だったのが子供の遊びに転じたものなんです。あとは……まあ、御札があればどうにかなるでしょ」

いってらっしゃーい、と柊二郎に手を振って見送られ、太一は仕方なく提灯をぶらさげて出発した。

空栗荘の門を出たところで、

（そういえば……）

ふと気づいて、ジーパンのポケットからお守りを引っぱりだす。

十遠見のお手製のお守りだ。なぜだか太一のバイトのことを知って部屋に押しかけてきた彼に、最終値三百円で結局買わされてしまった。

手縫いの紫色の布袋に、マジックで『盂蘭盆会』と書いた白いフェルトが縫い付けてある。

（……なんか、すごくご利益なさそう）

ため息をついてお守りをショルダーバックに入れると、太一はとりあえず、バス停のある大通りを目指して歩き出した。

祭りの夜の空気は浮き立つようにざわめいていた。遠くから盆踊りの音頭が聞こえてくる。特別に交通規制でもしているのか、大通りには車は走っていなかった。歩行者天国状態で、たくさんの人たちがそぞろ歩いていた。

笑い声。しゃべる声。からころと、下駄の音。色とりどりの浴衣、揺れる帯。家族連れ、老夫婦、カップル。綿菓子やアンズ飴を持った小さな子供たちが、両親や祖父母に手を引かれて

歩いている。水風船。焼きトウモロコシ。コンビニの前で、携帯電話を片手にはしゃいだように会話をしている若者のグループ。着慣れない浴衣に苦労して歩きながら、くすくすと笑いつづけている少女たち。

柊二郎が言ったように、提灯を持って歩いている者も幾人か見かけた。おもに老人たちだが、たまに親に連れられた子供が神妙な顔で提灯の竿を握っていることもあった。

それから——。

（あれ？）

お面をつけている人とすれ違った。お多福の面ですっぽり覆われて、顔が見えなかった。

歩きながら気をつけて見ていると、面をかぶった人は他にもいた。アニメのキャラクターを象ったプラスチック製のお面だったり、猿やタヌキや犬のような動物の面だったり、ヒョットコや天狗だったり。

（そりゃ、夜店でお面を売ってるけど。……あれを真面目にかぶる人って、他じゃあんまり見ないと思う）

「よう、空栗荘の兄さん！」

その時、いきなり後ろから威勢よく声をかけられた。その男の声につづいて、次にはねっとりと絡みつくような女の声が、

「おや、珍しいねえ。今どき本物の提灯を持っているなんて。昨今は紛い物ばかりだからねえ。

それは柊のダンナのかい？」

振り向くと、浴衣姿の男女の二人連れが彼を見てニヤニヤしていた。男のほうはすっきりとした棒縞の浴衣、今日は虫籠も煙管も持っていない。女の藍地の浴衣には、紫と黄色の大輪の花が艶やかに踊っている。

格好も髪型も現代風で、そうしていると二人とも妖怪には見えなかった。

「どうしてこんなところにいるんですか？」

太一はちょっと呆れて言った。

「そりゃァ、祭りだからにきまってらァ」

貉がからからと声をあげて笑うと、ろくろっ首も紅を塗った唇をきゅっとあげた。

「この時期はあちこち道がつながるからさ、アタシらもたまにはこちら側に足をのばして遊んでるんだよ」

「首を落とさないでくださいね」

「イヤだね、あたりまえだよ」

太一はつくづくと二人を見た。提灯の火の色は変わらない。もちろん、彼らが柊二郎が言うところの「悪いモノ」ではないからだろう。

「二人は仲がいいんですか？」

おやま、とろくろっ首は片側の肩だけをすくめて見せた。

「ご挨拶だね。誰がこんなヤツといい仲なもんかい。……でもまあ、こないだにーさんに助けてもらったあとでね、ちょいとヤボ用でこいつと会うことがあったのさ。ついでに祭り見物でもしようかって話になって」

傍らで貉が「言ってらァ、オカチメンコが」などとぼやいている。

「うるさいね、このトンチキ。なんだったら、このにーさんに乗りかえて祭り見物としゃれこもうかねえ」

ふうっと白粉の匂いが接近してきたので、太一は慌てて後ろにさがった。

「すみません。俺、見回りの途中ですから。もう行きます。それじゃ」

いったん歩き出してから、思い出したことがあって、太一は二人を振り返った。

「あのちょっと……二人とも、『もしもし』って言ってみてくれませんか」

妙な申し出に妖怪は首をかしげてから、そろって、

「もうし」

「もうし」

(あ、本当に言えないんだ)

「なんだい？」

「……いえ、何でもないです。すみません、失礼します」

おうまたな、と声を返してから、貉がふと神妙な顔になった。

「見回りをするなら気をつけな。今年はちょいと図に乗ったヤツがいるみてぇだ。そんなのと関わりあっちゃァ、ロクなめにはあわねぇぞ」

祭りの音頭はすぐ近くに聞こえることもあれば、流れるように遠くへ去ることもあった。

（盆踊りって、会場どこだろ？）

そういえば聞いておくのを忘れたな、踊れないからいいけど、などと思いながら、太一は大通りをそれて脇道に入った。

人々の喧騒がふと途切れる。

幾つも角を曲がって、住宅街のごちゃごちゃとした細い路を行き当たりばったりに歩いていると、ふいに持っていた提灯の火が揺らいだ。

「あ……？」

炎はいったん、すうっと細く暗くなり、すぐに血のような真紅に変わった。

視界が薄赤く染まる。

太一は周囲を見回した。道は人気なく静まっている。動くものはないし、ぞっとするような気配がするわけでもない。

でも、何かがいるのだ。——何か、そこにいてはいけないモノが。

急いでショルダーバックから御札を取り出すと、裏の粘着テープをはがして、太一はそれを

そばの電柱にぺたりと貼った。

一瞬、息をつめる。

ふわっと、提灯の光がもとの柔らかな乳白色に戻った。

（消えた……のかな？）

そういうことだろう。御札の効果テキメンだ。

（これならラクかも）

とりあえず、こういうアルバイトだと実感で理解した。適当に歩き回って、今みたいに提灯が赤くなったら御札を貼る。それを明日の朝までつづければいいわけだ。ノルマもないし、確かに素人の太一でもできる簡単な仕事である。

（このあたりは適当に見て回って、もう一度大通りに戻ろう）

しかしその路を抜けて別の路地に入り、さらに角を幾つか折れて……太一は方角を見失った。路地は思ったよりも入り組んでおり、さすがに普段の散歩でもこんなところまで来たことはなかった。

「えっと……？」

どこまで来てしまったのか、方角を確かめるために耳をすませても、祭りのざわめきも聞こえない。仕方なくそのまま歩き出そうとして、太一は小さな神社がそこにあることに気づいた。民家の隙間にはさまれたような神社だ。鳥居のむこうに祠が見える。境内——というほど

広くないが——のほとんどが、鬱蒼と枝葉を伸ばした樹木に覆われていた。
そのまま鳥居の前を行き過ぎようとして、太一は声をあげた。
「あれ……？」
「やあ」
境内にいた人影が、提灯の光に気づいて、こちらを振り返った。
レンだ。
境内には一本だけ注連縄の巡らされた樹があって、どれほど樹齢を重ねているのか、首をそらせて見上げるほどに大きい。巨木といって差し支えないその樹の前に、レンは明かりも持たずに一人で立っていた。
「こんなところで何をしてるの？」
先に訊ねたのはレンのほうだ。
「あの、ちょっと……迷子になって」
太一が鳥居をくぐって近づいていくと、レンは提灯を見て、いつもと同じ笑顔を見せた。
「ああ、今年は君が大家さんに見回りを頼まれたんだってね」
「はい。……なんか、なりゆきっていうか、そんなカンジで」
「そっか。異常はない？」
「ありました。さっき一度」

境内の樹々がさわさわと、呟くように枝葉をそよがせている。街灯の光がかろうじて届く部分をのぞけば、祠のまわりのそこここに、不透明な闇が溜まっている。

「ここは大丈夫だよ。何もいないから。この樹があるから、ヘンなモノは寄ってこないんだ」

「この樹？」

太一は注連縄を巡らせた巨木を、ふたたび見上げた。上のほうにある梢は、夜の暗さに溶けてよく見えない。そうやってそばに立っていると、まるで大きな生き物に逆に上から見下ろされているような気がしてくる。

「ここの神社は、この樹を祀るためにつくられたんだ。年をとった大きな樹には魂が宿るって知ってた？」

「……いえ、知りませんでした」

「大木とか大きな岩とか、昔の人はそこに魂が宿って神様になるって信じていたんだよ。――この樹もその神様のひとつ。今じゃこの町に生えている樹木たちの長老で、賽河原町のことならなんでも知ってる」

「あのう」

太一は思い切って訊ねた。相手は空栗荘の住人なのだから、どんな荒唐無稽な話でも驚くものかと思う。

「レンさんは樹と話せるんですか？」

「うん」
しごくあっさりと答が返る。
「やっぱり」
レンは微笑(ほほえ)んだままで、軽く首をすくめた。
「頭がおかしいヤツとか思わないの？」
「いえ」
太一はきっぱりと首を振った。あちらの世界に人語をしゃべるカラスがいるのだから、こちらの世界に植物と話す人間がいても不思議じゃない。そう思うことにした。
「花屋さんには役に立つ特技ですよね。……あと、植木屋さんも」
太一の大真面目な言葉にレンはちょっと目を瞠(みは)り、すぐにくすくすと声をあげて笑った。笑いながら、「うん、そうだね」と言った。
「道に迷ったのなら、鳥居を出て右へ行って、二つ目の角を左に曲がってそのまま歩けば大通りに出るよ」
右、二つ目の角を左、そのまま真っ直(す)ぐ、と太一は小声で繰り返す。ずいぶん歩き回った気がしたけれども、大通りからそれほど離れてはいなかったらしい。
「ありがとうございます。――レンさんはお祭りに行かないんですか？」
「人の多いところは苦手なんだ。それに、僕はここでミヨシさんたちの手伝いをしなきゃいけ

ないから」
「手伝い？」
「ミヨシさんも十遠見さんも、今回は忙しくてね。今年に入ってから、賽河原町ではよくないことがいろいろ起こって、……この話はもう聞いている？」
「いえ、聞いてません」
「原因のわからない火事だとか、事故も多かった。並んで建っている三軒の家でたてつづけに人が死んだり。それで十遠見さんが調べたら、どうも町に不浄のモノが入り込んでいるらしいってわかったんだ」
「フジョウ？」
「うん。穢れって言えばいいのかな。とにかく悪いもの。そういうものが長く居座ると、人間の心にも身体にも影響を及ぼすし、土地自体がどんどん衰えて、悪循環でまた悪いことが起こったりする。だから早めに封じるか浄化するかしてしまわないといけない」
「それを十遠見さんとミヨシさんが？　こないだ、死霊をやっつけたみたいに？」
「まあ、そんなところ。今日みたいな盆の祭りの時には、いつもとは違ういろんな力が働いて、いいモノも悪いモノもカタチを持ってあらわれやすいんだ。不浄の要因になっているモノもきっとあらわれる。ミヨシさんたちは、それを探して封じようとしているんだよ。それで僕は、ここに待機して連絡係」

連絡係の意味はよくわからなかったが、その時太一は貉の言葉を思い出していた。
――今年はちょいと図に乗ったヤツがいるみてぇだ。
もしかして、妖怪が言っていたのは、その「不浄」とかいうモノのことだろうか？
（で、ミヨシさんが忙しくて、俺にバイトのお鉢が回ってきたってわけだ）
だけど、と思う。
どうして空栗荘の住人たちが、そんなことをしているんだろう？
（……っていうか、そもそも俺のこのバイトって何？）
レンと別れたあとも、見回りをつづけながら、太一はしばらくそのことを考えていた。

それから一時間の間に、提灯の炎が三回、赤く変わった。
（けっこういるんだな）
最初のとあわせると四枚目になる札を手近な塀に貼りつけてから、例によって行き当たりばったりに次の角を曲がって、とたんに太一は目を丸くした。
目の前に、きらきらしく電燈を灯した夜店がずらりとつづいている。
たこ焼き、串焼き、アメリカンドッグ、といった文字が見えた。風船釣りに金魚すくい、綿菓子、リンゴ飴、しんこ細工に型ヌキ屋。どれも祭りには定番の屋台だ。
（でも……どうしてこんな場所に？）

奇妙なのは、そこが住宅街の奥まった場所にある何の変哲もない道だということだった。実際、そこを通る客の姿は一人もない。店に吊るされた電燈だけが青白く眩く、それなのに道の先のほうは真っ暗でよく見えない。

（もっと人のいる賑やかなところに店を出せばいいのに）

ふいに、誰かが声をかけてきた。

「おい、そこのあんた！」

「え、はい？」

思わず返事をしてから見回したが、そばに声の主の姿はなかった。

（あれ？）

「こっちだ、こっちだ」

今度は夜店の並ぶ道のほうから声がした。ずっとむこうで手を振っている者がいる。けれどもどれだけ目をこらしても、ぼんやりとした人のかたちの影が見えるだけ。のっぺりとした黒い影は、男か女かもわからない。

さすがにヘンだと思った。

（あ、しまった。そういえば）

――誰かに呼ばれたらすぐに返事をしないこと。

柊二郎が言っていたことを思い出した。なのに、相手を確認もせずにうっかり答えてしまっ

たのだ。
「おい、おおい」
「早く早く」
「おいでよぅ、おいでよぅ」
いつの間にか彼を呼ぶ影の数が増えている。道の奥から、何本もの腕が手招きしていた。すうっと提灯の炎が揺らぎ、赤くなった。……しかしできればもうちょっと早く、探知してもらいたかった。
引き返そうにも、足が思うように動かない。腕が痺れたようになって、御札をバッグから取り出すこともできない。呼んでいる影に引き寄せられるように、太一は前に踏み出した。
その時になって気がついた。両側に並ぶ夜店は、どれもこれも無人だった。客どころか、売り手の姿もない。人影のない屋台にただ、電燈だけが青白くきらきらと……。
「おいでよぅ。こちらにおいでよぅ」
足がまた一歩、前に出る。
（あっちに行ったらどうなるんだろう？）
頭の中まで痺れたようになって、ぼんやりとそんなことを考えた時。
ついっと、太一の鼻先を、細い光がすべるようによぎった。
「――蜻蛉!?」

光に見えたのは、羽を銀色に輝かせた一匹の蜻蛉だ。
同時に、背後から鋭い声がとんだ。
「行くな。戻れ」
驚いて太一は振り返る。今度は身体が動いた。弾かれたように後ろを見ると、
(狐……)
そこに白い狐の面をつけた女が立っていた。浴衣は草色、白く染め抜かれた蜻蛉の柄。
「札を貼れ」
女にしては野太く強い声で、狐の面は命じた。
言われるまま、太一は慌ててショルダーバッグを下ろして、中から御札を取り出す。叩きつけるようにしてそれを、そばの電柱に貼りつけた。
「うわ」
とたんに目の前の風景が一変した。
夜店の電燈がいっせいに消え、視界に刹那、闇が下りる。足下に置いた提灯が何事もなかったように乳白色の光を灯し、そうして——。
太一は、しんと静まり返った夜道に佇んでいた。
道の両側は民家のブロック塀。そもそも車一台が通れるほどの道幅で、両側に夜店が並ぶスペースなどあるわけがなかった。

束の間呆気にとられてから、太一はハッとしてもう一度振り返る。
狐の面の女はすでにいなかった。
あとを追ってもと来た道に飛び出すと、ずっと先のほう、草色の浴衣が闇に半分溶けるようにして遠ざかっていくのが見えた。
走って行って呼び止めようか、どうしようか。さっさと行ってしまったのだから、追いかけてはいけないだろうか。でも。
（助けてもらったお礼をまだ言っていない）
意を決して、太一は駆け出した。——いや、駆け出そうとしたのだが、その瞬間に誰かに背中をばしんっと叩かれて、思わずたたらを踏んだ。
「阿川君！」
「ううっ⁉」
全身がぞわっとした。いきなり後ろから触れられるのが、太一は一番苦手だ。悲鳴をあげかけて、思わず口を押さえた。どうして今日はやたらに後ろから声をかけられるんだろう、とついでにどうでもいいことを思う。
「ど、どうしたのっ？」
脇からひょいと顔をのぞかせたのは、和泉栄奈である。
いつもながら、唐突な出現だ。自分で自分の口をふさいだまま、肩を上下させている太一を

見て、目を丸くしている。
「もしかして呼吸困難？　病気？　何かの発作!?」
「な、なんでもない」
道の先に目をやると、草色の浴衣はすっかり闇に溶けて消えていた。
太一はため息をつきながら、ようやく手を下におろす。
「和泉はなんでこんなところにいるんだよ？」
「うん。阿川君をつけてきたの」
采奈はぱっと笑顔を見せて言った。彼女も今日は浴衣姿だ。水色の朝顔の柄がよく似合って、なかなか可愛い。けど。
（……どうしていつも後をつけてくるんだろう？）
「さっきまで盆踊りの会場にいたんだけど、すっごい人が多くて疲れちゃったから適当にそのへんを散歩してたの。そしたら大通りで阿川君を見かけて、声をかけようとしたら他の道に入っていっちゃうから、どこへ行くのかなって思って。でもね、下駄の音ってけっこう響くんだもん、こっそりついてくるのに苦労しちゃった。こう足に力をいれて下駄を引きずらないようにそっと歩くわけ。そしたら音は響かないけど、足がつりそうになっちゃったよ」
言いながら采奈はちょっと顔をしかめて、下駄をつっかけた足で厳かに音をたてないように一歩二歩と歩いて見せた。

「へ、へえ」
しかし、後をついてきたということは――。
「もしかして、見た？」
「何を？」
采奈はきょとんとする。
「ええと、あの、……提灯が、赤くなる、とか」
「提灯？」
いっそう目を丸くしてから、采奈は吹き出した。
「やだなあ、そんなの迷信だってば。――私も子供の頃、お祭りのたびにおばあちゃんに提灯を持たされてたの。提灯の火が赤くなったら、怖いものがそばにきている証拠だから、すぐに走ってそこから逃げるんだよって。おばあちゃんはそう言ってたけど、でも考えてみたら、そんなわけないって」
「……うん」
ちょっとほっとしたような、腑に落ちない気分で太一はうなずいた。
たまたま見ていなかったのだろうか。それとも……彼女には、提灯が赤く変わってもそれが見えていなかったとか？
「でもすごいね、阿川君。もしかしたらお祭りには来ないかなって思ってたのに、提灯まで

持ってるなんて、すごい、本格的！」
「これは、下宿の人に借りて」
「ふうん、すごい」
感心したように采奈は「すごい」を連発してから、首をかしげた。
「それで阿川君は、今、どこにいたの？」
「え？」
「この角を入って行くのが見えたから後ろをつけて行ったら、阿川君、急にいなくなるんだもん。ビックリしたあ」
采奈が指差したのは、さっき夜店が並んでいた道である。
（……見えなくなった？）
そんなはずない、と言いかけて、太一は小さく息をつめた。おいでよう、という声が耳によみがえる。
もしあのまま、声に呼ばれるまま道の奥まで行っていたら、戻って来ることができずに本当にどこかへ消えてしまっていたかもしれない……。
「それで、あれえヘンだなって思って引き返してきたら、阿川君がいるじゃない。途中ですれ違わなかったのに、どうして阿川君がこっちにいるのって、もう二度ビックリ！」
采奈は大袈裟（おおげさ）なジェスチャーで「驚き」のポーズをして見せた。

「和泉の見間違いだよ」
太一は素っ気なく言った。
「え、そんなことないよ！」
「じゃあ俺、透明人間になったんだ。――そう言ったら、どっちを信じる？」
なぜだかすごい難問のように、采奈は眉を寄せて考え込んだあと、
「透明人間！　そのほうがおもしろいから」
ヘンなヤツ、と太一は思った。
「それじゃ、俺もう行くから」
「あ、待って！　あのねっ、あの！」
ショルダーを肩にかけなおして歩き出そうとしたら、腕をぎゅっと摑まれた。さっきほどぞわっとはしなかった。
「か、川のほうへ行ってみませんかっ？」
「川？」
「ほら、この前阿川君がホタルモドキを獲ってた川。ダメ？　それとも忙しい？　どこか行くとこだった？」
「そんなこと、ないけど……。でもどうしてあの川？」
「今くらいの時間は、ちょうど悪霊流しをやってるはずだから。阿川君はこの町の祭りは初め

てでしょ。せっかくだからそれも見ておいたほうがいいかなっなんて。ホント、それだけっ」
「悪霊流し？」
「うん、そう。行こ！」
采奈は摑んだままだった太一の腕を、引っぱった。こういうとこ、なんだかちょっとアカネに似ているなと太一は思う。
（まあ、いいか）
断る理由もなかったので、太一は彼女と一緒に歩き出した。

3

墨のような川面を、豆粒のみたいなオレンジ色の炎が幾つも、幾つも、揺らめきながら流れていた。あるものはゆっくりと、あるものは吹き飛びそうに速く、時にはくるくる回ったりもしながら、小さな炎の群れは上流から途切れることなくつづいて、下流へと消えていく。
「きれいだねえ」
フェンスを摑んで身を乗り出すようにその光景を眺めながら、采奈はほうと息をついた。
「あれってね、木で小さな舟をつくって、そこにロウをとかして入れて、蠟燭にして、お団子を一個のせて上流から流してるの」

「お団子？」
「悪い小鬼がお団子をとろうとして一緒に下流へ流れて行ってしまうように、だって」
「小鬼？　悪霊流しなのに？」
「えっとね、悪霊が小鬼になるんじゃなかったっけ」
「なんかいい加減だな」
「そだね」
くすくすと、采奈は笑った。
川辺は暗いが、見物客はけっこういるようだ。太一たちのように、フェンス沿いに「悪霊流し」を眺めている人影がちらほら見えた。
「あの火、途中で消えたりしないのかな」
「もちろん消えちゃうのもあるよ。それに――あ、ほら！」
ちょうど太一たちの目の前で、川面がぱしゃんと跳ねた。采奈が指をさす。流れてきた炎のひとつが、ふっと川面の闇に呑まれた。
「今みたいに、水をかぶったり何かにぶつかったりして沈んじゃうのも、けっこうあるみたい。今のは魚が跳ねたんだよ、きっと」
（魚、かな？）
一瞬、小さな蠟燭の火に照らされて、川面から伸びた黒い手が団子ごと舟を摑んで水の中に

ひきずりこんだように見えたのだ。
悪霊って海に流しちゃっていいの？　下流の人が迷惑しない？」
ゴミになったら環境問題だ。
「うん、大丈夫。もう少し先のほうにネットを張って、町内会の人たちが全部回収してお盆が終わったら燃やすから」
「ふうん」
その時、采奈があっと小さな声をあげた。
「どうかした？」
「あ、うん。……あのね、川のむこう側。人が立ってるでしょ」
どうしてだか、顔を伏せてものすごく困ったように采奈は言う。
「気づかないふりして、こっそり見てね。ね、いるでしょ。鬼の面をかぶった人」
「鬼？」
言われたとおり素知らぬ顔でそちらに目をやると、川をはさんだ向こう側、太一たちがいる場所のほぼ正面の位置に、人影がひとつあった。フェンス越しに、川面ではなくこちらをじっと見ているようだ。
確かに、面をかぶっていた。——牙と角を生やして、金色の眼をぎょろりとむいた赤鬼の面だ。

「男の人みたいだけど」
うん、とやはり下をむいたままで、采奈はうなずく。
「さっき、盆踊りの会場にいた時もあの人、いたの。こっちを見てた。それで会場を出て大通りをぶらついている時も、気がついたらあの人、物陰からこっちを見て立ってたの」
「和泉のあとをついてきているとか？」
「……多分」
太一はちょっと呆れた。
「その状況で、なんで俺のあとをつけてきたりするんだよ。あんな人気のないところまで……」
そんなふうに女の子のあとをずっと追いかけてくる男なんて、化け物よりもタチが悪い。
「だって、阿川君と一緒にいれば大丈夫かなって思ったんだもん」
「あ、もしかしてそれで、俺に一緒に川に来ようって言ったわけ？」
一人でいるのが怖かったからかと思ったら、
「え⁉」
采奈はぱっと顔をあげると、急に焦ったように首をぶんっと振った。
「それ違う！　本当に阿川君に悪霊流しを見せてあげたかったの、賽河原町の夏の風物詩なのこれっ！　私、毎年これを見てすごく綺麗だと思うから、阿川君にも見せたいって思って、本当にそれだけっ。だからあの人のことも、今まで忘れてたの――っ！」

なにも拳を握って言わなくても。
「わ、忘れてた？」
「うん。うっかり」
「そ、そう」
とにかく、なんとかしなければならない。あの男が変質者だったりしたら、本気でヤバい。
「あいつ顔を隠してるけど、心当たりとかある？」
ううん、と栄奈は今度は小さく首を振った。
「家に帰ったほうがいいんじゃないか」
「ダメだよ。家まで追いかけてこられたら、住んでるところまでバレちゃうもん」
「あ、そうか。じゃ、警察に行ったほうが」
「……うん」
栄奈は心細げに肩を落としている。
「交番に行こう。俺もついて行くから」
他にどうしたらいいのかわからない。太一はもう一度、川のむこうの赤鬼の面を一瞥すると、栄奈を促してフェンスから離れた。

ひた、ひた、ひた。

後ろのほうから足音が聞こえる。あの男がついてきている。太一は思わず背中を緊張させた。采奈にも聞こえているのだろう。傍らを歩く彼女は、いつもならうるさいくらいおしゃべりなのに、今は少しうつむいてしんと黙ったままだ。

交番は確か大通りの交差点の角にあったはずだ。とにかくまず大通りを目指して、なるべく人のいそうな道を選んで歩いた。

盆踊りの音頭が次第に近づいてくる。流れているのは炭坑節だ。談笑する通行人たちと時おりすれ違う。――それなのに、ひたひたという足音は奇妙なくらいはっきりと、耳に響いた。

何度も振り返りそうになったが、太一は我慢した。かわりに、足下をゆらゆらと丸く照らす提灯の明かりに目を凝らした。

大通りまで行けばもう安心だ。通行人が大勢いて賑やかなら、あの男がもし何かする気だったとしても手出しはできないだろう。采奈が交番に行くのを見れば、それ以上はついてくるのを諦めるかもしれない。

民家の建ち並ぶ道を抜けると、視界が開けた。大通りだ。

「……え!?」

太一は立ち竦んだ。

（なんだ、これ？）

――大通りには、誰もいなかった。

動くものの姿が何ひとつない。まるで人が死に絶えたようにがらんと、静まり返っている。
一歩通りに踏み込んだとたんに、たった今まで聞こえていた盆踊りの喧騒も、いきなりスイッチを切ったみたいに途切れた。
街灯は道沿いに白々と灯っているのに、あたりは妙に薄暗い。
「どうしてぇ？」
采奈が泣きそうな声をあげた。
「なんで人がいないの？　いつもだったら、この時間だったらまだいっぱい歩いているはずだよ。さっきまでみんないたもん。……嘘、どうして誰もいないのぉ？」
ジジ、ジジ、ジ……。
ふいに彼らのすぐそばに立っていた街灯が、明滅を始めた。
（ヤバい）
この通りにいてはいけない。なんだかわからないけど、ここはすごくヤバいと太一は思った。
「引き返そう、和泉」
「う、うん」
しかし、後戻りしようと振り向いたとたん、采奈は悲鳴をあげた。
ほんの数メートル先に、赤鬼の面をつけた男が立っていた。
ひた。

赤鬼は太一たちにむかって、身を乗り出すように足を踏み出す。つられるように二人は後じさって、結局、通りの真ん中あたりまで押し出されたような格好になった。
「行こう」
「でも」
「次の角を曲がって、別の道から逃げよう」
二人で、静まり返った大通りを早足で歩き出す。
ややあって、栄奈がまた泣きそうな声で言った。
「ねえ、ヘンだよね。……他の道がないよ」
「うん」
次の角がどうしても見つからない。まるで一本道のように、通りの両脇には店や建物がどこまでも途切れることなくつづいていた。
——大通りから出られない。
「ねえ、阿川君。これって夢かな」
「違うと思う」
「そんなきっぱり否定しないでよ。よくあるじゃない、誰かに追いかけられて逃げるんだけど出口がどうしても見つからないっていう夢」
「それって確か、ストレスが溜まってる時に見る夢だって、前にテレビでやってた。和泉、ス

トレス溜まってる？」
「よ、よくわかんない」
ひた。ひた。ひた。
……ひたた、たた、た、た、た。
ふいに、背後からの足音が小刻みになった。
こらえきれず、思わず太一は振り返る。こちらにむかって駆け出した赤鬼の姿が見えた。
「和泉、走れ！」
「うん！」
栄奈は弾かれたようにダッシュした。
そして、転んだ。
浴衣を着ていることを忘れていたらしい。つっかけていた下駄が、カラコロと両方とも派手にすっ飛んだ。
「いったぁい……！」
「和泉！」
駆け寄ろうとした時、太一の持っていた提灯の炎がゆらりと動いた。次の瞬間、炎はすうっと赤くなる。鮮やかに、血のように。
（えっ？）

ジジジ、ジジ、ジジ……！

周囲の街灯がいっせいに点滅を始めた。

太一は呆然と立ち尽くした。視界に目まぐるしく入れ替わる光と闇。赤鬼が間近にせまっている。栄奈に摑みかかろうとするように、手をのばしていた。ジジ、ジジ。光。闇。光。すべての動きがコマ送りの映像みたいだ。立ち上がりかけた栄奈が何かを叫んで、頭を抱えてその場にうずくまった。彼女を助けに走るべきか、先に御札を貼るべきか。太一は混乱する。それでもとっさに、ショルダーバッグに手をつっこんで、ありったけの札を握りしめた。路上に落ちた提灯が、真っ赤な火の粉を散らして消える。ジジ、ジジ、ジジ……。

おそらくそれは、ほんの一瞬の間の出来事で。

そうして、太一は見た。

路上にうずくまる栄奈と、その彼女の身体にかぶさるようにしゃがみ込んだ赤鬼。そのむこうに――。

血まみれの男が、包丁を握って立っていた。

男の顔は見えない。首から上がもぎ取られたようになかったからだ。

生きた人間でないことだけは、確かだった。

白。黒。白。ジジ、ジジ、ジジジ……。

明滅する視界の中で、首なし男は右に左にふらふらと身体を揺らしながら、采奈と赤鬼に近づいていった。現実感のないその動きをぼうっと見つめていて、太一はハッと我に返る。首なし男は逆手に持った包丁を振り上げ、無造作に振り下ろした。ミシッだかベキッだか、嫌な音が響いた。

その瞬間、太一は御札の束を摑んだ手をバッグから引き抜いて、首なし男にむかって飛び出していた。無我夢中だった。どうして飛び出したのかもわからなかった。御札を持つ手を振りまわしながら突進して、夢中で相手に体当たりをくらわせた。

ぐんにゃりとした感触が彼を受け止めた。腐った肉のような臭い(にお)が鼻を刺す。吐き気がする。きっとこれは、死体の感触だ。

「消えろ、消えろ消えろ――――!!」

心臓がものすごい音をたてている。目の前で、包丁の刃がぎらりと光った。太一はぎゅっと目をつぶって、それでも腕をメチャクチャに振り回しつづけた。

ふいに。すかっと身体がつんのめって、太一はアスファルトの路上にひっくり返った。

「……え?」

パッと街灯がふたたび白く灯った。ジジジという耳障りな音が消えて、唐突な静寂が訪れる。喘(あえ)ぐように息をしながら、太一は街灯の光に照らされた大通りを見回した。それから、くしゃくしゃになって地面に散らばっている御札を見た。

首なし男の姿はどこにもなかった。
（消えた……？）
とたんに、全身の力が抜ける。
太一の抵抗におそれをなして逃げ出したとは思えないから、とりあえず御札の効き目なのだろう。
（これ本当に、簡単なバイト……かな？）
そのまま路上に寝転がりそうになるのをガマンして、太一は立ち上がった。
「和泉、大丈夫？」
まだ終わっていなかった。赤鬼がいる。それにさっき、首なし男が振り下ろした包丁。——まさか。
その時、采奈の声が聞こえた。
ためらうような、呟くような声で。
「お、とう……さん……？」

赤鬼の面をかぶっていた男が、采奈から離れて立ち上がった。
その足下に、顔から外れた面が二つに割れて落ちていた。首なし男の包丁は、采奈をかばった赤鬼の、その面を砕いたのだ。

栄奈は地面にへたり込んだ格好で、呆然と男を見上げている。
もう一度、言った。
「お父さん？」
男はくるりと彼女に背中をむけると、歩き出した。
太一は目を瞠る。ゆっくりと遠ざかってゆく男の姿が、やがて透き通っていくのを見つめた。
男の背中が風景を透かし、足下から輪郭が滲むように消えていって、そして――。
「待って！」
栄奈が叫んだ。
男は振り返らなかった。ちょうど頭上にさしかかっていた街灯の白い明かりに溶け込むみたいに、最後に残っていた輪郭がふわっと消えた。
それきり、がらんと人気のない大通りに、太一と栄奈だけが取り残された。
太一は栄奈の傍らに立って、彼女をそっと見た。まだ呆然と目を見開いたまま、栄奈はかたまっている。地面に落ちていたはずの赤鬼の面も、いつの間にかなくなっていた。
「今の、和泉のお父さん？」
問いかけると、しばらく間をおいてから、答とは違う言葉が返った。
「あの人、本当にここにいた？」
「うん」

「それで、歩いて行って消えちゃった？」
「うん」
「あれって幽霊だと思う？」
「……うん」
そっか、と采奈は呟いた。まるで呪縛がとけたみたいに、よいしょっと声をあげて立ち上がる。あたりをきょろきょろ見回してから、散らばった下駄を拾って、足につっかけた。
「そっか。……お父さん、もう死んじゃってたんだ」
笑っているみたいな声だった。泣きそうなんだな、と太一は思った。いつもは他人のことなんか何もわからないのに、どうして今、そんなことがわかってしまうのだろう。
唐突に、祭りの喧騒が二人を包み込んだ。
団扇を片手に笑いさざめきながら、人々がそばを通り過ぎてゆく。たった今起こったことが嘘のように、気がつけば大通りは相変わらず祭り一色の通行人たちであふれていた。盆踊りの会場から聞こえてくるのは東京音頭だ。
太一は地面に落ちた御札と提灯を拾って、采奈に声をかけた。
「行こう」
うん、と采奈は声なくうなずいた。

「うちね、お父さんがジョウハツしちゃったの。私が小学校に入ったばかりの頃。だから今は、おばあちゃんとお母さんと弟と私の、四人家族なんだ」

通りを少し歩いて、バス停のベンチに二人で座った。栄奈はしばらく、転んで浴衣が汚れちゃったとかなんとか言いながらしきりに袖や裾を手ではたいていたが、やがて何でもないことのようにそう言った。

「どうしてお父さんがいなくなっちゃったかなんて、知らない。でも私、お父さんのことを絶対に許すもんかって思ってた。だって無責任だよね。家族を捨てちゃうんだもの。家にいた頃だって仕事ばっかりで全然帰ってこなくて、どこかに連れて行ってもらったり遊んでもらった記憶なんてないの。だからお父さんがいなくて寂しいなんて思わなかった。家族を捨てるような人なんていらない、こっちから捨ててやるって、ずっと思ってた」

「んん」

どう反応していいかわからず、でも何か言わないとまずい気もしたので、太一は少々マヌケな相づちを打った。

「お父さんが戻ってきても絶対に家に入れないでよって、お母さんやおばあちゃんにも言ってたの。でも私がそう言うたびに二人とも、なんだかちょっと困った顔をしていた。どうしてそんな顔をするんだろう、きっとお母さんもおばあちゃんもお父さんのことを許しちゃってるんだって思って、私、それにも腹が立った」

「んん」

采奈と話をするのは、今日で三度目だ。

くるくると表情を変えて、明るくてうるさいくらいよくしゃべって、だから……屈託なんて何もないんだろうと太一は思っていた。いつも笑っているから、それが彼女の全部なのだと勝手に思っていた。

「でも、もしかしたら……お母さんもおばあちゃんも、とっくに知ってたのかな」

お父さんが死んじゃってたこと。呟くように言って、采奈は黙った。

太一は通りを行き交う人々に目をやった。面をかぶっている者の数は、最初に見かけた時よりずいぶん増えていた。

「……私も小さい頃、お祭りになるとお面を買ってもらって、嬉しくてかぶって走り回ってたなぁ」

同じように目の前の光景を眺めて、采奈がまた口を開いたので、太一はホッとした。このままずっと黙っていたら、どうしようかと思ったのだ。

「それでおばあちゃんに怒られたの。お面をかぶった時は、そんなにはしゃいじゃダメって」

「どうして？」

「お盆にお面をかぶるのは、あの世から帰ってきた人が自分の顔を隠して、そこにいるのをバレないようにするためなんだって。だからああしてお面をかぶっている人たちの中には、死ん

だ人もまじってるんだって。お面をかぶってるのにはしゃいだりしたら、死んだ人に失礼だよってこと」

「へえ」

面は、祭りに来た死者の顔を隠すためのもの。

「お面どころか、地方によっては盆踊りをする人がみんな黒い布を頭にかぶるところもあるみたい。それとかほら、女の人が編み笠をかぶってたりするじゃない？　口とか鼻しか見えないやつ。あれなんかもみんなで顔を隠して、見ても生きてる人なのか死んでる人なのかわからなくするためなんだって」

「和泉、物知りだな」

「そでもないよ」

采奈は座ったまま、下駄をつっかけた足をぶらぶらさせた。

「お父さん、どうして赤鬼のお面だったのかな。ドラえもんとかだったら、そんなに怖くなかったのに」

「……ドラえもんでも後をつけてこられたら、それなりに怖いと思う」

「うーん、そっかぁ」

采奈は揺らしている自分の足を見つめて、笑う。

「嘘みたいだね、本当に死んだ人が帰ってくるなんて。私、幽霊って初めて見たなぁ。足だっ

てちゃんとあったし、手で摑まれた時も生きてる人間みたいにぎゅっと固かったから、幽霊だって全然思わなかったよ。しかもなんと、それがジョウハツしたはずの自分の父親だよ？なんだかすっごい体験しちゃった」

「……あの人さ」

太一は思い切って言った。

「和泉に会いたかったんだと思う。和泉のことが心配で、ずっとついて来てたんじゃないかな」

ぶらぶらしていた采奈の足が、止まった。

「それで、さっきのあいつが襲ってきた時だって和泉のことをかばって、一生懸命守って……」

覆いかぶさるようにかばって、あの人は采奈を全身で守っていた。

「うー」

いきなり采奈が奇妙な声で唸った。

「和泉？」

「うーうーうー」

太一は彼女の顔を見て、しまった言わなきゃよかったと思った。

采奈の両目に見る見るうちに涙が盛り上がって、それがぽろぽろと、頬を流れ落ちた。

「そんなの、ひど、いよ……うー、今ごろ来て、幽霊なんかになっちゃって、うー、それくら

いなら……うーうー、いなくなっちゃったりしなきゃいいじゃないのよう、うー」

唸り声ではなく、泣き声だった。

太一はどうしていいかわからなくて、あるはずもないハンカチかタオルかティッシュを探してポケットやバッグの中をあさった。

（……御札はあるけど）

御札で顔を拭いたらまずいだろう、やっぱり。

あとは十遠見から買ったお守りと財布と百円ライターと、火が消えたままの提灯。役に立たない。

采奈は自分の浴衣の袖を摑んで、それがくしゃくしゃになるのもかまわずに顔を埋めると、また「うー」と言った。

「……うちね、お父さんの写真一枚もないの。……私、お父さんの顔、もう思い出せなくて……そしたらなんだか、自分が半分になっちゃったみたいで……ほんとに、そんな気がずっとしてて、お父さんなんかいらないって思ってたのに、時々怖くなるの……だ、だって、忘れちゃうってことは、それをなくしちゃうってことだから……」

采奈の声はくぐもって、湿っていた。

忘れることが悲しいことだなんて、太一はそれまで考えたこともなかった。

もし本当にそうなら、太一にも思い出さなければならないことがある。



——忘れるんじゃない。
その言葉を言った人のこと。
「でも和泉はさっき、お父さんだってすぐにわかったんだろ？」
「うん。顔を見たら『あ、お父さんだ』って……」
「忘れてなかったんだ。よかったな」
「……うん」
ひっくひっくと采奈はまだしゃくりあげていたが、やがて浴衣の袖から顔をあげ、まだ半分泣き顔のままで首をひねった。
「ところで阿川君、——さっきのって何のこと？」
「え？」
太一は思わず脱力した。
「もしかして、あれを見てない、とか？」
「あれって？」
本当に何も見ていなかったらしい。そういえば采奈は頭を抱えて地面にうずくまっていたのだ。きっと最後まで目もつぶっていたに違いない。
「ええと、つまり、さっきヘンなものがいて……」
血まみれの首なし男、とまではとても言えない。

「ヘンなもの？」
「……バケモノだか、幽霊だかが、包丁を持って襲ってきた」
口ごもりながら太一が言うと、
「えええ!?」
栄奈は素っ頓狂な悲鳴をあげた。
「そ、それでどうなったのっ？」
「御札を見せたら逃げた」
「お、御札!?」
仕方なく太一は、自分がバイトで見回りをしながら御札を貼っていることを打ち明けた。
栄奈はさっきまで涙をいっぱいにためていた目を、真ん丸くする。
「なんか阿川君て、いつも変わったバイトしてるよね。こないだのホタルモドキの捕獲とか」
「……うん」
「それもあのおっかない顔の人に頼まれたの？」
「ミヨシさん？　違うよ、今回は大家さんに頼まれて」
「へええ」
なぜか感心したみたいに、栄奈は何度もうなずく。それからはあっと大きく息をついた。
「世の中には不思議なことがあるんだね」

さっきの出来事を、不思議なことの一言で終わらせてしまうところがすごい。

その時、栄奈を呼ぶ声が聞こえた。

通りを行き交う人々の中に、こちらに近づいてくる年配の婦人の姿があった。すぐ後ろを、小学生くらいの男の子がついてくる。

「あれえ、おばあちゃんだ」

栄奈は自分の時計を見て、慌てたように立ち上がった。

「うわぁ、もうこんな時間！　たいへん、家に帰らなくちゃ。私、今日は十時までに帰るって言ってあったんだった！」

どうやら栄奈の帰りが遅いので、祖母と弟が心配して迎えに来たらしい。

「じゃあね、阿川君。あの、それから……どうもありがとう」

「え、なに？」

「阿川君も守ってくれたから。御札でオバケ、追い払ってくれたでしょ？　それに……お父さんのこととか、いろいろ」

栄奈は急に真面目な顔でぺこりと頭をさげてから、えへっと笑った。

「あのね、バイト頑張ってね。……じゃ、おやすみっ！」

駆け出した栄奈がまたも危なっかしく転びそうになりながら、彼女を待っている家族のところにたどり着いて、やがて通行人たちに混じって見えなくなるまで、太一は見送った。栄奈は

何度もこちらを振り向いて、手を振っていた。

死者を迎える祭りの夜は、そうして更けていく。

4

空栗荘では事件が起こっていた。

「うーん」

お露さんが唸る。

「うううーん」

柊二郎も腕組みをして、難しい顔で唸った。

空栗荘の玄関である。二人の前には、空っぽのガラスケースがあった。

ケースに貼ってあった御札が破れて、扉が開いている。中にいたはずのアカネの姿が消えていた。

「まいりましたねえ。まさか御札を破って逃げ出すとは」

「これしきの札じゃあの子には効かないってことさ。まったくあんたは、いつだってツメが甘いよ」

お露さんは肩をすくめた。

「とにかく、二人してうんうん言ってたって仕方がない。今夜は何が出るかわからないんだ。さっさと手を打たないと」

「アカネちゃんが襲われたりしたら、コトですからね。これはもう、十遠見さんたちにお願いするしかないでしょう。——お露さん、古都子さんの携帯の番号わかります？」

「あいよ」

お露さんが電話番号を記したメモを手渡すと、柊二郎はのそのそとガラクタの山に近づいて、中から電話機を掘り起こした。

「あ、もしもし、古都子さんですか？　柊二郎ですー、十遠見さんのお手伝い、ご苦労さまですー。そっち、どうですか？　……はあ、なるほど。はい……はい、成果を期待していますとあとのお二方にお伝えください。ところでですね、たいへん申し上げにくいことなんですが、実は……」

「……というわけで、アカネちゃんを探してほしいんですって」

携帯電話の通話を切って古都子が事情を告げると、まずミヨシが聞こえよがしに大きなため息をついた。

「俺らは今取り込み中やて言えや」

「一応、状況は説明したわ。成果を期待しています、ですって」
「あのクソ大家！」
「とはいえ、空栗荘のオーナーの依頼を無視するわけにはいかないだろう」と、こちらは冷静に十遠見が言う。
「おまえ、こんな時にようそない呑気なことが言えるな」
三人が今いるのは、賽河原町の住宅街の中にある小さな公園だ。あるのはベンチが二つとブランコとすべり台だけ、しかしそれらは塗り込めたような闇の中に埋没している。
夜とはいえ、その公園内の敷地だけが不自然に暗かった。
街灯の明かりは消えている。周囲の民家の灯火も敷地内には届いていない。
ふぅ、ふぅ、ふぅぅ……。
その闇の中から、獣のような息遣いが響いていた。
「柊さんの何がすごいかって、こんな隠形の呪法で遮断された空間にまで電話をつなげてしまうところだわ。普通は圏外だと思うけど」
「ええから古都子、おまえは後ろにさがっとけ」
ふぅ、ふぅぅ。……じゃっ！
闇の中のモノが吼えた。
「以漸悉令滅！」

十遠見が唱えた。

たちまち細い炎の線が、ぐるりと円を描いて地面を走る。炎の円陣の中で、そこにいたモノが姿をあらわした。

角と牙を生やした漆黒の化け物だ。大きさは子牛ほど、らんらんと目を光らせてこちらを睨んでいる。

この町に入り込んだ不浄が、このようなカタチをとって出現したのだ。

――十遠見とミヨシ、古都子は災厄をもたらす不浄の化け物を探し出して、この公園に追い込んだところだった。まさに取り込み中である。

「タニタヤ　カリニ　サタンバニ　ソバエンボク　ソバカ！」

十遠見の放った真言とともに、空気が動いた。ぐうっと身を屈め、人間たちに襲いかかろうとしていた化け物の身体が、その瞬間に凍りついたように静止した。

「ナウマクサンマンタ　バサラタン　カン！」

間髪いれず、ミヨシが指を組んで真言を叩きつける。いつもは気の合わなそうな二人であるが、見事な連携プレーだ。

化け物の全身がぼうっと熱のない炎に包まれる。

音のない衝撃が広がり、次の一瞬に漆黒の化け物は火の粉となって四散した。

「成就」と、十遠見が締めくくる。

空間を遮断していた術が解け、闇が払拭された。街灯が灯って、公園内の風景を何事もなかったかのように照らし出す。

「これで二匹片づいたな。まだおるのか？」

ミヨシが訊き、十遠見がうなずいた。

「最初のやつも今のも、邪気としてはたいしたことはない。今年に入ってからの事件や事故についても鑑みれば、もっと大物がどこかにいるはずだ」

「そいつも今夜中にカタをつけてしまわんとアカンわけか」

ミヨシはかしかしと頭をかいた。

「まったく、どういうことや。……今までかてこの町にやっかいなもんが出てくることはあったけど、人間がたてつづけに死ぬほどの不浄が入り込んだのは初めてやで。俺の知るかぎり」

「ここのように異界のとば口にある土地なら、これが普通なんだ」

十遠見はふふんと鼻を鳴らした。

「同じ役目をもつ土地は他に幾つもあるが、ひどいところになると不浄の気が祓えずに人間が住めなくなるケースもあるからな。賽河原町がこれまで平穏無事すぎたんだろう」

「よかったなぁ、十遠見。楽して給料がもらえる場所の担当で」

「まったくだ。半人前でも十分カタがつけられる程度の事件しか起こらないというのは、実に助かる」

「俺、ほんまおまえのこと嫌い」
「同感」
「――それでアカネちゃんは、どうやって探そうかしら」
二人のやりとりには我関せずの顔で、古都子が割り込んだ。
「もしかしたらアカネちゃん、太一君を追いかけて行ったんじゃないかとも思うんだけど」
「ああ、太一にえらいなついとるからな、アカネは。――けど、それはよけいにヤバいやろ。『つくも喰い』が出たら、太一には対処は無理や」
ミヨシが難しい顔をし、十遠見も考え込む素振りを見せた。
「とはいえ、そちらに人手をさくわけにはいかない。不浄とアカネを同時に探すというのも、効率が悪いな」
古都子が、ふと思いついたように「そういえば」と呟いた。
「これ、うちの師匠から預かってきたんだけど」
そう言って、肩にかけていた布袋――彼女がいつも工房へ通う時に道具を入れて持ち歩いているものだ――から、新聞紙でくるんだ両掌にのるほどの包みを取り出した。
「なんやそれは？」
「私も中身は知らないわ。困った時に使えって言われたのよ」
新聞紙を開くと、出てきたのは木彫りの猫だった。

綺麗に彩色まで施された三毛猫だ。くるんと丸まって寝ているポーズである。
一目見て、ミヨシが渋い顔をした。
「これが何の役に立つて？　猫やないか。しかも、寝とる猫やで？」
世の中に寝ている猫ほど役に立たないものはない。
そうねえ、と古都子も首をかしげてから、
「あ、わかった。きっと『猫の手も借りたい』っていう洒落じゃないかしら」
「……おまえの師匠、何を考えとるんや」
「失礼なことを言うな、ミヨシ」
十遠見は古都子の手から木彫りの猫を取り上げると、つくづくと眺めた。
「素晴らしい。見事だ。さすが、日光東照宮の眠り猫と比べても遜色のない出来栄えだな」
「もちろんよ。あれを彫ったのもうちの師匠ですもの」
「東照宮かて門の上で猫が寝とっても、魔除けにもならんやろ」
「無粋な。眠り猫は国宝だぞ。しかも日光東照宮はユネスコ認定の『世界遺産』だ。おまえは人類の宝にケチをつける気か」
「俺はユネスコに文句を言うとるんやのうて、猫に文句を言うとるんや！」
などとわいわい言い合っていると、くだんの木彫りの猫がいきなり動いた。
十遠見の手からするりと飛び降りて、地面の上でぐぐっと伸びをする。まさに本物の猫そっ

くり——というよりも、どこからどう見てもそれは生きた三毛猫だった。
猫は金色の目で三人を見ると、にゃんと一声鳴いて、そのまますると夜の闇に姿を消した。
古都子がうっとりと呟いた。
「師匠の彫ったものには命が宿る。——すごいわ。私も早く、あんな作品をつくってみたい」
「……いや、それはええけど」
「まったく、神業だ。惜しむらくは現代ではあれほどの作品に、値をつけることができないということだな」と、あくまで金にこだわる十遠見。
「せやから、ええけど猫、逃げてもうたで。猫の手の役にも立たんかったやないかっ」
まあ、そうである。
「もうええ。こうなったら奥の手でいく。レンに頼んでアカネを探してもらうからな」
ミヨシは公園の敷地を見回すと、見当をつけた樹にずかずかと近づいた。枝振りのいい桜である。春にはさぞかし見事に花を咲かせていたであろう、立派な樹だ。
その幹をコンコンとノックするように拳で叩いて、ミヨシは桜に話しかけた。
「もしもし、もしもーし。ええとな、レンに伝えてくれ。アカネがおらんようになってん。どこにおるか、見つけたら教えてくれて。どうか頼むー」
「——いつも思うけど、できれば人前でやりたくないわね。樹に話しかけるパフォーマンス

は」

ミヨシの姿を眺めて古都子が小声で言うと、十遠見は肩をすくめた。

「かなりマヌケな図だ。だから自分からは言い出したくないんだ」

必然的に言い出しっぺがやらなければならない。そういうことでなければ、十遠見も古都子もレンに頼るのが一番早いというのは、最初からわかっていたわけで。

「ところで今、何時だ？」

「午前0時を過ぎたところ」

古都子が携帯電話のディスプレイを確認する。

十遠見はうなずくと、メガネの銀縁に手を添えた。

「では、これからが本当の〝祭り〟だな」

「あ……！」

通行人の中に草色の浴衣（ゆかた）が見えたような気がした。太一は、思わずそちらにむかって足を早めた。

時刻は真夜中をとうに過ぎている。宵（よい）の頃（ころ）に比べれば、さすがにあたりの人通りも減った。子供や家族連れの姿が消えたからだ。

今はもう、道をそぞろ歩く者の大半がなにかしらの面をかぶっていた。素顔の者もちらほら

と混じっているが、多くは老人たちである。老人たちは言葉少なく、面をつけた者たちはさらに寡黙で、そのせいか祭りの華やいだ賑わいは熱がさめたように消えて、黙々と歩く人々の姿は、不思議な儀式でも見ているようだ。

早足になった太一の足下を、提灯の光がゆらゆらと照らし出す。

草色の浴衣の後ろ姿が、角を曲がった。同じように角を曲がると、もうその姿は道のずっと先にある。相手の足取りは別段急いでもいないのに、追いつけない。

さらに次の角を曲がると、いきなり空間が広がった。音と光が押し寄せて、それがあまりに唐突だったので、太一は目を瞠った。

目の前にあるのは、道なりに巡らされた金網のフェンス。そのむこうは——。

(学校?)

そこは小学校の校庭で、それまでどこにあるのかわからなかった祭りの喧騒の中心だった。

——盆踊りの会場である。

校庭の中心に櫓が組まれ、その上では法被姿の男性が太鼓で音頭をとっている。数珠つなぎにめぐらされた色とりどりの提灯の明かりの下で、人々が踊りの輪を描いていた。

フェンスのあちら側には夜店も並び、その前に集う人の姿も見える。

深夜という時間を考慮してか、しばらく前までスピーカーで流していた賑やかな音楽はもう聞こえない。ただ太鼓の音だけがドンドンと空気を掻き回し、それにあわせて輪の中の人々は

整然と、不自然なほどにそろえた動きで手や足をひらめかせている。
その光景を金網越しに見つめて、太一は何度も目をこすった。
（ヘンだな……？）
踊る人たちの姿が、時おり奇妙にぶれて、歪んで見えるのだ。まるで分厚い水槽の中をのぞき込んでいるみたいに。
とりあえず金網に沿って歩きながら、太一は草色の浴衣を着たあの女性の姿を探してあたりを見回した。
どこにもいない。もしかしたら校庭にいるのだろうか。そう思ってもう一度、盆踊りの会場に目をこらす。そして、
「あっ」
太一は思わず声をあげた。
見つけたのは草色の浴衣ではなかった。
校庭をととっと走り抜けた小さな姿。盆踊りにはえらく場違いな、ひらひらのエプロンとクリーム色のワンピース。
「……アカネ⁉」
どうしてここにいるんだろう。『つくも喰い』が出て危ないかもしれないからと、人形のままガラスケースに閉じ込められていたはずなのに。

見ていると、アカネの姿はすぐに明かりの消えた校舎の裏側に消えた。太一にはまったく気づいていないらしい。

（どこへ行くんだ？）

太一は金網から手を放すと、会場への入り口を探した。走って、校門から中に入る。

アカネのあとを追うために、校庭に踏み込んだとたん――。

静かだ、と思った。

むろんそんなはずはない。相変わらず櫓の上から太鼓の音が響いている。法被を着て太鼓を叩いている男は、どれだけ目をこらしても顔に影が落ちてよく見えない。人もたくさんいる。踊っている人、いない人、そのほとんどが面をつけていて顔がわからなかった。ずらりと会場に並ぶ夜店の半分くらいは、店じまいをしたのか明かりを消している。

静かだ。こんなに人がいて、こんなにうるさく太鼓の音が鳴っているのに。どうしてこんなふうに空気がしんとしてしまっているように感じるのだろう。

金網の外側から見た時には、音も光ももっとハッキリしていたように思う。

太一は大きくひとつ息をつくと、校舎の裏にむかった。

外から見た時にはわからなかったが、鉄筋の校舎の裏側にはもうひとつ、二階建ての古い木造の校舎があった。いわゆる旧校舎というやつだろう。今はもう使われていないのか、ところ

どころ割れた窓ガラスがそのままになっている。
（……トイレの花子さんがいそう）
肝試しにピッタリだ、などとボロさかげんを感心している場合ではない。
「あ、いた……！」
アカネはちょうど、木造校舎の玄関の扉を開けて、中に駆け込んでゆくところだった。なんだかすごく急いでいるような様子だ。
（どうしたんだろう？）
玄関の前まで来て、太一は一瞬ためらった。ガラスを透かした扉のむこうは真っ暗だ。しかし引き返すわけにもいかない。
覚悟を決めて、中に入った。
「……アカネ？」
ぷんと埃っぽいようなカビくさい臭いがした。朽ちて捨てられた物たちの、饐えた臭い。
提灯の火が、闇に沈んでいた校舎内の風景をゆらりと浮かび上がらせる。玄関には、壊れかけた靴箱が幾つも並んでいた。通り過ぎて、廊下。一歩歩くごとに、きし、きし、と足下で木の床が小さく音をたてる。廊下の片側につづく教室は、椅子も机も運び去られたあとで、どこもがらんとしていた。
そのまま提灯をあちこちにかざしてしばらく歩き回ってみたが、アカネは見つからない。

「二階かな」

廊下のつきあたりに、階段がある。やはり古びてぎしぎしと音をたてるその階段を、太一は転ばないように慎重に登っていった。

途中の踊り場まできた時、上のほうで物音がした。

「アカネ？　いるのか？」

二階の廊下に出ると、闇と饐えた臭いがいっそう濃くなった。

ぎしっ。

少し先で、廊下の床が鳴った。

「アカネ……？」

そちらに踏み出そうとして、太一は動きを止めた。

提灯の炎がすうっと翳り、すぐにそれが異変を告げる不吉な真紅に変わったのだ。

（アカネじゃない……別の、何かが……）

ぎしっ。ぎしっ。音が近づいてくる。重い足を引き摺るような音だ。体重の軽い女の子のたてる音ではない。

太一は提灯を下に置くと、バッグから御札を取り出した。素早くそばの壁に貼りつける。

ぎしり。

音が、また近づいた。

（消えない？）

慌てて二枚目を貼ったが、やはり何も起こらない。床に置いた提灯は、狂ったように赤い炎を揺らしているままで。

――御札が効かない。

ふぅ、ふぅ、ふぅ。

目の前の闇の中から、息遣いが聞こえた。

その瞬間、太一の背中をぞっと冷たいものが駆け抜けた。

直感だった。これは幽霊だとか妖怪とは違う。空栗荘の前で見かけた死霊なんかとはケタが違う。

凄まじい悪意。ただそれだけのモノ。

（……怖い）

心臓が早鐘のように打ちはじめる。

太一の中に、ずっと忘れていた感覚がつきあげた。

怖い。イヤだ。逃げたい。怖い、怖い怖い、――ここから早く逃げ出したい！

太一はじりっと一歩、あとじさった。震える足で、さらにもう一歩。

ふうぅぅ。

ほんの目と鼻の先で、呼吸か唸り声かわからない音が響いた。同時に。

圧倒的な質感で闇が動いた。太一めがけて。
「うわっ⁉」
その時、誰かが彼の襟首を掴んで、ぐいと後ろに引いた。
背後は階段だ。身体が宙に投げ出される。視界が真っ暗になる寸前、太一は銀色の光が何本も、闇を切り裂くように疾ったのを見た。
それは、銀の羽をひらめかせて飛ぶ蜻蛉の群れだった。

頭上で木の葉がぱらぱらと動いた。見上げると、街路樹が枝を一本だけ揺らしている。
「こっちや」
樹々がアカネの居場所をつきとめたらしい。さっきからそうやって、方角を示してはミヨシたちを誘導している。
「レンが携帯電話を使えれば早いんだけど、あの子、そういうものを身につけていると頭が痛くなっちゃうらしいから」
「難儀な体質やな、ほんま」
そうやって最後にたどりついたのは、盆踊りの会場となっている小学校——の、くだんの旧校舎である。
「アカネちゃん、どうしてこんなところに……？」

玄関の前で校舎を見上げ、古都子がまず疑問を口にする。その傍らで、ミヨシは表情を険しくした。

「なんでもええけど。――おい」

ああ、と十遠見もうなずいた。

「いるな」

「まさかアカネを追いかけとって、探しとった獲物にぶちあたるとはなぁ。まさに一挙両得、一石二鳥や」

「うむ。それは私の大好きな言葉だ。棚からボタモチも捨てがたいが」

「え、なあに？　まさかここで不浄が実体化しているってこと？」

言いながら古都子はすでに、玄関の扉に手をかけている。

「気をつけろ。大物や。邪気が建物からぷんぷん臭うとる」

「素敵。ここを取り壊す時に廃材をもらえないかしら。邪気の染み込んだ木だなんて、彫ったらおもしろそうだわ」

「……おまえ、仕事がからむとコワいこと平気で言うなあ」

古都子が扉を開け、彼女につづいてミヨシと十遠見も校舎の中に入った。

「こう暗いと、よく見えないわねえ。こんな時こそ柊さんの提灯が役に立つはずなんだけど」

「あれは今回は太一が持っとるからな」

「ああ、彼が見回りをしているんだっけ？」
「今年も俺がやるはずやったけど、なにせ不浄を片付けなアカンかったし。大家がバイトであいつにやらせたんや。雑魚くらいなら、太一でもどうにかなるやろから」
玄関のすぐ近くにあった部屋をのぞき込み、「職員室、異常なし」とミヨシは呟く。
「……そういうたら去年は、十遠見のせいでえらい目におうた」
「どんな目？」
廊下を歩きながらこしょこしょと小声で会話する二人の後ろで、「私が何か」と十遠見がとぼける。
「こいつ、厄除けやいうて八百円で俺にお守り売りつけよったんやけど、それが厄除けどころか、悪いもんを片っ端から呼び寄せるダークな呪符でな。おかげで雑魚がうようよ寄りつきよって」
「まあ非道」
「呼びよせるといっても、持っていた御札で封じられる程度の悪霊だ。わざわざ探して走り回る手間が省けてよかったじゃないか」
悪びれもせずに十遠見は言う。
「アホ。そのおかげで俺は、朝まで休みもせんと札を貼りまくる羽目になったんやで。割にあわんわ」

今年のほうがよっぽどラクや、雑魚がおらんからな、とミヨシは毒づく。
そういえば、と古都子は小首をかしげた。
「今年はずいぶんその類の雑霊や小物が減ったわね。途中で全然見かけなかったところをみると、太一君がよっぽど頑張ってくれている――」
ぴたっとその瞬間、古都子とミヨシの足が止まった。二人で、同時に振り返る。
「十遠見！」
「もしかして！」
事務室らしき部屋をのぞいていた十遠見が、なんだというように、二人を見返した。
「おまえまさか、太一に俺と同じ呪符を渡したんと違うやろな？」
「まあ、そうだな。……渡した」
「うわあ、やっぱりや」
「どうしてそんなことを？　いくら雑霊しか呼ばない呪符だって、太一君が可哀想でしょう。ミヨシならいくらこき使ってもかまわないけど」
「人を悪人のように言うな。彼が学生であることをちゃんと考慮して、本来なら八百円であるところを三百円にまけておいた」
「って、しかも金とったんかい⁉」
「……十遠見さん、あなたって人は」

古都子は心底呆れた口調である。
「本当にお金が好きなのね」
「それは誤解だ」
十遠見はメガネを指で押し上げると、きっぱりと断言した。
「私は金が好きなわけではない。貯金が好きなんだ」
「拝金主義者って言ってなかった？」
「愛と尊敬は別物だ」
「……ああそう」
ざわっ。その時、空気が震えた。
悪しきモノの気配――。
三人は素早く視線を交わしあう。
「こっちや」
ミヨシが真っ先に方向を見定めて、足を急がせた。
暗くてすぐにはわからなかったが、駆けつけてみるとそこは、二階に通じる階段だ。
「待て。何かいるぞ」
さらに近づこうとしたミヨシを、十遠見が止める。
「そらおるやろ」

「そうじゃない。――ほら」
コトコトコト、と小さな足音が響いた。階段を降りてくる。
そのまま一番下の段まできて、小さな人影が両足でぴょんと床に飛び降りた。ワンピースの裾がひらりと揺れる。
「アカネちゃんだわ」
呟いた古都子の隣で、ミヨシが「そういえば」と気の抜けた声を出した。
「俺ら、アカネを探してここへ来たんやったっけ」
不浄の気配にばかり気を取られて、そのことを軽く失念していたのだ。
アカネはこちらには気づかぬ様子で、たった今降りてきた階段を振り返ると、不思議そうに上を見上げている。
「アカネちゃん」
古都子が声をかけると、付喪の少女はきょとんとした顔を三人にむけた。
「何をしているの？」
「うん、あのね」小さな手があがって、階段の上のほうを指差した。「ヘンなモノがいるよ」
その言葉に呼応するように、ぎしっと、階段が鳴った。重いものを受けとめて踏み板がたわんだ、そんな音だ。
ぎしっ、ぎしっ、ぎしっ。

音が下に移動する。降りてくる。
それにつれて闇が少しずつ濃くなっていった。空気が緊迫する。
「アカネちゃん。こっちに来て。そっと、ゆっくりね」
古都子が静かな声で呼んだ。
アカネはうんとうなずくと、そっとと言われたにもかかわらず、いきなり跳ねるように駆け出した。
ぎしっ！
かろうじて保たれていた均衡が、その一瞬で破れた。空間が揺れる。アカネの背後で邪気が闇よりも黒い塊と化して、渦巻いた。
「臨兵闘者皆陣裂在前！」
十遠見の声が響いた。
「帰命したてまつる。一切の邪悪を結縛せよ。――オンキリウン　キヤクウン！」
ぴぃん、空気が弦を爪弾くように鳴った。アカネを絡めとろうと伸ばされた闇の触手が、空中で凍りつく。危機一髪で逃れたアカネを、古都子が抱き止めた。
「よし、そのまま押さえとけよ、十遠見！」
「いいから早くしろ。抵抗が強い」
ミヨシは前に飛び出した。

「ナモサンマンダボタナン　キリク　カ　ソバカ」
指を組みかえる。
「ナウマクサマンダ　バサラダン　カン！」
ごう、と闇が吼えた。廊下の窓ガラスが数枚、砕け散る。叩きつけられた波動に抗い、不浄の化け物は瞬時に気配を消した。封じられたのではない、階段の上へと移動したのだ。
要するに逃げたのである。
「信じられん。ここで仕留めそこなうか⁉」
「ボケ、おまえの術が先に破られたんやろ。最後までちゃんと縛っとけ！」
互いに怒鳴りながら、十遠見とミヨシは逃げた獲物を追って階段を駆け上がった。

「くそっ、どこへ、……おおっと⁉」
二階の廊下を走り抜けようとしていたミヨシは、ひとつの教室の前でつんのめるように足を止めた。
「ヤツはいたか？」
「おった」
追いついた十遠見に、ミヨシは目の前の教室を指差す。
「けど、なんやおかしなことになっとる」

「おかしなこと？」
「猫とにらめっこしとる」
「……」
二人してガラスの破れた窓から、そっと部屋の中をのぞき込んだ。
ふうぅぅ……。
ガランとした教室の容量を半分ほども埋めるようにして、黒々とした不浄の闇がわだかまっている。しきりに唸るような息遣いが聞こえた。
その正面に小さな生き物がちょこんと座って、臆する様子もなく、金色に輝く瞳で化け物を見据えていた。
ミヨシの言うとおり、それは一匹の猫である。
「あれ、さっきのミケと違うか。古都子の師匠の彫った猫」
「確かに。国宝パート2だな」
「どっか行ったと思うたら。何しとるんや、こんなとこで」
不浄が実体化した闇のごとき化け物と、木彫りの猫。大きさには圧倒的な差があったが、両者はまんじりともせずに睨み合っている。
と、膠着していた場の空気が動いた。
猫が立ち上がると、前足を伸ばして、ぐっと伸びをしたのだ。



次の瞬間。信じられないことが起こった。
まるでアクビでもするように、猫がかっと口を開いた。ひゅう、と風の吹きすさぶような響きが、その小さな身体から漏れた。
対峙する闇が、身を捩る。何かに抗ってでもいるみたいに。
そして――。
「嘘やろ？」
見守っていたミヨシが、呆然と呟いた。
それは、ほんの瞬きひとつの間のことだ。
化け物が消えた。猫の口の中に。
詳しく言えば、教室の半分ほどもあった黒い塊が、まるで煙のように揺らいだかと思うと、一瞬で三毛猫の小さな口に吸い込まれたのだ。
十遠見とミヨシは顔を見合わせた。
「喰ったであいつっ。あの不浄のバケモンをっ。しかも丸呑み――！」
「落ち着け。私もこの目で見た。……とても信じられないが」
邪気がきれいさっぱり消えた教室の中では、猫がすましてくるくると顔を洗っている。やがて、呆然としている人間の男二人を尻目に、とっとと廊下に出て夜の暗がりに姿を消してしまった。

しばしの沈黙のあと、十遠見が重々しく言った。
「一件落着だ」
「……ええんか、こんなオチで」
「賽河原町に入り込んだ不浄は、これですべて片付いた。我々で始末したと上には報告しておく。猫の話を出すとめんどうだ」
銀縁の奥から、十遠見はじろりとミヨシを見た。
「猫の手の役にも立たないと言っていなかったか？」
ミヨシは何か言いかけて、すぐにがっくりと肩を落とした。
「前言撤回します。すいません」
その時、古都子がアカネの手をひいて駆け寄ってきた。
「――どうなったの？」
「おまえの師匠の猫が出てきて、一気喰い。俺ら出番なし」
「まあすごい。……なんて感動している場合ではないの。これを見て」
古都子は持っていた提灯（ちょうちん）――火が消えて、半分潰（つぶ）れたようになったそれ――を二人に見せた。
「階段をあがったところで拾ったわ。――これは太一君が持っていたわけでしょう？」
ミヨシは束（つか）の間（ま）、提灯を睨んで、アカネのほうに顔をむけた。
「太一はここにおったんか？」

付喪の少女はふるふるっと首を振る。
「アカネは知らない」
「けど、これがあるてことは、ここにおったのは確かや」
「でも……それで？」
古都子が眉をひそめ、三人はそのまましんと顔を見合わせた。
まさか、と十遠見は呟く。
「このようなかたちで犠牲者を出すことになろうとは」
「……せめて探す努力くらいはしてから言ってね、十遠見さん」

5

一面に漆を流したような闇だった。
けれど、暗いとは感じなかった。自分の手も身体もはっきりと見える。
つっと銀色の光が視界をよぎった。見る間にそれは群れをなし、闇に輝線を描いて乱舞した。
蜻蛉だ。
太一はあたりを見回した。飛び交う銀色の羽のむこうに、草色の人影が揺れている。やはりこちらに背中をむけて、歩き去ろうとしていた。

今度は追いつけるだろうか。
太一は走り出した。蜻蛉の群れは彼を追い、追い抜かして、草色の浴衣の肩に袖に裾にとりついた。そのまま染み込むように同化して、白抜きの柄となる。
「待ってください！」
太一は叫んだ。
「山猫まわしの初緒さん！　……じゃなくて……っ」
息を大きく、ひとつ吸う。
「ばあちゃん！」
先を行く人影が、ひたと足を止めた。
白い狐の面が太一を振り返り、言った。
「当たりだ」

面を取り去ったその顔は、驚くほど若々しく、美しかった。後ろにひとつにまとめて括っただけの髪も、つやつやと黒く長い。
亡くなった時には幾つだったのだろう。太一が生まれてすぐのことだから、まだ十分若かったのかもしれない。
どうしてだか、祖母が儚くなった年齢も、名前さえも太一は聞かされておらず、これまで知

ろうともしなかった。
「ばあちゃん」
もう一度、近くまで行って太一は呼んだ。
初緒は目を細めると、いたずらっこのようにニヤリと笑った。そういう表情をすると、ますます年齢不詳だ。
「どうしてわかった？」
男のような太い声で訊く。
「なんとなく。……アカネや、妖怪たちが言っていることを聞いて」
「おしゃべりどもめ」
言って、初緒はまた笑う。
「守ってくれたの？」
妖しい夜店の道に引き込まれそうになった時と、たった今化け物に襲われた時と。それから多分、太一の知らないところで何度も。
「ありがとう」
「んん」
さっきの太一と同じように、初緒はなんともいえない相づちを返した。礼を言われて困ったらしい。

「立ち話もなんだ。座ろうか」
こんな何もないところに、と太一は首をかしげたが、祖母にならってその場に腰を落とした。ふかっと身体が沈んだ。青い匂いがたちのぼる。手を触れると、それはどうやら苔らしい。
「綺麗なところだろう」
「真っ暗だけど」
「そうか？　よく見てみろ」
言われて太一は目をこらす。そして気づくと、彼は樹木の生い茂る林の中にいた。
あたりは一面の緑。祖母と並んで座っている苔むした岩も、地面も、樹木の幹も、風にさざめく木の葉も。それらを映す空気さえもが、静謐な緑色に染まっていた。
枝葉の間から薄日が射し、すぐ近くで水の流れる音がする。
「ここ、どこ？」
「どこでもない場所だ」
初緒は言い、不思議と太一はその答で納得した。どこでもない場所でかまわないくらい、そこは気持ちがよくて静かで、綺麗なところだった。
しばらく黙って緑色の空気を呼吸してから、太一は訊いた。
「俺が子供の頃に会ってたのって、ばあちゃんの幽霊？」
「そうだ」

うん、と太一はうなずく。

——私が会いに来たのは内緒。

——いつまでもずっと、大好きだよ。

どうしてだろう。胸が痛かった。

少なくとも、太一がその優しい言葉を記憶していられるくらいまでは、祖母は会いに来てくれていたのだ。

「どうして来なくなったの？」

「そうだな」

初緒は膝で頬杖をついた。

「何事も執着はよくない。孫の顔を見るために、幽霊になってちょくちょく顔を出すなんて、執着のきわみじゃないか。自分で自分がイヤになったので、やめることにしたんだ」

「なのに今年の盆には出てきたわけ？」

初緒はあはは、と笑った。

「会わずに帰ろうかとも思ったんだが、おまえが何かと危なっかしいもんだから。わが孫ながら、けっこうマヌケに育ったな、おまえ」

わりと言いたい放題だ。死んでから口が悪くなったとは思えないから、きっと生前からこんなカンジの人だったのだろう。

「それに、言い忘れていたことがあったし」
「言い忘れていたこと？」
「さようならを、まだおまえに言っていなかった」
さら、さら、さら。頭上で木の葉が風に揺れる。
しゃらしゃらと、どこかで水のせせらぎが響く。
きれいで、哀しい音。
「どうして俺に、大好きだなんて言ったの？」
「大好きだからさ」
「好きってどういうことなんだろう」
太一は呟く。初緒は頬杖をはずすと、彼を見た。
「好きというのは、その人が気持ちのいいあったかい場所にいつもいて、笑っていてくれればいいと思うことだ」
「難しいんだな」
「この世で一番簡単なことさ」
なんでもないことのように、初緒は言った。
そうなのだろうか。
「俺は今まで、誰にもそんなふうに思ったことがない」

「それはつまらないな」
「……つまらないヤツっていうのは、よく言われるよ」
「そうか」
初緒はくっくっと喉を鳴らすように笑った。
「誰にもなんて言うのは、おまえの年では早すぎる。そういうことはあと六十年か七十年生きてから言え」
「そんなに生きられるかどうかわからないよ」
「生きるさ」
自信たっぷりに言って、初緒は微笑んだ。——おぼろな記憶の中にあった、日溜まりのようなあの微笑だ。
「私が守ってやる」
ふいに、胸が痺れたようになった。
なんだろうこれ、と思ってから、太一は自分が泣きたいほど嬉しいことに気がついた。
本当に守ってくれるかどうかなんてわからないけど、でもなんてことのないその言葉ひとつが、どうしてこんなに、陶然とするくらい優しいのか。
もっと祖母の声を聞いていたいと思った。もっとその言葉を。ずっと、いつまでも。喉が渇いて水が飲みたいと願う時みたいに、強くそう思った。

その時、どこからあらわれたのか一匹の三毛猫が、にゃあと一声鳴いて初緒の膝に飛び乗った。腕に頭をすりつけて、喉を鳴らす。

「満腹したか？」

にゃあ。

「さすがは名工左甚五郎（ひだりじんごろう）だ。腕は衰えていないな」

「ばあちゃんの猫？」

「いや、途中で拾ったんだ。腹をすかせているみたいだったから、餌（えさ）のいる場所まで連れて行った。食い終わったんで戻ってきたんだろう」

「へえ……」

そのあと、太一はぽつぽつと祖母と言葉を交わした。訊きたいことや言いたいことはいっぱいあったはずなのに、なんだかそんなことは頭に浮かばなくて、世間話みたいに他愛ない話ばかりをした。

初緒は膝の上の三毛猫を撫（な）でながら、時おり目を細めていたが、やがて猫を抱いて立ち上がった。

「そろそろ行くよ」

頭上で木の葉が、風に吹かれてざあっと大きく揺らいだ。

「……また来てくれるよね」

さあな、と初緒は言った。
「執着はよくない」
「好きと執着は違うの？」
「好きというのは相手を縛ることとは違う」
祖母の手がのびて、まるで小さな子供にそうするみたいに、太一の頭を撫でた。
触れられても嫌じゃなかった。むしろ――。
「あったかい場所にお帰り。おまえのまわりにはいっぱいあるよ。この場所と同じように、おまえにはまだ見えていなかっただけで」
言葉が終わるとともに、初緒の姿はもう、離れた木立のむこうにあったからだ。そのまま、こちらに背をむけて遠ざかる。
「ばあちゃん……!?　待って、アカネに会わなくてもいいの？」
今さら気づいた。アカネがなぜあの旧校舎に入って行ったのか。――初緒がそこにいたからだ。
「あの子には、もうさよならは言ったからな」
その瞬間、風の音もせせらぎの響きも消えた。
遠く、声だけが聞こえた。
「――さようなら」



視界が暗転した。

「あのバケモンに喰われたわけやないやろうな」

「いや、あれは人間を喰らうモノではなかったはずだ」

一通り旧校舎を探し回って、全員がまた階段のところに集まった。

「十遠見。おまえが悪い。おまえが厄よせの札をあいつに渡したせいや」

八つ当たり気味に、ミヨシが断言する。

「不浄がここで実体化したのは、私のせいではない」

珍しくムッとした顔を見せたところをみると、十遠見もそれなりに狼狽しているのだろう。

「ねえ、アカネちゃん。太一君がどこにいるかわからないかしら？」

あまり助けにならない男二人はおいといて、古都子はアカネに訊いた。彼女の手を摑んだまま、付喪の少女は首を振る。

「わかんない。でも太一は大丈夫だよ」

「どうして？」

「どうしてかわかんないけど、大丈夫なの」

要領を得ない答にあとの三人が顔を見合わせた時——。

ガタンッ、バンッ！

いきなり階段の中ほどで何かが転がるような音が響いた。
アカネが事もなげに言う。
「ほら、帰ってきた」
ミヨシがげっと呟いて、階段を駆け上がった。
踊り場でひっくり返っている太一を見て、呆れたように言った。
「どっから出て来たんや、おまえは……？」

いてて、と顔をしかめて身体を起こし、あらためて太一はギョッとあたりを見回した。
「あれ、ここ……？」
旧校舎だ。すぐそばに、ショルダーバッグが投げ出されたように落ちている。驚いたのは、目の前に空栗荘の面子三人と、アカネがいたことだった。
何が起こったんだっけと思ってから、思い出した。黒い塊に襲われて、後ろからいきなり引っ張られて階段を落ちた。律義にそのあたりからリプレイされたらしい。打ちつけた肘と背中がずきずきする。
「太一！」
座り込んだままの太一の首に手を回して、アカネがじゃれついてきた。
「とりあえず、無事ではあるようだ」と、十遠見。

「で？　今までどこにおった？」
ミヨシはひどく不機嫌な顔で太一を睨んだ。
「……どっか林の中」
としか、太一には答えようがない。
「林ィ？」
「なんか真っ黒な化け物みたいなのが襲ってきて……気がついたらそこにいて……」
太一はもごもごと口ごもった。アカネがいるから、なんとなく初緒のことが言い出せない。それに、どんなふうに説明しても他の人間にはわかってもらえない気がする。太一自身、言いながらそんなバカなと思ってしまうのだ。
「ふぅん」
ミヨシは探るように太一を見てから、他の二人と視線を交わしあった。
——そういうことか。
まるでそんな感じでうなずきあう。
古都子が口を開いた。
「とにかく太一君も見つかったことだし、外に出ましょうよ。ここにはもう何もいないわ」
旧校舎を出ると、十遠見が「今、何時だ？」と訊ねた。古都子が携帯電話で時間を確認する。
「午前三時四十七分よ」

「では、今年の祭りもあと一時間ちょっとで終わりだな」
校庭ではまだ盆踊りがつづいていた。
太鼓の音頭はもうなかった。薄ボンヤリとした提灯の火の下で、輪になって集う人々は静かに静かに、手をそろえ足をそろえて踊っている。笑い声も、話し声も聞こえなかった。
そこにそうしている人たちのほとんどが、すでにこの世にはいない者たちなのだと——太一にも、もうわかる。
「さすがにくたびれた。ちょっと休憩や」
ミヨシが校庭のベンチに腰を下ろし、太一に隣に座るよう顎をしゃくった。
十遠見は彼らから少し離れたところで、死者の踊りを監視するような目で眺めている。古都子はアカネを連れて、まだ開いている夜店をのぞきに行った。
「——おまえ、誰かに会うたか」
ミヨシは座ったままで大きく伸びをすると、太一のほうは見ずにそう訊ねた。
「え？」
「バケモンに襲われたあと」
「……ばあちゃんに会いました」
「そか」
それきり会話は途切れたかと思ったが、しばらくしてまたミヨシが声をかけてきた。

「最初におまえに会うた時にな、おまえのまわりにキラキラしたもんが見えたんや」
「キラキラ……？」
「光の粒みたいなもんかな。――これは誰かの想いや、誰かがこいつのことほんまに想うて守ってはったんやなて思った」
「――」
「せやのにおまえが、幽霊や妖怪なんてどうでもいい、自分には関係ないて言うから、あの時俺、正直ちょっとムカついたんやで。そんだけおまえのことを想うとってくれた人が、そんなふうに言われたら気の毒やないかて」
初めて空栗荘の廊下で出会った日。太一の言葉にミヨシは白々と目を細めていた。どうしてだか太一にはわからなかった。……あの時には。
「さっき、やっぱりおまえのまわりでキラキラしとるもんが見えて。その人に会うたんやなて、すぐにわかった」
「はい」
ミヨシは踊りの輪に視線を投げる。呟くように、
「死んでからも想いを残すてのは、すごいことやで。それが悪い想いやったらかなわんけどな」
太一は祖母のことを思った。

それから、和泉栄奈の父親のことを。

――栄奈が泣いたわけが、わかった。

彼女にえらそうなことを言ったけど、あの時にはやっぱり他人事だった。でも、もうわかる。

栄奈はきっと、嬉しくて悲しかったのだ。

死んだ人の想いが。

「これで仕事は片付いたし、今年の盆踊りも何事もなく終わりそうやな。ま、盆がすむまで気は抜かれへんけど」

もう一度伸びをしてベンチから立ち上がりかけたミヨシに、太一は思いきって訊ねた。

「その仕事って……」

「あぁ？」

「どうしてミヨシさんたちは、化け物や死霊を退治しているんですか？　ミヨシさんも十遠見さんも古都子さんやレンさんも、なんだか当たり前みたいにそれを仕事だって言ってますけど、考えてみたらすごく不思議なことをやってますよね。今回の俺のバイトだって全然普通じゃないし、妖怪たちはみんな大家さんのことをよく知っているし……」

「それで」

ミヨシは横目で太一を見ると、すとんとまたベンチに腰を下ろした。

「空栗荘って、何なんですか？」

「やっぱりおまえでも不思議か？　空栗荘に来た時から、それこそどうでもええて顔しとったくせに」

「……どうでもよくなくなったから」

そか、とミヨシはうなずいた。

しばらく眉を寄せて何事か考え込んでいたが、やがて「まあええわ」と呟いた。

「仕事でやっとるのは十遠見や。国から給料もろとるから。俺もまあ、大家から金を払うてもらうことがあるから、仕事半分修行半分てとこやな。古都子とレンはなんとなく空栗荘に流れついてきて、大家の仕事を手伝うようになったクチや」

「大家さんの仕事……？」

「境界守」

キョウカイモリ。もちろん太一が初めて耳にする言葉だ。

「賽河原町には表と裏があるやろ。そんなふうにあっちとこっちが繋がっていて、その出入り口みたいになっとる場所は、日本に幾つもあるんや。それをそのままにしとったら具合の悪いこともぎょうさん起こる。それで、大昔からそういう場所には管理人みたいなやつがおることになっとる。空栗荘の大家は、境界守と呼ばれるその管理人の一人――せやから、あっちの世界のやつにも顔がきくねん。あの大家がおらんかったら、あっちからこっち、こっちからあっちといろんなもんがあふれ出してきて、毎日が盆の騒ぎみたいなことになってしまう」

「――」
太一はミヨシの言葉を反芻した。
「――」
さらによく考えてみた。要するに空栗荘の大家というのは……。
「風呂の栓みたいなものですか？」
「は？」
「ないとお湯が流れ出すから」
ミヨシは呆れたように太一を見つめた。
「おまえ、それを大家に言うなや。聞いたら泣くで、あいつ」
「はあ」
何がいけないんだろうと思いながら、太一はうなずいた。
「なんか大家さんて、すごいんですね」
「まあな。大家の家は代々あそこで境界守をやっとるんや。一度境界守になったら、ずっとその場所から動くことはでけへんからな」
「それでどうして部屋番号が７８３７４で悩みなし、なんですか？」
「……ほんまになんも悩んでないっぽいところが、俺にもようわからん」
水風船を弾ませながら、アカネが古都子と一緒に戻ってきた。

「そろそろ行くぞ。まだ祭りは終了していない」
十遠見がベンチの二人に近寄って来て、促した。
「どうせ残っとったとしても雑魚やろ」
たちまち不貞腐れたような顔をして、ミヨシは立ち上がった。たとえ同じことを考えていても、彼が十遠見の言葉に素直にうなずくことはあまりない。
「ねえ、太一君。一足先にアカネちゃんを空栗荘に連れ帰ってくれないかしら。あとの見回りは私たちがやっておくから」
風船を嬉しげにいじくり回しているアカネを、古都子は太一のほうに押し出した。
「でも俺、このバイトは朝までって言われてるから、一応最後までやらないと……」
「大丈夫よ。もう朝だし、柊さんにはあとでちゃんと私から言っておく。それより、柊さんもお露さんもアカネちゃんのことを心配しているはずだから」
結局、提灯と御札を古都子に渡して、太一はアカネと一緒に空栗荘に戻ることになった。
「じゃあ俺、先に帰ります」
そう言ってアカネとともに歩き出した太一だが、いきなり肩にかけていたバッグを後ろから引っ張られて、つんのめった。
「わっ？」
「忘れるとこやった」

バッグを摑んだまま中に手をつっこむと、ミヨシはお守りの袋を摑み出した。そのままずいっと十遠見の鼻先に突きつける。

「金返せ、こいつに。今すぐ。三百円！」

なぜかわからないけどミヨシと古都子に口をそろえて「難儀やったな」「大変だったわね」と労われ、苦虫を嚙み潰したような顔の十遠見からお守り代の三百円を返してもらって、太一は帰路についた。

まだ街灯は灯っているが、空は少しずつ青く透き通りはじめていた。夜明けが近いのだ。通りには時おり面をつけた人影が行き交うほかは、ほとんど人影も絶えていた。

――もうじき、祭りが終わる。

「あのさ、アカネ……」

太一は傍らで鞠をつくみたいに水風船を弾ませている少女に、声をかけた。でも結局、そのまま口をつぐむ。

初緒のことは、やっぱり言わないほうがいいだろうか。

「太一は、初緒に会った？　ちゃんと会えた？」

どきりとして、太一はアカネを見た。

付喪の少女は並んで歩きながら、彼を見上げてニコリとした。

「う、うん」
「よかった。あのね、アカネはわかったんだよ。初緒が帰ってきたこと。それでね、アカネは太一を初緒に会わせてあげたかったの。それでねそれでね、初緒のところに行こうと思ったんだ。初緒に言いたかったから。――太一に会ってあげてねって」
「……」
「会えたの、よかったねえ」
屈託のない顔で言って、アカネはまた笑った。
(そうだったんだ)
そのために、この子はガラスケースから抜け出して来たのだ。初緒を追うために。太一のために。
「……アカネはよかったのか？　会いたかったんだろ？」
「アカネはね、――あっ⁉」
水風船のゴムが切れた。ばしゃっと音をたてて、アスファルトの上に落ちたそれが破裂した。
アカネは路上にしゃがみ込み、すっかり縮んで切れ端のようになってしまった風船を拾い上げる。
「割れちゃったな」
「うん」

「せっかく買ってもらったのに、残念だったな」
「ううん」
アカネは立ち上がると、大きな瞳でまじまじと太一を見た。
「なくしちゃったらね、仕方がないんだよ。――寂しいけど、仕方がないの。それでね、楽しかったなって思えばいいんだよ」
「――」
風船のことを言っているのか。それとも。
「……空栗荘へ帰ろうか」
「うんっ」
アカネはうなずくと、元気よく駆け出した。

6

「やれやれ。アカネが太一と一緒に帰ってきたよ。これで一安心かね」
裏庭に佇んでいた柊二郎のところに、お露さんが来て言った。
ところが柊二郎は答えない。何やら難しい顔で、「あー」とか「うー」とか唸っている。
「あんた、そこで何してるんだい」

もう一度声をかけられて初めて気がついたように、空栗荘の大家は相手を見た。
「ああ、お露さん……え、何ですか？」
「アカネが戻って来たんだよ。太一と一緒に」
「そうですか、それはよかったですね」
うなずいてから、柊二郎は渋い顔をした。
「ところでお露さん。ちょっとまずいことになりました」
「まずいこと？」
「ここの結界が破られてしまいました」
彼が指差した先――木の枝に、立派な蜘蛛の巣が幾つもかかっていた。そのひとつが、切り裂かれたように破れて枝から垂れている。
「いやあ、祭りにすっかり気を取られていたもので。燈台もと暗しとはこのことですね」
「何をバカなことを言っているんだい」
蜘蛛の巣と柊二郎を交互に見て、お露さんは心底呆れたように言った。
「ほんっとにツメが甘いよ、あんたは。――ほら、ボヤボヤしてんじゃない！　何が入り込んだか知らないけど、とっととカタをつけるよ！」

廊下の窓から見える空が、青から水色へと変わりつつあった。日が昇る前の、夜明けの空だ。

空栗荘に戻って来て、お露さんに「ただいま」の挨拶をして、そうしたらどっと疲れが出た。
とりあえず休もうと、太一は自分の部屋に直行した。――が。
０１４４のプレートのかかったドアの前まで来て、太一はふと足を止めた。
アカネも同じように足を止め、きょとんとして振り返る。
みしっ。
板のたわむような音がした。階段のほうから。
「――？」
みしっ。
今度は廊下の中ほどで音が響いた。
かなりイヤな予感がした。今回のバイトで培われてしまった感覚とでも言うべきか。
「なんかいるよ、太一」
「……いるな」
その言葉を待っていたかのように、それが姿をあらわした。最初はまるで陽炎のように空気が揺れて、次第に輪郭がはっきりしていった。
しかしその姿を、何と表現すればよいのだろう。
（ええっと……動くガラクタの山？）
としか言いようがない。ありとあらゆる器物――茶碗や靴といった日常品からパソコンの

ような電子機器まで――がごちゃごちゃにくっつきあって動いているのだ。大きすぎて廊下の幅にはおさまらず、ガラクタの一部は空気みたいに建物の壁を突きぬけていた。

何にせよ、化け物であることには違いなかった。

黒い冷気が、それを取り巻いている。だから良くないモノであることが、わかる。

ぶわっ。いきなりガラクタの化け物は、煙のような細い糸の塊を吐いた。

「きゃぁ!?」

一瞬空中をたなびいて広がり、糸がアカネの身体に絡みついた。

「――アカネ!」

とっさに太一は糸を切ろうとしたが、伸ばした手は素通りした。本当に煙みたいに、指で触れることもできない。なのに糸はぎりぎりと、暴れるアカネの身体を容赦なく締め上げている。

(でも、どうしてアカネを……?)

思ってから、太一はハッとする。

(アカネを狙ってるってことは……まさかこいつが『つくも喰い』!?)

つまりこのガラクタの山は、これまでこの化け物が喰った付喪というわけか。

まずい。このままではアカネが喰われてしまう。どうしよう、と太一は焦る。

その時だった。

「怒ったあぁ――――っ!!」

アカネが叫んだ。
「……え？」
風のようなものが駆け抜けた、と思った。次の瞬間。
ぴしっ。壁に亀裂が走った。
ぱり、っと窓ガラスに白いひびが入った。
「こんなのこんなの、許さないんだからねっ、アカネは怒ったんだからねっもう知らないからもうもうあんたなんかどっかへ行っちゃえええぇぇ――!!」
アカネは顔を真っ赤にして、大きな瞳ではったと『つくも喰い』を睨みつけた。
空間に圧力が増した。
ぴしぴしぴし。床が天井が音をたてた。
「あの、ちょっと、アカネ……？」
と、ガラクタの山のむこう側から声が聞こえた。
「もしもーし、アカネちゃーん！　落ち着いてください、お願いしまーす！」
柊二郎の声だ。
「すぐに助けますから。太一君がそばにいるんですから、ね？　ここはひとまず、穏便にー！」
アカネは目を見開いた。太一のほうに顔をむけて、あっと小さく叫ぶ。
「そっかあ。太一のこと、忘れてたっ」

廊下を駆け巡っていた風が止まった。

とたんに、アカネに糸を絡めたままの『つくも喰い』がズッと前に動く。ガラクタの山が大きく揺れて、そのままこちらに押し寄せてくるかに見えた——その時。

ばたんっ。

『つくも喰い』の目の前のドアが開いた。太一の部屋の、隣室のドアだ。

「うるさい」

この状況にしては渋い一言とともに、ドアの内側から巨大な腕がぬっと突き出された。これまた巨大な拳骨が、天井を素通りして振り上げられたかと思うと——。

次の瞬間、べしゃっとガラクタの山を叩き潰した。

「——⁉」

太一はぽかんと口をあけた。

一瞬ののちに、腕は部屋の中に巻き戻されるように消え、ドアはふたたび何事もなかったかのように閉ざされた。

「タカハシさん、ナーイス！」

潰れたガラクタのむこうには、柊二郎と、なぜかタスキ掛けにハタキで武装したお露さんの姿がある。

柊二郎が手で空気をかきまぜるような仕草をしたあとで、高らかに叫んだ。

「神火清明、神水清明、神風清明……！」

たったそれだけの言葉で、床に潰れたままだった『つくも喰い』に異変が生じた。寄せ集まっていた古い器物たちがたちまち黒い気体と化したかと思うと、そのまま空間の一点に吸い込まれ、瞬く間に消滅した。あとには茶碗ひとつ、残らなかった。

「はぁー、やれやれ。何とかなりましたねえ。……おや、太一君どうしました？」

太一はずるずるとその場にへたり込んだ。考えてみれば昨夜一晩——いや、最初に空栗荘を訪れた日から、いろいろなことがありすぎた。平気でいるのも、もう限界だ。

大丈夫ですかーと気の抜けた声で近づいてくる柊二郎を見ながら、

（……最近『ナイス』っていう人って、あんまりいないよなあ）

そんなどうでもいいことを、太一はぼんやりと考えていた。

「はいよ。最後の最後までお疲れだったね」

食堂でお露さんに熱いお茶をいれてもらって、太一はようやく落ち着いた。

すぐそばで、柊二郎がやはり茶をすすりながら、「よかったよかった」を連発している。

「いやあ、『つくも喰い』が侵入したとわかった時には、どうなることかと思いましたよ。ま、壊れたところは修繕しなきゃいけませんけど、その程度の被害ですんだのはよしとしましょう」

「それもこれも、あんたのうっかりのせいだろ。それで境界守とは、聞いて呆れるよ」
「面目もございません」
アカネはといえば、さすがに疲れたのか食堂に下りてきたとたんにコトンと寝入って人形に戻ってしまったので、先にお露さんがガラスケースにしまってきた。
「アカネちゃんはねえ、キレると暴発するんですよ。どっかんとね。いえ、どれだけ周囲を巻き込んでも、本人は無事なんですけど。――昨夜の外出を禁止したのも、『つくも喰い』が襲ってきたらそれこそキレるのはわかりきっていましたから。逃げ出したとわかった時には、ほんと心配しました」
その心配というのはつまり、「アカネが危険な化け物に襲われること」ではなく、「襲われた結果周囲がこうむる多大な迷惑」に対してであったらしい。
「神業といわれる名人が丹精こめて作った品には、人智を越えた力が宿るといういい例ですね、はい」
かなり強引に、柊二郎は会話を美しくまとめた。
「……もうひとつ、あるんですけど」
「タカハシさんのことですか？」
「はい。――人間じゃない、ですよね？」
「あー、腕だけでもあのサイズの人間があの部屋におさまるのは無理ですねえ」

柊二郎は湯呑みを口に運びながら、まったりと笑った。
「べつにあれがあの人の本当の姿ってわけじゃないですよ。タカハシさんはね、僕が生まれる前からあそこにいました。人間でも妖怪でも化け物でもない。霊なのかなとも思いますけど、本当の正体は誰も知りません」
でもね、と柊二郎はつけ加えた。
「あの人はあそこに存在している。それがわかっているだけでいいんじゃないかなと、僕は思っています」
「タカハシさん」という名前だって、本当は仮の呼び名なのだろう。名前も姿もわからない。でもそんなことに何の問題もないのだと、柊二郎は言った。
『174』のプレートのかかったあの部屋に、タカハシさんは確かに住んでいるのだから。
「……ところで、どうしてタカハシさんの部屋番号は『174』なんですか？」
「あれはヒトデナシ、と読みます。なぜなら住人が人間じゃないからです」
「人でなし？」
「で」が多いうえに、それは意味が違うだろう。
ガラガラガラ、とその時玄関の戸が乱暴に引き開けられた。つづいて、大声が響く。
「柊二郎！　柊二郎はいるか!?」
「うぎゃわっ」

空栗荘の大家は湯呑みを取り落とすと、素っ頓狂な悲鳴をあげた。
「おや、ようやくのご到着だ」
お露さんが横目で、にわかに色を失った柊二郎をちろんと見る。
「おおお、お露さん、すすみませんがその……！」
「言っておくけど隠れても無駄だよ。毎年同じことをやって、まだ懲りないのかい」
「いやしかしでも！」
そわそわと立ったり座ったり、大家のその尋常ではないうろたえぶりに太一が目を丸くしていると、荒々しい足音が近づいてきて、今度は食堂のドアがガラリと開いた。
「迎えに出るくらいせんか、この馬鹿息子――！」
あらわれたのは、和装に禿頭の大男である。ずかずかと柊二郎に近づくと、その首根っこを猫の子のように摑みあげ、割れんばかりの声で怒鳴りつけた。
「この敷地内に魔性の侵入を許すとは、なんたる未熟！　なんたる怠慢！　そもそもおまえには、境界を守る者としての自覚が足りん！　とっとと来い、この空栗荘の主としての心構えを、これからワシがたっぷりと叩き込んでくれるわ――!!」
「今の、大家さんのお父さんですか？」
襟首を摑まれて後ろむきに引きずられながら、「ひえぇ～、父上ご容赦を～」と情けない声

をあげている大家を見送って、太一は訊ねた。
「ああ。時国厳太郎。先代の家主さ。盆に戻って来るたびに、ああして息子にひとくさり説教をたれていくんだ」
ひっくり返った湯呑みを片付けながら、お露さんはやれやれと肩をすくめる。
「……盆にって。つまり」
「もちろん幽霊だ。二十年も前にきっちり死んでるよ」
パワフルな死者である。生きている人間でも、あれほど活力のみなぎっている者はそうそういないだろう。
「大家はその説教が苦手でね、毎年盆の入りになると現実逃避を始めるんだ。あんたも見たろ、昨日の朝の柊二郎をさ」
朝食の時に、「地獄の釜の蓋が開いた」とうわ言のように繰り返していた大家の様子を思い出して、太一はなるほどと思った。
（あれが現実逃避だったのか……）
お露さんは立ち上がると、割烹着の紐をきりっと結びなおした。
「さて、そろそろ他の連中も戻って来る頃だ。何か精のつくものでも作ってやらないとね。――あんたはどうする？　朝食ができるまで、部屋で待っているかい？」
「すみません。俺、先に一眠りしていいですか」

「ああ、いいともさ。好きな時間に下りておいで。今日は食事時間のリミットはなしだよ」
食堂を出て、太一は部屋にむかった。
廊下の窓の外は、眩い朝の光に満ちていた。早くも蟬が鳴きはじめている。
隣室の前を通りすぎようとした時、「おやすみ」と低い声が聞こえた。
足を止め、太一は『174』のプレートのかかったドアを見た。
(無視されてたわけじゃ、なかったんだ)
挨拶の時に姿を見せなかったから、拒絶されたのだと勝手に思い込んでいた。
——そんなふうに、自分には見えていなかった本当のことは、他にもたくさんあるのかもしれない。
「おやすみなさい、タカハシさん」
太一はそう言うと、自分の部屋のドアを開いた。

奇妙な一夜はこうして終わり。
空栗荘の新しい一日が、また始まろうとしていた——。

あとがき

こんにちは、霜島ケイです。ＧＡ文庫では初めまして、ですね。これからよろしくお願いします。

『カラクリ荘の異人たち』はいかがでしたでしょうか。願わくば、読んでくださった方に少しでもおもしろいと感じていただけるものであれば、いいのですが。

……それにしても、いつもそうですが初めてのレーベルというのは、どうにも緊張しますね（笑）。

ところでこの物語をはじめるきっかけは、この一言でした。

「白馬に乗った道頓堀の食い倒れ人形」

思い起こせば昨年のこと、担当Ｍさんとの最初の打ち合わせの時です。

「ええと、ヘンなものがいっぱい出てくる話を書いていいですか」

ストーリーはまだきまっていないけれど、とりあえず妖怪をメインにした話にしようかなと考えていた私は、Mさんにそう訊ねました。

するとMさんは厳かに、

「うちは基本的になんでもありです。ヘンなものでもいいですが、ものすごくヘンなものだと困ります」

「どれくらいまでのヘンなものならOKですか？」

「そうですね。たとえば白馬の王子が登場したとします。その王子がじーさんや赤ん坊なら許せますが、道頓堀の食い倒れ人形だったらダメです」

「……」

いやMさん、とっさにそんなたとえが真顔で出てくるあなたって……。

しかしその瞬間、私の頭の中にひとつの光景がまざまざと浮かびました。

背景・なぜか霧の湖畔。

そこに颯爽と登場する白馬に乗った——紅白の縞のピエロ服を着て、てこてこと太鼓を叩きながら首を左右に振っている、難波の名物食い倒れ人形（ちなみに本名は食い倒れ太郎です）。

「す、素晴らしいです、Mさん」

「やめてください」
「つまり今のは、私に『白馬に乗った食い倒れ人形』を書けという振りですね⁉」
「違います」
「ではそういう話を書くということで」
「書かないでください」
そんなわけでMさんの了承のもと、この『カラクリ荘の異人たち』を書くことになりました。
しかし書き上げてみると、なにやらボーッとした主人公が妖怪やら幽霊やら変人やらに囲まれて、ひたすら日常生活（？）を送るという、えらく枚数が多いわりにほのぼのな（多分）話になってしまった……。
というか、どこへ行ったんだ食い倒れ人形、確かプロット段階では登場予定人物の項にしっかり書いてあったはずなのに⁉
「すみません、Mさん！　話の展開の都合で、食い倒れ人形が出ませんでした！」
「だからその話は忘れてください！」
かくなる上は、次の巻には必ず……出るのか、食い倒れ人形？

唐突ですが、この国の異形なるものが好きです。人一倍怖がりで暗闇を歩くこともできないくせに、その闇に潜む幽霊や鬼やモノノケといったモノたちにひかれます。

振り返ればデビュー作は幽霊の出てくるコメディーもの、それ以来ずっと何らかのかたちでそういう闇のモノたちを描きつづけてきたように思います（と言いつつ、異世界ファンタジーなぞも書いていましたが）。

現在、他の文庫で鬼を主人公にした物語を書いていますが、機会があれば妖怪を主軸に据えた話を書いてみたいと思っていました。今回その機会を与えてくださったＧＡ文庫の編集部に、あらためて感謝しています。

それから、イラストのミギーさん。初めて絵を拝見した時に、その暖かく柔らかな水彩画で描かれる世界に惚れ込み、いつか自分の物語にイラストをつけていただきたいと、夢見るように願っていました。その幸運がこれほど早くに巡ってこようとは。依頼を受けてくださったと編集部から連絡があった時には、飛び上がって喜びました。本当にありがとうございます。

そして何より、最大の感謝はこの本を手にとってくださった皆様に。

次の巻で――またお会いできれば、これほど嬉しいことはありません。

霜島ケイ

ファンレター、作品の感想を
お待ちしています

〈あて先〉

〒107－0052
東京都港区赤坂4－13－13
ソフトバンク クリエイティブ（株）
GA文庫編集部 気付

「霜島ケイ先生」係
「ミギー先生」係

http://ga.sbcr.jp/

カラクリ荘の異人たち
～もしくは賽河原町奇談～

発　行　　2007年7月31日　初版第一刷発行
著　者　　霜島ケイ
発行人　　新田光敏

発行所　　ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒107－0052
東京都港区赤坂4－13－13
電話　03－5549－1201
03－5549－1167（編集）

装　丁　　株式会社ケイズ（大橋 勉／彦坂暢章）

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。
本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、かたくお断りいたします。
定価はカバーに表示してあります。
© Kei Shimojima 2007
ISBN978-4-7973-4298-7
Printed in Japan　　GA 文庫

GA文庫 作品募集のお知らせ

加速する超世代アドベンチャー！ 世代（Generation）を超えジャンルを超えた、フレッシュな感性の作品を大々的に募集中です。あなただけが織りなすことのできる10代～20代のライトノベル読者に向けた原稿をお待ちしております！

原稿募集要項

■原稿募集要項

広義のエンターテインメント小説作品（ラブコメ、ファンタジー、ミステリー、アドベンチャー、SF、伝奇、ホラー等）。未発表の、日本語で書かれたオリジナル作品。※他社に投稿したことのある作品（または同人誌で発表した作品など）は、その旨お書き添えください。

【応募資格】 年齢・プロアマ不問

【締め切り】 随時受付

【原稿枚数】 400字詰原稿用紙換算で300枚以上、500枚以内。

・A4サイズの用紙に（感熱紙不可）1行40字×40字を目安に、日本語の縦組みで作成した打ち出しデータ（データはフロッピーディスクまたはCD-ROMに焼いてください。ファイル形式はテキストでお願いします）を付けてご応募ください。

・別紙1枚目に氏名（本名）、筆名（ペンネーム）、年齢、性別、職業、略歴、住所、電話番号、400字詰め換算での原稿枚数、メールアドレス（所持している方に限り）、を明記してください。

・別紙2枚目に原稿のあらすじ・概要を1000文字程度で書いたものを添付してください。

※あらすじは、登場人物や作品の内容が最後までわかるように書いてください。例えば、「彼らを待ち受ける驚愕の事実とは……！」で終わってしまう「あらすじ」は、「あらすじ」ではなく「予告」です。ネタバレになっていても必ず最後まで内容をお書きくださるようお願いいたします。

・作品タイトル、氏名、ペンネームには必ずふりがなをつけてください。

【出版】

優秀作品はソフトバンク クリエイティブより刊行します。その出版権はソフトバンク クリエイティブに帰属し、出版に際しては当社規定の印税をお支払いします。

【原稿送付宛先】

〒107-0052 東京都港区赤坂 4-13-13 ソフトバンク クリエイティブ 3F
ジーエー文庫編集部「原稿募集」係

※応募原稿は返却いたしません。他社との二重応募不可、選考に関する問合せ・質問には一切応じかねます。

※応募の際にお書きいただいた名前や住所などの個人情報は、この募集に関する用途以外では使用いたしません。

イラストもあわせて募集中、詳しくはwebサイト“GA GRAPHIC”にて
http://ga.sbcr.jp/

9784797342987

ISBN978-4-7973-4298-7

C0193 ¥600E

1920193006001

定価 本体600円 +税

ジーエー文庫
発行:ソフトバンク クリエイティブ

カラクリ荘の異人たち
～もしくは賽河原町奇談～

異世界へ行く方法を尋ねられ「車か電車で行けば？」と答えた太一に、クラスメイトの采奈は「そんなのつまらないし、安易すぎ」と言った。

しかし、下宿することになった空栗荘へ向かうため彼が賽河原町でバスを降りると、そこは人でなく魚人やムジナ、のっぺらぼうに、喋るカラス――etcたちが行き交う、妖怪たちの住む町だったのだ。

おまけにたどり着いた空栗荘は、人間とはいえ一癖も二癖もあるような住人たちばかり……。

そんな「あちらとこちら」が混じり合う場所で新生活を始めた太一に巻き起こる、不可思議な出来事の数々とは？　賽河原町奇談開幕。